

陸海軍學校若クハ他ノ專門學校ノ召集ニ應シ其入學試験ニ合格シタルト
キハ直チニ該校ニ入學ルコトヲ得

第十一條 左ノ各項ニ該當スル者ハ宮内大臣ノ許可ヲ經テ學習院ヲ退學ス
ルコトヲ得

- 一 任官ニ因リ修學ノ餘暇ナキ者
- 一 疾病ニ罹リ成學ノ目的ナキ者

一 正當ノ事故ニ因リ他府縣下ニ轉住又ハ歸住セサルヲ得サル者

第十二條 左ノ各項ニ該當スル者ハ學習院長ノ承認ヲ經テ學習院ヲ退學ス
ルコトヲ得

一 海外留學ノ許可ヲ得タル者

一 第八條第九條ノ手續ヲ經テ入學試験ニ合格シタル者

一 學齡ヲ超過シタル者

第十三條 學齡者ニシテ海外留學ヲ志スカ又ハ陸海軍學校ヲ除クノ外他ノ
專門學校ニ入ルノ目的ヲ以テ其豫備ヲ爲サンカ爲メ適當ノ學校又ハ教師
ニ就キ修學センコトヲ望ム者ハ學習院生徒ハ學習院長ニ其他ハ宮内大臣
ニ出願ス可シ宮内大臣及學習院長ハ正當ノ事由アリト認ムルトキハ年月
ヲ限り之ヲ許可スルコトアルヘシ

第十四條 第十三條ノ許可ヲ受ケタル者ハ學習院生徒タルト否トニ拘ラス

學業上總テ學習院長ノ監督ヲ受クヘシ學習院長ハ適宜ノ方法ニ依テ其學
カノ進度ヲ查察シ進歩ノ效ナシト認ムルトキハ期限内ト雖モ再ヒ學習院
ノ課業ニ就カシメ又ハ宮内大臣ニ上申スヘシ

第十五條 學習院及ヒ他ノ學校ニ在學ノ生徒ニシテ疾病ヲ除クノ外三週日
以上ニ涉リ私ノ事故ヲ以テ課業ヲ缺クコトアルトキハ學習院生徒ハ學習
院長ニ其他ハ宮内大臣ニ出願スヘシ宮内大臣及學習院長ハ正當ノ事由ア
リト認ムルトキハ之ヲ許可スヘシ

第十六條 學齡者ニシテ學習院ニ於テ修學セス他ノ學校或ハ他ノ教師ニ就
テ修學スル者及海外ニ留學スル者ハ每學期其修業シタル課程ヲ記載シ華
族局長官學習院長ニ届出ヘシ

第十七條 學齡ニ至リ故ナク學ニ就カサル者或ハ學ニ就クノ後修業ヲ怠ル
者アルトキハ宮内大臣ハ華族局長官ヲシテ其戸主又ハ後見人ヲ督責セシ
ム

第十八條 許可ヲ得テ他ノ小學校等ニ就學スル者ハ宮内大臣時宜ニ因リ相
當ノ官員ヲ派遣シ修學ノ實況ヲ視察セシムルコトアルヘシ

第十九條 學齡者ノ就學未就學ニ關スル事項及ヒ督責獎勵等ニ關スル事項
ハ華族局ヲシテ之ヲ取扱ハシム

第二十條 華族局長官ハ毎年兩度一月八月ニ於テ來學期度華族ノ男子就學

年齡ノ者ヲ取調ヘ其名簿ヲ作り宮内大臣ニ上申シ且學習院長ニ報告スヘシ

第二十一條 華族局長官ハ學習院外ニ在ル學齡者ノ修學ニ關スル事項ヲ取調ヘ時々之ヲ學習院長ニ報告シ又學習院長ハ學習院生徒ニ關スル事項ヲ取調ヘ時々之ヲ華族局長官ニ報告スヘシ

第二十二條 就學及修學ニ關スル督責ヲ受ケ正當ノ理由ナクシテ之ヲ緩慢ニ付スル者及紀律ヲ犯シ退學ヲ命セラレタル者ハ共ニ懲戒ノ處分ヲ被ルコトアルヘシ

第二十三條 退學ヲ命セラレタル者一年ノ後親族連証シテ學習院ヘ入學ヲ請フトキハ宮内大臣ハ其事情ニ因リ之ヲ許可スルコトアルヘシ

○教科用圖書

○教科用圖書檢定條例 明治二十年五月 文部省令第二號

明治十九年五月 文部省令第七號教科用圖書檢定條例ヲ廢シ師範學校小學校及中學校教科用圖書ノ檢定ニ關スル規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

教科用圖書檢定規則

第一條 教科用圖書ノ檢定ハ止タル圖書ノ教科用タルニ弊害ナキコトヲ證明スルヲ旨トシ其教科用上ノ優劣ヲ問ハサルモノトス

第二條 圖書ノ出版者ハ該圖書ノ檢定ヲ文部省ニ請フコトヲ得

第三條 第二條ニ依リ檢定ヲ請フ者ハ圖書一種ニ付其目的トスル所ノ學校一種毎ニ該圖書二十部ノ定價ニ等シキ手数料及該圖書二部ヲ檢定願書ニ添ヘ地方廳ヲ經テ文部省ニ納ムヘシ但定價ヲ記載セサル圖書ニ就テハ手数料金十五圓ヲ納ムヘク又檢定ヲ得タル後定價ヲ増加シタルトキハ本文ノ例ニ準シ其差額ヲ追納スヘシ

第四條 第二條ニ依リ檢定ヲ請ヒタル圖書中瑣少ノ修正ヲ加フレハ檢定ヲ與フルコトヲ得ヘシト認ムルモノアルトキハ其廉チ檢定出願者ニ指示スルコトアルヘシ

第五條 檢定シタル圖書ハ文部省ヨリ官報ヲ以テ其名稱、冊數、定價、目的トスル學校並學科ノ種類、版權免許又ハ出版届ノ年月日並該圖書ニ記載スル所ノ著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ヲ廣告スヘシ

第六條 檢定ノ効力ハ檢定ヲ得タル後修正ヲ加ヘタル圖書ニ及ハサルモノトス

第七條 第五條ニ依リ廣告シタル定價、版權免許又ハ出版届ノ年月日並著譯者及出版者ノ族籍住所姓名等ニ異動ヲ生シ圖書中其記載方ヲ變更シタルトキ又ハ同條ニ依リ廣告シタル冊數ヲ變更シタルトキハ更ニ官報ヲ以テ其旨ヲ廣告スルニアラサレハ檢定ノ効力該圖書ニ及ハサルモノトス

ス

第八條 檢定ヲ得サリシ圖書ノ出版者ノ願ニ依リテハ其圖書ノ檢定ヲ得サ
リシ事由ノ大要ヲ指示スルコトアルヘシ

第九條 檢定出願中ノ圖書若クハ檢定ヲ得タル圖書ニ修正ヲ加ヘ檢定ヲ請
フ者ハ更ニ第三條ノ手数料ヲ納ムルコトヲ要セス

第十條 圖書ノ出版者ハ其檢定ヲ得タル圖書ニシテ第七條ノ變更アルニ會
スルトキハ其事項ノ廣告ヲ文部省ニ請フヘシ

第十一條 檢定ヲ請ヒタル後其願下チナストキト雖モ其既ニ納メタル手數
料ハ之ヲ還付セサルモノトス

第十二條 本規則ニ於テ修正ト稱スルハ圖書ノ名稱ヲ變更シ文章字句圖畫
ヲ増減若クハ校訂シ又ハ字體書形ヲ變更シ又ハ註解附録序跋ヲ加除若ク
ハ變更スル等ノ場合ヲ包含スルモノトス

○舊檢定済教科用圖書

明治二十年五月
文部省令第三號

明治十九年五月文部省令第七號教科用圖書檢定條例ニ依リ檢定ヲ得タル教科
用圖書ハ本年五月文部省令第二號教科用圖書檢定規則ニ依リ檢定シタルモノ
ト同一ノ效ヲ有スルモノトス

○明治二十年五月文部省訓令第六號

北海道廳 府縣

管内中學校ノ教科用ニ充ツルヲ要スル圖書ニシテ未タ文部大臣ノ檢定ヲ得
サルモノアルトキハ之カ檢定ヲ請フヘシ

○明治二十年五月文部省訓令第八號

北海道廳 府縣

本年五月文部省令第二號教科用圖書檢定規則第七條ノ變更アルニ會シ未タ檢
定ノ效力ヲ得サル圖書ニシテ其管内學校ノ教科用ニ充ツルヲ要スルモノア
ルトキハ其變更事項ノ廣告ヲ請フヘシ

○教科用圖書檢定願書差出方

明治二十年五月
文部省告示第四號

本年五月文部省令第二號教科用圖書檢定規則第二條ニ依リ教科用圖書ノ檢定
ヲ請フ者ハ該圖書一種毎ニ左式ノ檢定願書ヲ差出スヘシ

(檢定願書様式畧之)

願書記載方心得

圖書ノ名稱 改正増補等ニ係ルモノハ其旨ヲ記スヘシ

卷冊ノ記號頁數 一卷二卷前編後編上中下或ハ一號二號三號等ノ別ヲ掲ケ

冊數若クハ軸數等ノ總計ヲ記スヘシ

著譯者ノ族籍姓名 姓名ノ下ニ著述翻譯編纂等ノ別ヲ記スヘシ

出版者ノ族籍住所姓名 分版ニ係ルモノハ原出版者ノ族籍住所姓名ト分版者

ノ族籍住所姓名トチ並記シ無版權圖書ノ翻刻ニ係ルモノハ原版者ト族籍住所姓名ト翻刻者ノ族籍住所姓名トチ並記スヘシ
 版權免許又ハ出版届ノ年月日 改版ニ係ルモノハ改版ノ年月日ヲ記シ分版ニ係ルモノハ原版ノ年月日ト分版ノ年月日トチ並記シ無版權圖書ノ翻刻ニ係ルモノハ原版ノ年月日ト翻刻ノ年月日トチ並記スヘシ
 ○明治二十年五月文部省訓令第七號

北海道廳 府縣

小學校及中學校教科用圖書ノ檢定ヲ請フトキハ該圖書一種ニ付其目的トスル所ノ學校一種毎ニ該圖書二部ヲ檢定申請書ニ添ヘテ納ムヘシ

○公私立小學校教科用圖書採定方法 明治廿年三月文部省訓令第三號

北海道廳 府縣

公私立小學校教科用圖書採定ノ方法左ノ通心得ヘシ

公私立小學校教科用圖書採定方法

第一條 北海道廳長官府縣知事ハ公私立小學校ノ教科用圖書ヲ新定又ハ更定セントスルトキハ其都度小學校教科用圖書審査委員ヲ設ケテ其事由ノ當否實施ノ時期等ヲ審議セシメ併セテ圖書ヲ採擇セシムヘシ
 第二條 審査委員ハ左ノ諸員ヲ以テ組織スヘシ

- 一 尋常師範學校校長若クハ長補
 - 二 學務課員一名
 - 三 尋常師範學校教頭及附屬小學校上席訓導
 - 四 小學校教員三名
 - 五 該地方經濟上ノ情況ニ通スル者二名
- 第三條 北海道長官府縣知事ハ審査ニ係ル圖書ニ掲載スル所ノ事物ニ通スル教員等ヲシテ該圖書ノ採擇上ニ限り審査委員ト同一ノ資格ヲ以テ便宜之ニ參與セシムヘシ但一種類ノ圖書ニ付一名ニ限ルヘシ
- 第四條 審査委員ニ於テ審査上ニ關スル事項ヲ決定スルハ會議ニ依ルヘキモノトス
- 第五條 北海道廳長官府縣知事ハ審査委員中ニ就キ審査委員會議ノ議長ヲ命スヘシ
- 第六條 審査委員ハ自己及其親屬並其地方廳學務課員ノ著撰譯述編纂校閱及出版等ニ係ル圖書ヲ採擇スルコトヲ得サルモノトス但己ムヲ得サル場合ニ於テハ北海道廳長官府縣知事ニ其事情ヲ詳具シ認可ヲ經テ本文ノ例ニ依ラサルコトヲ得
- 第七條 審査委員ハ未タ文部大臣ノ檢定ヲ經サル圖書ト雖モ之ヲ採擇スルコトヲ得

但北海道長官府縣知事ハ本文ニ依リ採擇シタル圖書ヲ新定又ハ更定ノ圖書ニ充ントスルトキハ豫メ文部大臣ノ檢定ヲ經ヘシ

第八條 審査委員ニ於テ審査ヲ終ルトキハ其意見及會議ノ願未チ具シ北海道廳長官府縣知事ニ申報スヘシ

第九條 北海道廳長官府縣知事ニ於テ教科用圖書ヲ新定又ハ更定スルニハ一學科ニ就キ一種ノ圖書ヲ採擇スヘシ但都鄙山海等土地ノ情況ニ依リ己チ得サル場合ニ於テハ一學科ニ就キ二種以上ノ圖書ヲ採擇スルモ妨ケナシ(明治二十一年文部省訓令第三號ヲ以テ改正)

第十條 北海道廳長官府縣知事ハ教科用圖書ノ新定又ハ更定ヲ公布スル二箇月前ニ於テ其事由實施ノ時期圖書ノ目錄及第八條審査委員ノ申報又第六條但書第九條但書ノ場合ニ屬スル處分アルトキハ其事情ヲ具シ文部大臣ニ報告スヘシ(明治二十一年文部省訓令第三號ヲ以テ本條中第六條但書ノ下ニ第九條但書ノ五字ヲ加フ)

○明治二十年五月文部省訓令第九號

北海道廳 府縣

本年^三月文部省訓令第三號公立小學校教科用圖書採定方法及本年^五月文部省訓令第六號發令前ニ於テ檢定未濟ノ圖書ヲ以テ教科用ニ充テタル向ハ此際該圖書ノ檢定ヲ請フ儀ト心得ヘシ

○明治二十年九月文部省訓令第十二號

北海道廳 府縣

本年^三月文部省訓令第三號公立小學校教科用圖書採定方法ニ依リ新定若クハ更定シタル圖書ハ四箇年ヲ經ルニアラサレハ之ヲ變換スヘカラス又該圖書ハ之ヲ課スヘキ最下ノ學級ヨリ用ヒシメ其他ノ學級ニハ從來ノ教科用圖書ヲ襲用セシメ漸次各學級ヲシテ新舊交換セシムヘシ

但本文ニ依リ難キ特別ノ事情アルニ於テハ文部大臣ニ稟中スヘシ

○尋常師範學校教科用圖書明治二十年三月 文部省訓令第四號

北海道廳 府縣

尋常師範學校教科用圖書ノ儀ハ該學校教員ノ會議ニ付シ取調ノ上文部大臣ノ裁定ヲ經ヘシ

○報告

○學事關係ノ公布申報方明治十九年十一月 文部省令第二十號

北海道廳 府縣

學事ニ關スル廳府縣令ハ其公布ノ都度文部省ニ申報スヘシ但豫メ稟申シタル件ハ此限ニアラス

○學事年報取調條項明治十九年十月 文部省訓令第九號

北海道廳 府縣

學事年報取調條項並ニ諸表樣式自今左ノ通相定ム曆年ノ調査ニ據リ翌年三月限各一通差出スヘシ
但諸表樣式ハ別ニ配布ス

學事年報取調條項

一管内學事ノ狀況

學事施設ノ要領及學事ノ現狀ヲ概記スヘシ

一學區

區需變更ノ緣由廣狹適否ノ狀況等ヲ記載ス可シ

一學齡兒童就學

就學兒童増減ノ原由及就學督責ノ實施其他學齡就學ニ係ル總テ狀況方法等ヲ記載ス可シ

一小學校

公私立學校設置廢止ノ緣由諸般ノ準備生徒修業ノ狀況其他父兄ノ職業ニ關シ在學ノ長短學業進否ノ趣ヲ異ニスル等ノ事項ヲ記載スヘシ

一小學教員

教員ノ資格待遇ノ狀況需用供給ノ關係等ヲ記載スヘシ

一中學校

公私立學校設置廢止ノ緣由教員ノ資格生徒ノ増減及學業ノ進否(等級人員卒業生ノ數等ハ可及的精密ヲ要ス)生徒卒業後ノ狀況等ヲ記載ス可シ

一師範學校附教員講習所等

教員ノ資格生徒養成ノ狀況學業ノ進否(前ニ同シ)並ニ教員講習所ノ設置小營業ノ配置其他授産法ノ改良ニ係ル方法等ヲ記載スヘシ

一專門學校

學校設置廢止ノ緣由教授ノ要旨教員ノ資格生徒ノ増減學業ノ進否(前ニ同シ)他其諸藝ニ關スル教育ノ現狀ヲ觀察スルニ足ルノ條項ヲ記載スヘシ

一高等女學校

學校設置廢止ノ緣由教員ノ資格生徒ノ増減學業進否ノ狀況等ヲ記載スヘシ

一各種學校

學校設置廢止緣由教授ノ要旨教員ノ資格生徒ノ増減學業進否ノ狀況等ヲ記載スヘシ

一教科用圖書

教科用圖書ノ適否需用供給ノ關係等凡ソ教科用圖書ニ係ル狀況ヲ記載スヘシ

一幼稚園

- 幼稚園ノ現況及學齡未滿幼兒ノ保育ニ係ル方法狀況等ヲ記載スヘシ
- 一 書籍館及教育博物館
- 書籍館及教育博物館ノ現況並將來設置ノ方法其他開館日數閱覽人ノ増減等ヲ記載スヘシ
- 一 公學資
- 府縣立町村立學校等經濟ノ要領授業料徵收ノ方法寄附金ノ増減收支ノ方法費金ノ豐歉學校資財増減學資蓄積等總テ學校維持並理財上ノ得失ニ係ル事項ヲ記載スヘシ
- 一 府縣會區町村會
- 教育費ニ係ル議事ノ梗概ヲ記載スヘシ
- 一 教育會
- 組織並議事ノ梗概ヲ記載スヘシ
- 一 學事關係職員
- 學務課吏員及學務擔任郡區吏戶長等凡學務關係職員事務ヲ措辨スル總テノ狀況及方法等ヲ記載スヘシ
- 一 學事監督及獎勵
- 學務官吏巡視監督ノ狀況並教員生徒等獎勵ノ要領ヲ記載スヘシ
- 一 將來學事施設上ノ要領
- 一 其他學事ニ申報スヘシ

第十五類 衛生

○衛生會

○地方衛生會規則 明治二十年四月 閣令第十号

地方衛生會規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治十二年^{十二月}太政官第五拾五号達地方衛生會規則明治十三年^{四月}太政官達東京地方衛生會規則ヲ廢ス

地方衛生會規則

- 第一條 地方衛生會ハ府縣知事ノ監督ニ屬シ警視總監府縣知事ノ諮問ニ應ジテ其府縣内公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ヲ審議ス
- 第二條 地方衛生會ハ府縣内公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ニ就テハ警視總監府縣知事ニ建議スルコトヲ得
- 第三條 地方衛生會議事規則ハ該會ニ於テ之ヲ議定シ府縣知事ノ認可ヲ請フヘシ
- 第四條 地方衛生會ニ職員ヲ設クルコト左ノ如シ
- 會長 府縣知事ヲ以テ之ニ充ツ
- 委員 府縣第二部長

警部長東京ハ警視廳第一局長

府縣廳所在地ノ郡長又ハ區長

府縣會常置委員

醫師

獸醫

化學家

臨時委員

書記 府縣廳ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 會長ハ本會議事規則ニ依リ議事ヲ整頓シ其議定セシモノヲ警視廳總監府縣知事ニ具申ス

第六條 會長事故アルトキハ開會當日上席人ヲ以テ其事務ヲ代理セシム

第七條 委員中東京府京都府大坂府ノ區長及醫師獸醫化學家臨時委員ハ府知事之ヲ命ス但獸醫及化學家ハ其人ヲ得セサルトキハ缺員ト爲スコトヲ得

第八條 委員中官職ナキ者ニハ手當並ニ旅費ヲ給スルコトヲ得

第九條 書記ハ會長ノ指揮ヲ受ケ議事ヲ筆記シ及文書計算ニ從事ス

常置委員ハ常置委員改選毎ニ該員中ニ於テ互撰シ府縣知事之ヲ命ス

常置委員ハ常置委員改選毎ニ該員中ニ於テ互撰シ府縣知事之ヲ命ス

○傳染病

○傳染病豫防規則

明治十三年七月 第三十四号布告

明治十二年(八月)第三十二号虎列刺病豫防假規則ヲ廢シ傳染病豫防規則左ノ通相定候條此旨布告候事

傳染病豫防規則

總則

第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、腸窒扶私、赤痢、寶布埜利亞、發疹窒扶私、及痘瘡ノ六病ヲ云フ

但六病ノ外流行病アリテ其勢盛ナルノ兆アルキハ地方長官ハ內務省ニ具申シ豫防法ヲ施行スヘシ

第二條 醫師ノ傳染病ヲ診斷スル者ハ遅クモ二十四時間ニ之ヲ患者所在ノ町村戶長ニ通知スルヲ要ス戶長ハ速ニ之ヲ郡區長及最寄警察署ニ通知シ

郡區長ハ速ニ之ヲ地方廳(東京府下ハ府廳及ヒ警視本署)ニ届出ヘシ(明治十

八年第 廿四號布告ヲ以テ(衛生委員)トアルヲ總テ(戶長)ト改ム以下同シ)

但土地ノ便宜ニ依リ醫師ヨリ直ニ警察署ニ届出警察ヨリ戶長ニ通知ス

ルモ妨ナシ

地方廳ハ一週間毎ニ新舊患者及治愈死亡ノ數ヲ內務省ニ申報スヘシ(明治十

年第五十四號布告
ヲ以テ本項追加

第三條 地方長官ハ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルキハ其性狀ヲ記シテ速ニ之ヲ内務省ニ申報シ且ツ其管内及隣接若クハ船舶交通ノ府縣最寄兵營其他碇泊ノ軍艦等ニ報告スヘシ(全上布告ヲ以テ)

第四條 (全上布告ヲ以テ)
(以テ削除)

第五條 諸官廳、兵營、軍艦、監獄及ヒ官立ノ學校、病院、製作所、等ニ於テ傳染病者アルキ其主長ハ該地方官ト協議シ此規則ニ從ヒ豫防法ヲ施行スヘシ

第六條 虎列刺、赤痢、發疹瘰癧、疥癬ノ流行ニ際シ地方長官ニ於テ豫防ノ爲メ避病院ヲ要スヘキト認ムルキハ内務卿ニ具狀シテ之ヲ設クルヲ得

但人民協議ヲ以テ避病院ヲ設クルハ地方長官ノ許可ヲ請フヘシ

第七條 醫師並ニ戶長ニ於テ傳染病者ノ看護行届カス若クハ病毒ノ傳播ヲ防キ難シト認ムル者ハ避病院ニ入ラシムヘシ

第八條 掛リ官吏ハ傳染病者アル家ニハ其病名ヲ書シテ門戸ニ貼付シ要用ノ外他人ト交通ヲ絶タシムヘシ

但患者治愈死亡又ハ避病院ニ入りタル後相當ノ消毒法ヲ行ハサル間ハ仍ホ本條ヲ遵守セシムヘシ

虎列刺病

第九條 虎列刺病者ノ排泄物及ヒ汚穢物ハ其運搬夫ヲ設ケ一定ノ場所ニ運輸シ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘカラス且ツ他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十一條 虎列刺病者ニ用ヒタル臥具衣服器具及ヒ船室病室等ハ消毒法ヲ行フニアラザレハ再ヒ之ヲ用ヒ又ハ受授賣買スルヲ許サス

第十二條 虎列刺流行ノ際ニハ井泉、河流、水道及廁間、芥溜、下水、溝渠等總テ病毒萌生ノ因トナルヘキ場所ニ注意シ掃除清潔ノ法ヲ設クヘシ

第十三條 虎列刺流行スルキハ船舶交通ノ地方ニ於テ流行地ヨリ來ル所ノ船舶ヲ検査シ患者若クハ死者アルキハ此規則ニ從フテ處分スヘシ

第十四條 虎列刺流行ノ勢猛烈ナルキハ地方長官ハ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ得テ醫師衛生官吏警察官吏郡區町村吏等ヨリ適當ノ人員ヲ選ヒ檢疫委員トナシ豫防消毒ノ事務ヲ擔任セシムルヲ得

此場合ニ於テハ醫師タル者吐瀉ノ二症ヲ兼備スル病ヲ診斷スルキハ總テ檢疫委員ニ届出ツヘシ(明治十五年第四十八號布告)
(ヲ以テ本項及但書共追加)

但シ本項施行ノ終始ハ地方廳ヨリ之ヲ管内ニ告示シ内務省ニ申報ス可

第十五條 前條ノ場合ニ於テハ地方長官ハ祭禮劇場等人民ノ群集ヲ差止ル
トヲ得

虎列刺已ニ市街村落ノ全部若クハ一部分ニ於テ蔓延ノ兆候ヲ顯ハシ其他
ノ部分ニ及ホサル様遮斷シ得ヘキモノト見認ルルハ地方官ヨリ内務卿
ニ稟議シ交通ヲ絶タシムルノ處分ヲ爲スヲ得(明治十四年第五十八號
布告ヲ以テ本項追加)
但要用ノ者ハ掛官吏檢察ノ上交通ヲ許スヲ得

腸室扶私病

第十六條 腸室扶私流行ノ際ハ第九條第十一條及第十二條ヲ適用スヘシ

赤痢病

第十七條 赤痢病流行ノ際ハ第九條第十一條及第十二條ヲ適用スヘシ

實布埤里亞病

第十八條 實布埤里亞病流行ノ際ハ第十一條ヲ適用シ患者ノ痰唾及之ニ汚
穢スル物ハ燒棄若クハ埋却セシムヘシ

發疹室扶私病

第十九條 發疹室扶私病者アルキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行ノ際ニ
ハ第十二條第十三條第十四條及第十五條ヲ適用スヘシ(明治十三年第五十四
號布告ヲ以テ改正)
第二十條 發疹室扶私病者若シハ其死屍ヲ載セタル車輿等ハ毎回消毒法ヲ
行フニアラサレハ他用ニ供スヘカラス

痘瘡病

第二十一條 痘瘡病者アルキハ第十條第十一條及第二十條ヲ適用シ患者
ニ未痘者ヲ接近セシムヘカラス其流行ノ際ニハ第十二條ヲ適用スヘシ(明
治十五年第四十八號
布告ヲ以テ改正)

罰則

第二十二條 醫師戶長此規則ニ違背シタルキハ五拾圓以内ノ罰金ニ處ス
第二十三條 官吏其管掌ノ事務ニ於テ此規則ニ違背シタルキハ百圓以内ノ罰
金ニ處ス

第二十四條 人民此規則ニ違背シタルキハ壹圓五拾錢以内ノ科料ニ處ス

○傳染病名票貼付ハ當分施行セス 明治十五年八月 第四十七号布告

明治十三年七月第三十四号布告傳染病豫防規則第八條中病名票貼付ノ儀當
分之ヲ施行セス

勅旨布告候事

○傳染病豫防心得書 明治十三年九月内務
省乙第三十六號達

東京警視本署府縣

本年第三十四號傳染病豫防規則布告相成候ニ付傳染病豫防心得書別冊相達

判決例(明治十六
年十二月十二日)
醫師診ニ因リ傳
染病豫防規則ニ觸
レタルト雖モ尙
ホ規則第廿二條ノ
制裁ヲ免レサルヤ
否
凡ソ法律規則ニ觸
レ罪トナルヘキ事
實ヲ知ラスシテ犯
シタル者ハ之ヲ罰
スヘキ法理アルコ
トナシ傳染病豫防規
則ノ如キモ亦故意
ヲ以テ此規則ヲ犯
シ又ハ懈怠ニ因テ

此規則ニ觸ル、者
ヲ罰スルニ止ル故
ニ他ノ醫員カ病没
者ハ虎列刺病ニ斃
レタルモノナリト
檢案スルモ被告ハ
之ヲ虎列刺病ニア
ラスト診斷シ別ニ
故意又ハ懈怠ニ因
テ該規則ニ觸ル、
ノ微過ナケレハ即
チ被告ハ當時罪ト
ナルヘキ事實ヲ知
ラスシテ犯シタル
者ト爲サ、ルヲ得
ス故ニ原裁判所カ
無罪ヲ言渡シタル
ハ相當ナリ

候條各地方廳ニ於テ時宜ヲ量リ節略論達シ實際上豫防行届候様取計ヲヘシ
此旨相達候事

傳染病豫防法心得書

凡ソ傳染病ハ其種類多シト雖モ流行性傳染病ノ一旦萌動シテ其蔓延ノ熾ナ
ルニ至テハ救療ノ法モ浴ク及ヒ難ク終ニ其猖獗ヲ縱ニシ慘酷ヲ極ムルニ至
ル然ルニ豫防法アリテ之ヲ守ル嚴ナルキハ其病害ヲ未熾ニ防遏スヘシ加之
消毒法アリテ之ヲ行フ密ナルキハ各種ノ病毒ヲ消滅スルヲ得ヘシ消毒法ハ
即チ豫防法ノ一種ニシテ殊ニ其効驗確實ナルモノナリ目今本邦流行傳染病
中最モ豫防注意ヲ要スヘキハ虎列刺、腸窒扶私、赤痢、實布埜利亞、發疹窒扶
私、痘瘡ノ六病トス而テ各種ノ病症ニ從ヒ豫防ノ法モ亦其趣ヲ異ニスト雖
モ其要領ハ之ヲ約スルニ四項ニ出テス其一ハ病毒ノ萌動及ヒ蔓延ノ因ヲ除
却スルニアリ(即チ清法)其二ハ各人體中有スル所ノ感受性ナカラシムルニアリ(即チ攝法)其三ハ病毒傳播ノ媒介ヲ隔離スルニアリ(即チ離法)其四ハ傳染病毒ヲ
消滅スルニアリ(即チ消毒法)右ノ四項ニ依リ豫防ノ事ヲ施サ、ルヘカラス故ニ其
大意ヲ示スノ左ノ如シ

清潔法大意

流行性傳染病毒ノ眞性ハ確知シ難シト雖モ病理家ノ論斷ニ據ルニ玄微ノ有
機物アリテ外方ヨリ人體ニ侵入シ以テ其病ヲ發スルモノアルカ如シ蓋シ此

毒物ハ多ク地中及ヒ水中ニ在テ萌動シ尋テ氣中ニ混シ然ル後人體ニ入ルヲ
得ルモノトス故ニ其病ニ罹ル者ノ排泄物地中若クハ水中ニ滲入スルキハ即
チ其毒ヲ散漫シ其地方ニ於テ衆人一齊ニ同一ノ病ヲ發スルヲ理ニ於テ疑フ
ヘカラスナリ

此有機性病毒ハ地中或ハ水中氣中ニ生殖ヲナスニ必ス多少ノ助養物ナカル
ヘカラス而シテ其助養物タルハ凡百ノ有機物體ノ腐敗ニ向ハントスル者之
カ發生ヲ助ル者ニ似タリ夫ノ魚市屠場等不潔ノ地及ヒ糞尿塵芥ノ堆積セル
地ノ如キハ其腐敗物地中及ヒ水中ニ滲透シ又此ヨリ蒸發スルモノ大氣中ニ
混入スルキ以テ病毒ノ助養物甚ク多クシテ忽チ蕃殖ノ速ナルヲ致ス故ニ土
地ノ不潔ハ傳染病ヲ蔓延セシムルノ媒介タリ是ヲ以テ其病發生スルキハ必
ス家屋ヲ清潔ニシ溝渠、芥溜、厠園等ノ汚物ヲ掃除セサルヘカラス是清潔法
ヲ要スル所以ナリ

攝生法大意

凡ソ人強健ナルキハ病毒ノ侵襲ヲ拒クヘキノ機能ヲ有スト雖モ過度ニ勞動
シ及ヒ飲食ノ不良或ハ不足等ヲ以テ身體之カ爲メニ衰弱スルキハ病毒ノ侵
襲ヲ受クルト最モ甚トス彼ノ發疹窒扶私ノ飢饉軍役ノ際ニ乘シ其猖獗ヲ
逞フシ又平生飲食不節或ハ不良ニシテ腸胃之カ爲メニ些少ノ損害アルキハ
虎列刺ノ侵襲ヲ受ルカ如キ等ヲ以テ證スヘシ其餘精神非常ノ感動及ヒ感冒

等モ亦能ク病毒ヲ招クノ媒介トナルモノナリ故ニ流行ノ際ニ當テハ殊ニ攝生ノ法ヲ嚴守シ病毒侵入ノ地ナカラシムルヲ專要トス若シ人々普ク此豫防法ノ要訣ヲ守リ得ルニ至ラハ全ク傳染病ヲシテ流行蔓延ノ甚シキニ至ラシメサルヘシ是攝生法ヲ要スル所以ナリ

隔離法大意

傳染病毒ハ啗ニ地中若クハ水中ニ含リテ傳播スルノミナラス患者ノ排泄物呼吸蒸發氣等ヨリ直ニ感染スルコトアリ故ニ病體死體其排泄物等ハ速ニ之ヲ隔離ノ觸接ノ憂ナカラシムヘシ隔離法トハ患者ヲ別室ニ移シ門戸ニ病名票ヲ貼附シテ外人ニ表示シ或ハ之ヲ避病院ニ送致シ要用アル人ノ外務メテ交通ヲ絶ツ等ノ事是レナリ殊ニ其恐ルヘキ傳染病ニ於テハ患者ニ接近シタル看護人等モ亦他ノ健康人ト隔離セサルヲ得ス苟モ能ク其法ヲ守リ病毒ニ遠サカルコトヲ得ハ必ス傳染ノ蔓延ヲ致サハルヘシ是隔離法ヲ要スル所以ナリ

消毒法大意

凡ソ傳染病毒ハ其性分極メテ微小ニシテ見ルヘカラスト雖モ傳送物中ニ混入シテ人體ニ達シ其病症ヲ發現スルモノトス此傳送物ヲ滅スルハ則チ病毒モ亦消盡ス故ニ烈火ヲ用ヒ之ヲ燒盡スルハ消毒ノ最良トス然レモ其燒藥ニ付シ難キモノハ或ハ藥劑ヲ用ヒテ蒸蒸若クハ灌注シ或ハ之ヲ洗滌シ以テ其病毒傳播ノ力ヲ撲滅スルヲ得ヘシ然ラサレハ其病毒散蔓シテ終ニ消滅ス

ルコトナカラン故ニ病毒萌動ノ後ニアリテハ消毒ヲ以テ豫防法中ノ最モ緊要ナルモノトス

消毒法ヲ施スニ當テ其病性ト其施スヘキ物トニヨリ其科ヲ同クセス故ニ之ヲ分チ第一患者及ヒ看護人等消毒法、第二死體及ヒ排泄物等消毒法、第三衣服臥具等消毒法、第四家屋船舶等消毒法、第五什具運搬器等消毒法、第六廁圍溝渠等消毒法トス但實布埤利亞、發疹室扶私、痘瘡ノ三病ハ第六ノ消毒法ヲ行フノ限ニアラス

凡ソ病毒ノ最モ含藏シ易キモノ即毛布、綿布、綿絮、塵、蓆、敷物ノ如キ氣孔鬆疎ナルモノト居室及ヒ室内ノ諸器具ノ如キハ其病毒浸染ノ深淺ニヨリ消毒法ヲ行フヘキモノトス

右ニ載タル蒸蒸及ヒ洗滌ノ外其燒却ヲ憚ル品物ニシテ浸染セル病毒ノ萌生機能ヲ消滅セシメント欲スルハ熱氣消毒竈ナルモノヲ用ヒテ華氏二百二十度ヨリ二百五十度ニ至ルノ熱氣ヲ浴ク四方ヨリ通セシメ以テ之ヲ殲滅スル法アリ然レモ其構造宏大ニシテ各地ニ設ケ難キヲ以テ茲ニ詳記セス且ツ大氣日光ノ如キモ自然消毒ノ功アルモノニシテ善ク微隙ニ達スト雖モ但タ其力藥品ニ比スレハ甚タ弱キヲ以テ多少時日ヲ經サレハ其効ヲ奏シ難シトス

消毒藥劑ハ其品類頗ル多ク且ツ其性質功能モ亦同一ナラス故ニ其功能ヲ類

別シテ第一號ヨリ第十二號ニ至ル以テ各病消毒法ノ條ト相照シテ之ヲ用フ
ルニ便ニス其功用ノ如キハ化學作用ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス
○消毒藥

(第一) 濃厚石炭酸水

結晶石炭酸四分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但石炭酸一分ニ虞利斯特林又ハ亞爾箇保兒二分ヲ和シテ能ク溶解シ後チ
本量ノ水ヲ加フヘシ

(第二) 稀薄石炭酸水

結晶石炭酸二分ヲ百分ノ水ニ溶シタルモノ

但溶解法前ニ同シ

(第三) 石炭酸蒸氣

結晶石炭酸(或ハ之ニ二倍ノ亞前
兒ヲ加ヘタルモノ)ヲ皿ニ入レ微火ニ上セ蒸發セシメ或ハ石炭
酸一分ニ餾水二十分ヲ和シ布片ニ懸シ室内ニ懸ケ置キ蒸發セシムヘシ

(第四) 石炭酸末

粗製石炭酸ヲ以テ砂、灰、木炭末、鋸屑等ヲ濕濕セシメタルモノ

但粗製石炭酸ハ四十分ヨリ六十分ノ「フェニール」酸(即チ結晶
石炭酸)ヲ含ミ稍

色ヲ帯ヒタル流動石炭酸ナリ
以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

サリシル酸(二百倍ノ水ニ溶解ス)
テール油

石炭酸石灰(石灰百分石炭酸三分)

(第五) 硫酸鐵合劑

綠礬三百匁ヲ常水一斗ニ和シ粗製石炭酸百匁ヲ加ヘタルモノ

但此合劑ハ久ク貯フヘカラス用ニ臨ミテ調製スヘシ

(第六) 硫酸鐵合劑

硫酸五分硫酸鐵六分水八十九分ヲ和シタルモノ

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

鹽化亞鉛(八倍ノ水ニ溶解セルモノ)

明礬

粗製明礬ノ過量ヲ水中ニ投シ能ク攪拌シテ後其上清ヲ取ル

コロール明礬(四倍ノ水ニ溶解ス)

皓礬(百二十倍ノ水ニ溶解ス)

(第七) 木炭(木炭二分生石灰二十分)

(第八) 石灰

其他木灰、鋸屑、土等ハ又多小收結ノ功アルモノトス

(第九) 亞硫酸瓦斯

硫黃ヲ燒テ瓦斯ヲ發生セシム其法ハ煙敷ノ室ニ硫黃大約三百匁(木炭末大約十匁ヲ加フルルハ更ニ宜シ)ヲ要ス但一時ニ火焰ノ昇騰スル恐アルヲ以テ二三ノ火鉢ニ分配シ熾炭ヲ之ニ點シテ徐々ニ焚燒セシムヘシ但多數ノ物品ヲ消毒スルニハ密閉シタル室(土藏)ニ索ヲ張り消毒スヘキ衣服等ヲ掛ケ或ハ竹架ヲ設ケテ之ヲ排列シ本量ノ硫黃ヲ薰スヘシ又人々各自ノ衣服等ヲ消毒スルニハ一握ノ粗製硫黃ヲ火鉢ニ入レ火ヲ點シ伏籠ノ類ヲ覆ヒ之ニ衣服ヲ被ラセ薰蒸スヘシ

(第十) 亞硫酸溶液

(甲) 強百分ノ十ヲ含ムモノ

(乙) 弱百分ノ五ヲ含ムモノ

但製法ハ略ス

(第十一) 過滿俺酸加里溶液(百倍ノ水ニ溶解ス)

(第十二) コロール瓦斯

十分ノ食鹽ヲ五分ノ褐石末ニ密和シテ磁皿上ニ置キ十分ノ硫酸ヲ十分ノ水ニ混和シタルモノヲ注キテ之ヲ發生セシム

以下消毒同功アルモノニシテ通常用ヒサル品

亞硝酸瓦斯

磁皿ニ銅屑ヲ盛リ置キ硝酸ニ少許ノ水ヲ加ヘテ稀釋シ徐々ニ之ヲ

注キテ瓦斯ヲ發生セシム

コロール石灰溶液

コロール石灰一分ヲ水百分ニ溶解ス

硝酸

磁皿ニ盛リ微火ニ上セ蒸發セシム

以下六病各四項ノ區別ニ因リ豫防法實施ノ事ヲ類別開示ス而テ其手續ハ各項自カラ連帶シテ唇齒相保ツモノトス故ニ一事ニシテ其項ヲ同クセサルモノアリ例ヘハ虎列刺病ヲ豫防スルニ先ツ廁間ノ掃除ヲ要スルハ清潔法ニ屬シ其患者ヲ尋常ノ廁ニ上ラシメス吐瀉物ヲ遠隔ノ地ニ運搬セシムルハ隔離法ニ屬シ其之ヲ運搬セシムル前ニ消毒ヲ行フハ消毒法ニ屬ス其事ハ一途ニシテ前半ハ隔離法中ニ載セ後半ハ消毒法中ニ載スルカ如此心得書ニヨリ實施セル者宜ク相對照シテ其順序ヲ誤ルナク勿レ

虎列刺

虎列刺ハ特異ノ流行性傳染病ニシテ其病毒ハ病者ノ吐瀉物中ニアリ然シテ其吐瀉物ノ泡釀ニ向ハントスル時最モ傳播ノ媒介ヲナスヲ甚シトス故ニ此病毒一回不潔汚穢ノ地中水中ニ入ルルハ更ニ其蕃殖ノ力ヲ加ヘ動モスレハ飲料水ニ混シ遂ニ人體中ニ入りテ發生ス其症タル暴カニ吐瀉シ生力忽チ沈衰シテ而ノ斃ル傳染病中最モ急劇ナルモノト謂フヘシ印度地方ニ於テハ每

歲發動シテ地方病トナルト雖モ人民ノ交通ニヨリ四方ニ蔓延シ到ル所或ハ三四年間流行シ或ハ全ク其痕跡ヲ絶タスシテ散發スルヲアリ總テ此病毒ハ夏月温熱ノ候ニ當リ其發動ヲ見ルモノトス眞症及ヒ類似症ノ二種アリト雖モ俱ニ傳染スルモノナリ故ニ其豫防ニ至テハ同様ノ注意ヲ要スヘシ

第一項 清潔法

第一條 虎列刺病ノ吐瀉物ハ一滴ダモ汚穢ノ地ニ滲入セシムヘカラス若シ滲入スルキハ其泡釀力ヲ助ケ忽チ蕃滋増殖スルモノナリ故ニ土地ヲシテ不潔ナラシムヘキ芥溜、下水、厠圍、魚市、屠場等ハ常ニ之ヲ掃除スヘシ其掃除スル毎ニ防臭藥則チコロール石灰、明礬強溶液、テール油等ヲ適宜ニ撒注スルヲ良トス

第二條 虎列刺病毒ハ容易ニ水土ニ滲入シテ傳播スルカ故ニ常ニ飲料水ニ注意ヲ加ヘ井戸側及ヒ敷石若クハ敷板ヲ堅牢緻密ニシテ傍地水際ノ滲透ヲ防クヘシ其他飲料ニ供スル河水及ヒ水道ノ源ハ汚穢物ノ流入ヲ防クヘシ

第三條 虎列刺ノ病毒ハ排泄物ニヨリ傳播スルヲ以テ糞壺若クハ桶ヲ堅牢ニスヘシ且ツ常ニ注意シ糞尿ヲ汲取リテ之ヲ充滿セシムヘカラス殊ニ衆人群集スル所ノ厠圍又井水若クハ水道近傍ノ厠圍ノ如キハ最モ注意ヲ加フヘシ

第四條 糞壺若クハ桶等ニ罅隙アルキハ糞汁之ヨリ滲漏シテ忽チ病毒ヲ地中ニ滋蔓セシム此ノ如キモノハ消毒藥ヲ施スモ其功ヲ奏スル能ハス故ニ豫メ壺桶ヲ點檢シ罅隙アルモノハ之ヲ改良スヘシ

第五條 芥溜ハ雨水滲入スルニヨリ其汚穢ヲ廣ク地中ニ渡漫セシムルヲ以テ木箱或ハ鐵葉箱等ヲ以テ其貯器トナシ板蓋等ヲ設ケ雨水ヲ禦キ且ツ塵芥ヲ堆積セシムヘカラス

第六條 下水溝渠ハ石若クハ堅質ノ木材ヲ用テ有底ノ放水樋ヲ設ケ遠隔ノ地ニ流注セシメ汚水ノ地底ニ滲入スルヲ防クヘシ其樋上ハ蓋ヲ以テ密閉スヘシ若シ其接合密ナラサレハ却テ其間ニ腐敗氣ヲ停蓄スルカ故ニ此ノ如キモノハ寧ロ上面ヲ開放シテ大氣ニ曝スヲ以テ愈レリトス

但塵芥ハ必ス溝渠ニ投棄セシムヘカラス
第七條 溝渠ハ注意シテ塵芥ヲ除キ淤泥ヲ浚フヘシ且ツ其泥芥ハ溝側ニ留置カスシテ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ然レ炎熱ノ候ニ當テ日中ニ泥芥ヲ攪動スレハ惡臭ヲ發シテ空氣ヲ汚濁スルノ恐アルコヨリ必ス他ノ時候ニ於テ之ヲ浚除スヘシ

第八條 魚市屠場ニ於テハ其流出スル所ノ汚水地中ニ滲入スルノ恐アルヲ以テ第六條ニ同シキ放水樋ヲ設ケ流注セシムヘシ且屠屑腥汗ヲ培料ニ供スルカ爲メニ久ク貯積スヘカラス必ス有蓋ノ籍若クハ桶ニ入レ置キ速ニ

人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其他牛馬ノ廐舎及ヒ羊豚、雞鶩ノ畜場等モ亦此旨意ヲ以テ掃除スヘシ

第九條 人家稠密ノ場所ニ於テハ培料ノ置場ヲ設クヘカラス若シ止ムヲ得スシテ設クルハ久シク堆積セシムヘカラス前條ノ旨意ヲ以テ人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ其汚汁滲入スルモノハ更ニ新土ヲ以テ之ヲ覆フヘシ但村落廣潤ノ地ニ於テハ必スシモ之ヲ要セス

第十條 學校、囚獄、製造所、旅店、劇場等ハ流行ノ際更ニ清潔法ニ注意シ又避病院ニハ掃除專務ノ人夫ヲ設ケ殊ニ注意ヲ加フヘシ

第二項 衛生法

第十一條 虎列刺病ハ各人皆之ニ感スルノ素因アルニ似タリト雖モ就中不衛生ノ人之ニ感スル最多シトス故ニ流行ノ際ハ殊ニ飲食ヲ慎ミ其他不衛生ノ事ヲ戒ムルヲ以テ至要トス

第十二條 飲料水ハ必ス無色無味無臭ノモノヲ撰ヒテ之ヲ用フヘシ若シ止ムヲ得ス其稍、不良ノ疑アルモノヲ用フルハ之ヲ濾過スヘシ然レモ煮沸ノ後之ヲ用フルノ最良ナルニ如カス蓋シ病毒ハ之ヲ微ニシテ濾過力ヲ以テ盡ク之ヲ除キ去ルヘカラスト雖モ之ヲ煮沸スルハ其毒分ヲ全ク殲滅スルノ効アリトス

第十三條 氷及ヒ冷水ハ縱令其質不良ナラサルモ之ヲ過度ニ飲用スルハ

之カ爲メニ下利ヲ發スル者ナリ故ニ流行ノ際ハ過量ノ飲用ヲ戒ムヘシ但不良ナリト認ムルモノハ決シテ之ヲ用フヘカラス

第十四條 酒ノ清醇ナルモノハ之ヲ適度ニ用フルハ害ナシト雖モ暴飲或ハ酸敗セルモノヲ用フレハ腸胃ヲ害シ或ハ下痢ヲ發スルモノナレハ流行ノ際ハ必ス其品種ヲ擇ヒ務テ飲量ヲ節減スルヲ良トス

第十五條 食物ハ新鮮ノ肉類消化シ易キ蔬菜ヲ用ヒ平生ノ慣用ヲ改メサルヲ良トス但良好ノ食物ト雖モ之ヲ過食スレハ亦腸胃ヲ害シ此病ニ感シ易キカ故ニ流行ノ際ハ務テ適度ニ食シ不消化物ヲ避ケ殊ニ不熟ノ果實ヲ食フヘカラス

第十六條 雨濕或ハ夜氣ニ胃觸シ或ハ過度勞役等皆此病ニ感シ易キヲ以テ流行ノ際ニハ殊ニ之ヲ慎ムヘシ

第十七條 流行ノ際ニ當テハ感冒下痢ヲ豫防セシカ爲メ紋羽木綿等ニテ小腹ヲ巻キ務テ適度ノ温暖ニ其身ヲ保持スルヲ良トス

第十八條 流行ノ際能ク此衛生法ヲ守リ腸胃健全ナルハ些少ノ病毒ヲ受クルモ猶ホ其病害ヲ免ル、コナシトセテ看護人及ヒ汚穢物死體等ニ直接スルモノ、如キハ尤モ之ニ注意セサルヘカラス

第十九條 凡ソ豫防ハ平日衛生ノ謹嚴ナルヲ至要トス世間往々豫防藥ト稱スル方劑アリト雖モ多クハ無稽ノ考案ニ出テ之ヲ服用スルモ功ナキモノ

多シトス

第三項 隔離法

第二十條 虎列刺病ハ患者ニ直接スルモ必スシモ感染スルノ理ナシト雖モ其吐瀉物ニ汚レタル患者ニ接シ又ハ其汚染セル物品等ニ觸ルハ其媒介ニ因リ病毒ヲ傳フ故ニ患者ト健者トヲ隔離スル以テ豫防ノ要法トス

第二十一條 虎列刺病ハ眞症ト類似トシテ論セス醫師診斷シタルハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第二十二條 患者ノ吐瀉物ハ之ヲ金屬製或ハ陶製ノ漱盤便器等ニ承ケ(木製ハ其毒滲浸ノ恐アリトス)毎回消毒法ヲ施シ壺或ハ桶ニ入レ戶外ニ置キ之ニ密蓋ヲナシ運搬夫ニ付シ人家遠隔ノ地ニ搬送セシメ溝渠、芥溜、田圃等ニ投棄スヘカラス且ツ患者ノ入りタル厠圍ハ決シテ他人ヲシテ入ラシムヘカラス又初發嘔吐セシ地面等ノ處置ハ第八十一條消毒法ニ依ルヘシ

但吐瀉物等ヲ運搬スル日中ハ虎列刺吐瀉物ト表記アル號旗ヲ夜中ハ之ニ換ルニ提燈ヲ以テスヘシ

第二十三條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ接近スヘカラス又止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶ツヘシ

但家人ニ要用アリテ來訪スル人アルハ成タケ戶外ニ於テ之ト應接シ屋内ニ入ラシムヘカラス此時ニ於テハ家人及ヒ來訪人ニ消毒法ヲ行フヲ要セス

第二十四條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外老幼ハ成タケ早ク他家ニ避退セシムヘシ

但看護人ハ成タケ其人ヲ更換セサルヲ良トス

第二十五條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス

第二十六條 患者若シ死亡スルハ成タケ其屍傍ニ接近シ又ハ死體ニ沐浴セシムル等ノヲセサルヲ良トス

第二十七條 患者治癒若クハ死亡シ病室ニ消毒法ヲ行ヒ後ハ家人其室内ニ起臥スルモ妨ケナシト雖モ若シ之レヲ用ヒサルモ日用ニ差支ナキ家ニ於テハ數日間空室ノマ、窓戸ヲ開放シ大氣ヲ通セシムヘシ

第二十八條 西洋形船舶航海中ニテ發患者アルハ其室ヲ異ニスヘシ或ハ之ヲ艙ノ方ニ移スモ可ナリ其看護人ノ外交通ヲ絶ツヲ猶ホ人家ニ於ルカ如クスヘシ

第二十九條 船舶内ノ病室ニハ看護人ヲ定メテ吐瀉物ヲ承クルヲ第二十二條ノ如クシ航海中ハ毎回海中ニ投棄スヘシ尤モ港灣河湖等ニ於テハ之ヲ投棄スヘカラス必ス最寄ノ地方ニ着シ其他警察官吏或ハ衛生委員ノ指圖

ヲ受クヘシ

第三十條 船舶ヨリ患者若クハ死者ノ届ケアルキハ警察官吏衛生委員ニ於テ検査ノ上患者ハ之ヲ隔離シ死者及ヒ汚穢物ハ消毒法ヲ行ヒ第五十四條ヨリ第五十八條マテニ依リ處置スヘシ

第三十一條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キトキハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第三十二條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ運搬ニ便ナル地ヲ撰フヘシ然レモ井泉河流ノ近傍或ハ往來多キ路傍等ニ設クヘカラス又監獄、墓地、火葬場等ノ跡ハ用ヒサルヲ良トス

第三十三條 避病院ヲ新ニ構造スルキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其牀ヲ高クシ窓戸ヲ潤大ニシ且ツ板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニスヘシ但板葺苦葺等ハ其一時ノ便ニ任シテ可ナリ

第三十四條 避病院ノ廣狹ハ大約人口千人ニ患者一人ノ割合ヲ以テシ例ヘハ人口六千人ノ町村ナレハ患者六人分ニシテ每人二坪ト見積リ十二坪ノ病室ヲ要スルノ類ナリ尤モ流行ノ勢ニ因リテハ建坪ヲ増加スルヲ得ルノ餘地ヲ豫メ計畫シ置クヘシ

第三十五條 避病院ノ病室ハ重症輕症及ヒ快復期ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令ヒ患者輻湊ストモ一坪ニ一人ノ割合ヨリ狭クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便宜ニ之ヲ設クヘシ
第三十六條 避病院ニハ簡易ノ薰蒸室ヲ設クヘシ其構造ハ凡ソ一二坪許ノ小室ニシテ薰蒸氣ノ漏散セサル様密閉シ得ヘカラシメ其内ニ竿ヲ架シ或ハ繩ヲ張り衣服等ヲ掛ルニ便ニス其小ナルモノハ尋常ノ戸棚等ヲ以テ之ニ當ツヘシ

第三十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ見舞人看護人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第三十八條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルキハ直チニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ容ル、爲メ其餘地ヲ設クヘシ

第三十九條 人家稀疏ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋等アラハ假リコ之ヲ用フヘシ

但別ニ傳染病室ノ設アルモノハ此限ニアラス

第四十條 普通病院ニハ決シテ虎列刺患者ヲ入ルヘカラス
第四十一條 避病院ニ用フル看護人ノ員數ハ重症ノ患者二人ニ一人ヲ附シ

輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル
割合ヲ以テ便宜斟酌シ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成ダケ其人ヲ交換セシメ
サルヲ良トス

第四十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サン
トテ望ムトハ之ヲ許スヘシ

但其看護人ハ多人數ナラサルヲ要シ且ツ屢々更替スルヲ許サハルヘシ

第四十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者ハ其見舞ヲ許
スヘシト雖モ室内ニ於テ飲食ヲ嚴禁シ且ツ吐瀉物ニ接觸セサル様切ニ注
意スヘシ

第四十四條 避病院ニ在ル患者ノ病况危篤ニ至ルキハ速ニ其家ニ通知シ若
シ死亡スルキハ入棺セサル前ニ其死體ヲ家族ニ示スヘシ

第四十五條 流行ノ勢猛烈ニ及ヒ其地ノ群集事業ヲ差止ムルキハ先ツ祭禮
劇場、寄席等ヲ差メ止ムヲ得サル場合ニ至ラサレハ學校、製造所等ヲ差止
ヘカラス又社寺參拜等ノ爲メ多人數旅行スルヲ差止ムルヲアルヘシ

第四項 消毒法

第四十六條 虎列刺ノ病毒ハ其吐瀉物ニ舍レリ故ニ吐瀉物及ヒ之ニ汚染ス
ルモノハ嚴ニ消毒法ヲ行フヘシ就中之ヲ燒棄スルヲ以テ最良法トス患者

及ヒ其死體ハ直ニニ病毒ヲ傳フル者ニ非スト雖モ吐瀉物ニ汚染スルヲ以
テ亦病毒汚染物ト同視スヘシ

第四十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第四十八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必
ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若シハ消毒法ヲ施シタル衣服
ヲ着スヘシ吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人
ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第四十九條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者
ノ他人ト交通スルキモハ必ス沐浴更衣スヘシ

第五十條 病家ニ於テ止ムヲ得サル事故アリテ看護人其他患者ニ親接セル
者ノ他出スルキハ必ス其身體ヲ洗淨シテ更衣スヘシ

第五十一條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者
親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ消毒法ヲ行フヲ要セサレハ其家ヲ出ルニ
臨テ鹽漱スルヲ良トス

但若シ誤テ吐瀉物ノ爲メニ其衣服等ヲ汚シタルキハ稀薄石炭酸水(第
二)ヲ噴注シ或ハ沸湯ヲ以テ之ヲ洗ヒ然ル後第六十二條六十三條ニ依
リ消毒法ヲ行フヘシ

第二 死體及排泄物等消毒法

第五十二條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞クコトヲ得ハ最良トス

第五十三條 西洋形船舶海中ニ死者アルハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ前條ノ灌腸ヲ行ヒ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此コ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ若スル上ハ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第五十四條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ火葬セシムヘシ火葬場ナキ地方ハ人家ニ離レタル所ニシテ地質鬆疎ナラサルノ地ヲ擇ヒ簡易ノ火葬場ヲ設ケテ之ヲ燒クヘシ

第五十五條 吐瀉物ハ之ヲ便器漱盤等ニ承ク之ト同量ノ濃厚石炭酸水(第一)ニ合劑亞硫酸溶液、生石灰等ヲ攪用スヘシ以下ニ之ニ依リテ灌注スヘシ其屋外ニ持出ス手續ハ第二十二條ニ依ルヘシ

第五十六條 避病院及ヒ各病家ヨリ運搬シタル吐瀉物、汚穢物ヲ燒却スルニハ其地方ニテ定メ置キタル地質鬆疎ナラサル所ニ適宜ノ穴ヲ掘リ厚ク灰或ハ石灰ヲ穴底ニ敷キ乾キタル藁、飽屑、落葉、枯草ノ類ニ石炭油ヲ澆

キテ其上ニ置キ之ニ吐瀉物ヲ投シ再ヒ同前ノ燃料ヲ覆ヒテ火ヲ點スヘシ火勢減スルキハ更ニ油ヲ注キテ屢々攪挑シ全ク燒盡スルヲ期スヘシ且ツ其汚汁ノ地中ニ滲透セサル様注意スルヲ要ス

但燃料及裝置等ハ其地ノ便宜ニ隨フヘシ

第五十七條 患者ノ入りタル廁間ノ糞汁ハ法ノ如ク燒却スヘキモ若シ大量ニシテ燒却シ難キモノハ亞硫酸溶液(第十)糞汁ノ石炭酸水(第四)糞汁ノ若シ其缺乏ニ際シテハ生石灰(糞汁ノ三分一)ヲ投シテ汲取り一定ノ所ニ埋却シ其廁間ニハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注入スヘシ

第五十八條 吐瀉物ノ水分多クシテ燒却シ得サルキ之ヲ埋却スルニハ多量ノ濃厚石炭酸水(第一)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ一定ノ場所ニ於テ深ク埋却スヘシ

但吐瀉物ノ埋却場ハ豫メ井泉、河流及人家、道路等ニ接近セサル地ヲ撰定スヘシ

第五十九條 吐瀉物、汚穢物ヲ運搬スルニハ其地方ニ於テ豫メ取扱人夫ノ手續ヲ定メ流行ノ間ハ毎日二三回病家ノ吐瀉物、汚穢物ヲ取集メ燒却若クハ埋却セシムヘシ尤其運器ハ極テ注意シ臭氣ノ洩レサル様ニアラシメ其蓋蓋シテ空氣ニ混スルヲ恐ルナリ相當ノ器ヲ用ヒ且其汚汁多量ニシテ溢溢ノ恐アルキハ銀屑落葉、枯草等ヲ入レテ之ヲ防クヘシ

但運器ノ木製ナルモノハ流行終熄ノ後盡ク焼却シ其金屬製及ヒ陶製ノモノハ稀薄石炭酸水(第二)若クハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗淨スヘシ

第六十條 食料ニ供スヘキ物品ノ現ニ病毒ニ汚染シタルモノハ勿論病毒侵染ノ嫌ヒアルモノハ都テ之ヲ焼却スヘシ

但現ニ病毒ニ汚染セサルモ其汚染ノ疑ヒアルモノハ「サリシル」酸溶液(三百倍ノ水ニ溶解セルモノ)ヲ以テ之ヲ洗淨スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第六十一條 衣服、臥具、蚊帳、疊、蓆等ノ甚シク吐瀉物ニ汚染シタルモノハ之ヲ焼却スヘシ

但船中積荷ノ吐瀉物ニ汚レタルモノモ亦之ニ倣フヘシ

第六十二條 衣服、臥具、蚊帳等吐瀉物ニ汚穢スル少ナクシテ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ侵シ置ク「二十四時間」ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等ノ缺乏ナルトハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第六十三條 衣服、臥具、蚊帳等ノ少シク吐瀉物ニ汚染シ洗濯ニ堪ヘサルモノハ其品種ニヨリテ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ蒸蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第六十四條 死體ニ着セシ衣服ハ其消毒法ヲ行フ「第六十一條第六十二條

及ヒ第六十三條ニ同シ

第六十五條 避病院ニ用ヒタル蚊帳ハ其病室ニ在ル「久キ」ヲ以テ吐瀉物ニ汚染セサルモノト雖モ都テ之ヲ煮沸シ或ハ熱氣消毒法ヲ施スヘシ

第六十六條 吐瀉物運搬人及ヒ避病院ノ醫師看護人、死體取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ニ親接スル「久ク」若クハ屢次ナルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施ス「第六十二條第六十三條」ニ同シ

但本文ニ掲グル所ノ者日々衣服ヲ更換セハ沸湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ可トス

第六十七條 看護人及ヒ患者死體運搬人又ハ船中ニテ患者ト同席シタル者ノ衣服手道具ハ直チニ病毒ニ汚染セサルモ稍々病毒侵染ノ疑ヒアルヲ以テ第六十三條ニ依リ消毒法ヲ行フヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第六十八條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ懸ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戸ヲ開キ吐瀉物ニ汚染ノ嫌ヒアル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ初メニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第六十九條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至ラハ衆多ノ乘客者積荷ノ間ニ枕籍シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乘客積荷手荷物等モ皆病毒ニ汚シタル者ト看做シ乘客手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品物ニヨリ石炭酸蒸氣(第二)ヲ薰スルノ後ニアラサレハ陸揚スルヲ許サス

第七十條 日本形小船ハ前條ノ方法ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ遍ク船身ヲ洗淨スヘシ

但海水モ亦消毒ノ効アルモノトス

第七十一條 避病院其他便宜ニヨリ他ノ家屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分並ニ厠房ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)乙ヲ注キ石鹼水ヲ用ヒテ洗淨スヘシ尤モ亞硫酸蒸氣法ノ充分ナルキハ石炭酸水ヲ用フルヲ必要トセス

第七十二條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アル者トス

第七十三條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行終ル後之ヲ取毀ツヘシ尤モ其前汚穢シタル板敷板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第七十四條 吐瀉物ヲ承ケタル漱盤便器等ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十乙)ヲ以テ洗淨スヘシ其吐瀉物ニ汚染シタル紙屑手拭其他之ニ類スルモノハ悉皆取集メ第二十二條ニ載セタル壺或ハ桶ニ投シ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十甲)ヲ注キ吐瀉物ト共ニ之ヲ運搬セシムベシ

第七十五條 患者必要ノ手道具ヲ携ヘ避病院ニ入ル者ハ出院ノ時必ス亞硫酸瓦斯(第九)蒸氣法ヲ行ヒ之ヲ交付スヘシ

第七十六條 患者及ヒ死體若クハ病毒ニ觸レタル物品ヲ運ヒタル舁舟車駕及ヒ運搬器等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其舁舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第七十七條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨シ乾カスヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間蒸氣スヘシ

第七十八條 書籍、新聞紙ノ類病室ニアラザルモノハ之ヲ緋展シ石炭酸稀氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スベシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第七十九條 醫術機械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

第六 厠圍溝渠等消毒法

第八十條 患者ノ入りタル厠圍及ヒ嘔吐シタル地ニハ充分亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其厠圍ノ糞汁ハ速ニ悉皆之ヲ汲取リ相當ノ消毒ヲ行ヒ終ルノ間ハ他人ノ入ルヲ禁シ其嘔吐シタル地ハ速ニ之ヲ掃除シ其土ヲ更換スヘシ且ツ其糞尿及ヒ嘔吐ノ穢土ハ人家遠隔ノ地ニ於テ燒却若クハ埋却スヘシ

第八十一條 糞壺及ヒ桶ノ破壞シテ病毒滲漏ノ疑ヒアルモノハ速ニ之ヲ掘除ケ其周圍并ニ底面ノ土モ亦深ク掘取リ濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ十分ニ灌注シテ人家遠隔ノ地ニ埋却シ其跡ニモ同様ノ消毒藥ヲ注キ更ニ新土ヲ填ムヘシ

但其消毒藥ノ量ハ其壺中糞汁ノ多少ニ因リ斟酌スヘシ大抵糞汁五分ノ一乃至三分ノ一ナルヘシ嘔吐物モ亦之ニ準ス

第八十二條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルキハ十分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ澆キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ預メ戒諭シテ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ投棄スル等ノ事ナラザルヲ要ス

腸室扶私

腸室扶私(英名)ハ從來神經熱、稽留熱、腸熱、傷寒、温疫等ト稱スルモノ多ク之ニ屬ス而シテ此病ハ時ヲ撰ハス不斷散在性トナリ或ハ地方性トナリ或ハ流行性トナリテ發スト雖モ夏日早魃後秋涼ノ候ニ於テ最モ多ク流行スルモノナリ

此病ノ流行ハ空氣ノ不潔、飲料水ノ淤濁、食物ノ不潔等之カ因トナルモノニシテ其病毒ハ特ニ患者ノ糞尿ニ由リテ傳播スル者ナリ然レモ其毒發疹室扶私天然痘等ノ如ク揮發性ノモノニ非サルヲ以テ豫防ノ方法モ亦其趣ヲ異ニシ專ラ其糞尿ニ注意スルヲ以テ緊要ノ目的ト爲スヘシ

第一項 清潔法

第一條 腸室扶私ノ病毒ハ汚穢ノ地ニ萌動シ飲料水ニ混シ其毒ヲ傳播セシムルノ例少カラス蓋シ是等ノ害ハ清潔法ヲ怠リ或ハ排泄物ヲ漫リニ放棄

シ或ハ糞壺若クハ桶ニ破隙アル等ノ疏漏ヨリ生スルモノニシテ廁間ト飲料水トノ注意ハ最モ肝要ナリ故ニ廁間、芥溜、溝渠、下水等ノ掃除ヲ忽ニスヘカラス

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルル人多人數ナルキハ直チニ其水ヲ試験シ不頁ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ不潔ノ飲料水若クハ食物等ヨリ來ルモノナルカ故ニ消化ヲ易キ物ヲ食シ清淨ナル水ヲ飲ムヘシ若シ善長ノ水ヲ得難キハ必ス之ヲ濾過煮沸シテ用フヘシ其他胃寒、疲勞等ヲ戒ムヘシ

第三項 隔法

第三條 醫師ノ腸室扶私ト診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ名票ヲ貼付スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 患者ハ成タケ其室ヲ異ニシ他人ト交通ヲ絶テ看護人ハ年齡四十歲以上ノ者若クハ一回此病ニ罹リシ者ヲ撰フヘシ少壯ノ者ヲ用フヘカラス

但航海船中ニ於テ發病者アルキモ本條ニ從ヒ處置スヘシ
第五條 一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ相當ノ看護人ヲ留メ其他ノモノ

ハ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 流行盛ナルニ際シ既ニ避病院ヲ設ケルニ至ラハ狹隘不潔ノ地ニ雜居シ隔離行届キ難キモノハ入院セシムヘシ

但避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第四項 消毒法

第七條 腸室扶私患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染シタル衣服器具等并ニ其病室廁間、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第八條 患者治癒ノ後始テ他人ト交通シ又久シク此患者ニ親接セル看護人ノ他人ト交通スルキハ沐浴換衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第九條 死體ハ速ニ棺内ニ斂メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸セル綿ヲ以テ肛門ヲ塞クテ得ハ最良トス

第十條 糞尿ハ之ヲ便器ニ承ケ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ速ニ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ之ヲ埋却スヘシ

但埋却ノ地ハ井泉河流ノ近傍ヲ避クヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第十一條 衣服、臥具ノ糞尿ニ汚染シタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗淨シ或ハ之ヲ煮沸シテ後石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十二條 患者及ヒ死體ヲ置キタル家屋船舶及ヒ避病院ノ病室屍室ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ或ハ石炭酸水(第二)ヲ以テ拭淨スヘシ
但室内ハ常ニ注意シテ空氣ヲ流通スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第十三條 什具運搬器ハ直チニ糞尿コ汚穢スルコト非サレハ消毒ヲ要セサレ其汚穢セルモノハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ洗滌スヘシ或ハ其品種ニヨリ熱湯ヲ注キテ後石鹼水ヲ以テ洗フヘシ
但木製ノ便器ハ其用ヲ終ルノ後之ヲ燒却スヘシ

第六 廁園溝渠等消毒法

第十四條 若シ誤テ患者ノ糞尿ヲ廁園、溝渠ニ混入セシトキハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キテ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ溝渠ハ「コロール」石灰ヲ撒布シ水ヲ以テ流通セシムヘシ
赤痢ハ一種ノ傳染病ニシテ其病毒地中ニ萌動シ人體ヲ浸スルハ必ス大腸ニ着キテ下利ヲ發スルモノナリ然シテ此患者ノ瀉下スル所ノ糞毒ハ其病毒ヲ

含有シテ水中地中或ハ氣中ニ散漫シ因テ廣ク他人ニ侵染スルコト至ルモノトス

此病毒ノ發生ヲ助クルハ温熱ト濕濡トニ因ルモノナレハ熱帶地方ニ於テハ殆ント固歳絶ルコトナク且ツ多クハ惡性ナリ又暖帶地方ニ於テハ季夏初秋ノ候ニ行ハル、ヲ以テ常トス又土地ノ景況ニ從ツテニ地方ニ限リ流行スルコトアリ或ハ惡性ニシテ廣ク流行スルコトアリ此ノ如キ時ニ臨テハ務テ豫防法ニ注意シ其宜キヲ得ハ良性ノモノハ之ヲ撲滅スヘシ惡性ノモノハ之ヲシテ良性ニ至ラシムルヲ得ヘシ故ニ流行ニ際シテ豫防ノ法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病毒ハ汚濁ノ土地ニ萌動シテ氣中或ハ水中ニ混シ終ニ人體ヲ侵襲スルモノナルカ故ニ廁園、溝渠、芥溜、下水、及ヒ魚市屠場等ノ不潔ナル場所ハ勿論殊ニ監獄製造所等ハ最モ掃除ヲ嚴ニスヘシ

但一處ノ水ヲ飲ム者一時ニ此病ニ罹ルコト多人數ナルモノハ直チニ其水ヲ試験シ不良ナレハ其飲用ヲ禁スヘシ且ツ清潔法ノ細目ハ能ク虎列刺ノ部ヲ參考シテ之ヲ斟酌スヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ老少ノ別ナク皆之ニ感スルノ素因アルカ如シト雖モ就中一回之ヲ患ヘシ者及ヒ不潔ノ地處ニ住居スル者不良ノ水ヲ飲用スル者及ヒ

露臥夜行過度ノ勞力等都テ不攝生ノ者ハ之ニ感シ易シトス又流行ノ際ニ當テハ下痢秘結モ亦此病ノ誘因トナル故ニ宜シク之ニ注意シテ攝生ノ法ヲ守ルヘシ殊ニ此病ニ罹リシ者快復ニ向ハントスルキハ更ニ飲食ノ攝生ヲ嚴ニスヘシ些少ノ不消化物ヲ食フモ亦此病ノ再發ヲ促スノ恐アレハナリ

第三項 隔離法

第三條 此病毒ハ專ラ其瀉下物ニ在ルヲ以テ之ニ汚染セル衣服、便器、醫術器機等ハ勿論其他ノモノモ亦皆傳播ノ媒介トナル故ニ患者ヲ隔離スルヲ以テ豫防ノ第一要法トス其惡性ノモノハ最モ此注意ヲ忽ニスヘカラス
第四條 醫師ノ赤痢ト診斷シタル時ハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼付スヘシ

但患者治療又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第五條 患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成タケ之ニ接近スヘカラス又老幼等ハ速ニ他家ニ避退セシムヘシ

第六條 若シ一家ニ數人此病ニ罹ル者アルキハ看護人ヲ留メ其他ノモノハ他家ニ避退セシムヘシ

第七條 患者ハ必ス他人ト別間、便器等ヲ共用セシムヘカラス其瀉下スル

所ノ糞尿ハ成タケ之ヲ便器ニ承ケ速ニ消毒法ヲ行ヒ之ヲ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ焼却スヘシ

但便器ハ成タケ金屬或ハ陶製等ニシテ蓋アルモノヲ良トス

第八條 患者治療若クハ死亡ノ後ト雖モ病室ニ消毒法ヲ行フニアラサレハ其中ニ起臥スヘカラス

第九條 航海船中ニ患者アルキハ看護人ヲ定メ便器ヲ以テ其瀉下物ヲ承ケ毎回必ス海中ニ投棄スヘシ

但港灣又ヒ河湖等ニ於テハ瀉下物ヲ投棄スヘカラス最寄陸地ニ於テ之ヲ焼却スヘシ

第十條 避病院ノ位置廣狹及ヒ區別法等ハ虎列刺ノ部第三十二條以下第三十八條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十一條 狹隘不潔ノ住居若クハ製造所、會社、學校、旅店等ニ於テ發病スル者ハ成タケ避病院ニ送致スヘシ

第十二條 避病院看護人ノ分配、來訪人ノ處置等ハ虎列刺ノ部第四十一條ヨリ第四十四條迄ニ照依シテ之ヲ斟酌スヘシ

第十三條 普通病院アル地方ニ於テハ院內ヲ區隔シ避病室トナシ患者ヲ入ルヘシ又人家稀疎ノ村落ニ於テハ相當ノ空屋ヲ用フルモ可ナリ

第四項 消毒法

第十四條 患者ノ瀉下物及ヒ之ニ汚染セル衣服、臥具等并ニ病毒、廁圖、便器等ハ盡ク病毒傳播ノ恐アルヲ以テ左ノ區別ニ從ヒ消毒スヘシ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十五條 患者治愈ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ず沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施セシ衣服ヲ着スヘシ瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十六條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ他人ト交通スルキニハ必ず沐浴更衣スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十七條 死體ハ充分ニ稀薄石炭酸水(第二)ニ浸シタル單衣若クハ綿布等ヲ以テ之ヲ包ミ成タケ速ニ棺内ニ歛ムヘシ若シ濃厚石炭酸水(第一)ヲ用テ灌腸シ然ル後綿ヲ以テ肛門ヲ塞シテ得ハ最良トス

但此患者ノ死體ハ最モ腐敗シ易キヲ以テ速ニ棺内ニ歛メ且ツ成タケ速ニ之ヲ火葬若クハ埋葬セシムヘシ

第十八條 便器ニ承ケタル瀉下物ハ濃厚石炭酸水(第一)或ハ硫酸鐵合劑(第五)硫酸硫酸鐵合劑(第六)亞硫酸溶液(第十)等ヲ混和シ屋外ニ持出シ壺或ハ桶ニ入レテ密蓋シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ燒却スヘシ其燒却法ハ虎

列刺ノ部第五十六條ヲ參照スヘシ

第十九條 甚シク瀉下物ニ汚染シタル紙及ヒ綿布等ハ悉皆取集メ之ヲ燒却スヘシ

第三 衣服臥具等消毒法

第二十條 衣服、臥具、蚊帳、蓆等ノ甚シク瀉下物ニ汚染シタルモノハ之ヲ燒却スヘシ其汚穢スル少ナクシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クヨ二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五

分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗浄シ日光ニ曝スヘシ若シ石炭酸等ノ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ

第二十一條 其少ク瀉下物ニ汚染シ洗濯スヘカラサルモノハ其品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ蒸蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第二十二條 死體ニ着セシ衣服ノ消毒法ハ前二條ニヨリ之ヲ施スヘシ

第二十三條 瀉下物運搬人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ハ患者及ヒ汚穢物ニ久シク觸接セルヲ以テ其衣服等ニ消毒法ヲ施ス₁第二十條

第二十一條ニ依ルヘシ
但日々衣服ヲ更換スル者ハ沸湯ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スルヲ以テ足レリトス

第二十四條 看護人及ヒ患者死體運搬人ノ衣服、手道具等直チニ病毒ニ汚

染セサルモ稍々浸染ノ疑アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ蒸蒸シ日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第二十五條 患者及ヒ死體ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之レヲ柱若シクハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之レヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸シ然ル後チ窓戸ヲ開キ病室附着ノ恐アル板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之レヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又タハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍室モ亦之レニ倣フヘシ

但亞硫酸ノ爲メ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ選用スヘシ輕症痲病ノ如キハ必スシモ本條ノ處置ヲ要セス醋水若クハ「コロール」水ニテ室内ヲ拭淨スルヲ以テ足レリトス

第二十六條 患者アリタル船室ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

第二十七條 普通病院ニシテ區隔セシ病室及ヒ一時假用セシ家屋等ノ消毒法モ亦前條ニ同シ

但病室ハ數多ノ患者交々此内ニ入ルチ以テ惡性ノ痲病ナラサルモ尙ホ前條ノ消毒法ヲ用フヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十八條 便器ハ之ヲ用フル毎ニ稀薄石炭酸水(第二)亞硫酸溶液(第十)

チ以テ洗滌スヘシ

第二十九條 患者及ヒ死體若クハ瀉下物ニ汚染シタル物品ヲ運ヒタル諸器

ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗滌スヘシ

第三十條 病室内ニ用ヒタル什具及ヒ醫用器械等ハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ然ル後沸湯ニテ洗淨スヘシ

第六 廁圍溝渠等消毒法

第三十一條 患者ノ入りタル廁圍ハ他人ノ入ルチ禁シ亞硫酸溶液(第十)或

ハ硫酸鐵合劑(第五)ヲ注キ其瀉下物ハ速ニ之ヲ汲取り人家遠隔ノ地ニ搬送スヘシ而シテ其糞壺ニハ復タ同様ノ消毒法ヲ行フヘシ

第三十二條 糞壺及ヒ桶ノ破壞シテ病室滲漏ノ疑アルモノハ之ヲ掘除ケ其周圍ノ土ヲ掘取り濃厚石炭酸水(第一)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ充分ニ灌注シ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

但消毒ノ量ハ其壺中糞量五分一乃至三分一ニナルヘシ

第三十三條 若シ誤テ吐瀉物ヲ溝渠下水等ニ投棄スルコトアルキハ充分ニ亞硫酸溶液(第十)或ハ硫酸硫酸鐵合劑(第六)ヲ注キ其淤泥ノ撈ヘ得ヘキモノハ之ヲ撈ヘテ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ或ハ多量ノ水ヲ灌キテ疏通セシムヘシ

但本條ノ如キ場處ニ於テ既ニ病毒ヲ混入スルキハ消毒法モ其功ヲ奏シ難ク終ニ増殖ヲ致サシムヘシ故ニ豫メ戒諭シ誤テ之ニ投棄シ或ハ陰ニ

投棄スル等ノ事ナカラシムルヲ要ス
實布埜利亞

實布埜利亞ハ一種ノ猛烈ナル傳染病ニシテ其毒ハ患者ノ痰唾、涕汗等ニ含
トリ又呼出スル所ノ空氣モ其毒ヲ包含スルヲ以テ之ニ觸ル、時ハ老少ニ論
ナク皆之ニ感スルモノナリ而シテ幼稚ノ者ハ之ニ罹ルコト最モ多クシテ且ツ
危険ナリトス抑此病毒ハ其發生時季ヲ擇ハス又風土ニ關涉スルコトナク不
散在スルコトアリ又一時ニ廣ク流行スルコトアリ此症ハ必ス咽喉ニ發スルモノ
ニシテ之カ爲メニ其部ノ壞爛ヲ致シ甚シキモノハ須臾ニシテ斃ル故ニ從來
喉風、喉痺、馬痘風、纏喉風、咽氣ト唱ノルモノ、中亦往々之レ有リ此病ハ患
者ニ觸接セサルモ尙ホ感染ノ恐アルモノニシテ且ツ其毒久ク消滅セサルカ
故ニ隔離消毒ノ方法ヲ忽ニスヘカラス

第一項 清潔法

第一條 此病流行ノ際ハ務テ一般清潔法ニ注意シ既ニ發病スルキハ其室内
ノ掃除ヲ怠ルヘカラス家屋、衣類等清潔ニシテ且ツ隔離法充分ナルキ廣
ク流行ニ至ラスシテ消熄スルヲ得ヘシ

第二項 攝生法

第二條 此病ハ殊ニ咽喉ヲ侵スモノニシテ既ニ些少ノ咽吭炎アルモノハ自
カラ侵襲ヲ被リ易シ故ニ専ラ口内、喉頭、氣管等ノ炎症ヲ誘發スヘキ事件
ヲ戒メ常ニ含漱スルヲ良トス

但其誘發スヘキ事件トハ頸圍ヲ温保セシモノ驟カニ寒冷ニ胃觸レ或ハ
奇烈ノ飲食料ヲ用ヒ或ハ高談放歌シ或ハ幼稚ヲシテ頻ニ號泣セシメ及
小學校ニ於テ安ニ高聲ヲ發シ讀書唱歌セシムル等ニシテ皆能ク之ヲ戒
シムヘシ

第三項 隔離法

第三條 醫師ノ實布埜利亞ト診斷スルキハ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘ
シ

但患者治癒或ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル
後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 此病ハ患者ニ接觸シ或ハ患者ノ痰唾ニ汚染セル物品若クハ室内ノ
空氣ヨリ傳染スルヲ以テ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ看護人ノ外ハ漫ニ接近セ
シム可ラス殊ニ小兒ヲ遠サクヘシ

但室内ノ空氣ハ常ニ新鮮ナラシムルヲ要ス

第五條 病兒ハ健兒ト共ニ遊戯セシムヘカラス又學校等ニ行カシムヘカ
ス

第六條 病室内ニハ不用ノ衣服及ヒ器具ヲ置クヘカラス

第七條 患者ノ用フル所ノ飲食器及ヒ玩具等ハ他人ト共用スヘカラス

第八條 若シ其流行ノ勢盛ニシテ避病院ヲ要スルコトアルトキハ普通病院ヲ
區隔シ或ハ相當ノ空屋ヲ以テ之ニ充ル等其便宜ニ任スヘシ

第九條 避病院ヲ設ルキハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設テ患者死亡シタルキ之ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ豫メ其餘地ヲ設クヘシ

第十條 避病院ニ在ル患者ノ親戚又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サンコトヲ望ムキハ之ヲ許スヘシ
但屢交替スルハ許スヘカラス

第四項 消毒法

第十一條 此病毒ハ患者ノ痰唾及ヒ呼氣或ハ涕汗等皆之カ傳送物ナリ故ニ此等ノ排泄物ニ汚染シタル物ハ必ス消毒法ヲ行フヘキモノトス

第十二條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルコト左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第十三條 患者治癒ノ後他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シタル衣服ヲ着スヘシ看護人及ヒ避病院ノ醫師、看護人、死體取扱人等ノ他人ニ接スルキモ亦此法ニ從フヘシ

第十四條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等其室ヲ出ルキハ必ス盥漱スヘシ

第二 死體及ヒ排泄物等消毒法

第十五條 死體ハ醫師確認ノ後速ニ棺内ニ歛メシムヘシ若シ濃厚石炭酸水

(第一)ニ浸シタル綿ヲ以テ口鼻ヲ栓塞スルコトヲ得ハ最良トス但死體ハ成メテ火葬スルヲ良トス

第十六條 痰唾及ヒ涕汗等ヲ拭ヒタル手巾及ヒ紙、綿布ノ類ハ悉皆取集メ之ヲ焼却スヘシ

但水分剩多ニシテ燒盡シ難キキハ稀薄石炭酸水第二ヲ注キ人家遠隔ノ地ニ搬送シテ埋却スヘシ

條三 衣服臥具等消毒法

第十七條 衣服、臥具ノ甚シク汚穢シタルモノハ之ヲ燒却スルヲ良トス其僅ニ穢レタルモノハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ注キ浸シ置クコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ且ツ洗滌シ日光ニ曝スヘシ或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ以テ蒸蒸セシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第十八條 此病毒ハ極テ頑強ニシテ善ク粗穢ナル物ニ附着スルカ故ニ最モ注意シテ下條ノ消毒法ヲ充分ニ行フヘシ

第十九條 患者及ヒ死休ヲ置タル病室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸シ然ル後窓戸ヲ開キ疊、蓆壁障子等ニハ更ニ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ或ハ之ヲ以テ拭淨シ其他棚架及ヒ板敷等ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室、屍室及ヒ普通病院ヲ區隔セシ病室

又ハ臨時假用セル家屋モ亦之ニ倣フヘシ
但亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アルモノハ石炭酸蒸氣(第三)
或ハ熱氣消毒法等撰用スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第二十條 病室ニ用ヒタル什具飲食器及ヒ玩具等ノ甚シク汚穢シタルモノ
ハ之ヲ燒却スヘシ其燒却スヘカラサルモノハ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞
硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカ
ラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ温潤ニ堪フヘキモノ亞硫
酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ニテ一時間薰蒸スヘシ然ラサレハ室
外へ出スヘカラス

第二十一條 患者ノ玩弄セシ圖書書籍ノ類ハ之ヲ播展シ石炭酸蒸氣(第三)
或ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ

第二十二條 患者及ヒ死體ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注
シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其解舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗
フモ可ナリ

第二十三條 醫術器械等ノ木製及ヒ金屬製ニシテ病毒ニ接觸シタルモノ例
ヘハ壓舌鏡ノ如キハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ
發疹室扶私扶私名義特異ノ揮發性傳染毒ニシテ飢饉熱軍陣疫、囚獄熱等ノ稱

アリ從來腐敗熱神經熱發斑熱、温疫傷寒ト唱ヘシモノ、中ニモ亦此病アル
ト多シ其病タルヤ地方ヲ撰ハス氣候ニ關セス流行スルト雖モ多クハ衆人群
集大氣流通ノ不佳ナル所ニ萌動シ衣服身體ノ不潔或ハ飲食ノ不良不足及ヒ
過度ノ勞力、露臥、夜行其他身體ヲ衰弱セシムル事項ヲ誘因トシ傳染蔓延ス
ルモノナリ其流行スルニ及テハ貴賤老幼ノ別ナク其誘因アルカ或ハ隔離法
ノ行届サルヨリ倍、傳染ノ勢ヲ盛ニシ動モスレハ年ヲ亘リ消滅セサルコト
リ故ニ此病ノ豫防法ハ最モ忽ニスヘカラサルモノトス

第一項 清潔法

第一條 發疹室扶私ノ病室ハ不潔、狹隘、空氣ノ汚濁ヨリ生スルモノナレハ
其發現スルニ當テ囚獄、兵營及ヒ製造所、貧院、癩兒院其他群集雜居稠密
ノ場所ハ勿論一般ノ家屋タリモ掃除ニ怠ラス務テ清潔ニシテ且ツ空氣ヲ
流通セシムヘシ最モ其身體ニ切ナル清潔法ヲ至要トシ日々沐浴シ衣服ノ
洗濯ヲ怠ルヘカラス殊ニ病毒ノ發生ヲ助クヘキ一切ノ汚穢物即チ廁固、
芥溜、溝渠等ノ掃除ニ注意ヲ加フヘシ

第二條 避病院病室ニ於テ用フル所ノ臥具ハ無色若クハ淡色ノモノヲ要ス
ヘシ其汚染ノ見易キカ爲メナリ自宅療養ノ者モ亦同様ノ注意ヲ要スヘシ

第二項 攝生法

第三條 此病ニ感スルノ素因ハ各人多クハ之ヲ有スト雖モ就中飢饉ノ窮民

軍陣ノ兵卒監獄ノ囚徒等ノ如キハ其居所及ヒ攝生ノ不良ナルヨリ此病ニ罹ルモノ多シトス夫レ飢饉ノ時ニ當テハ攝生ノ事皆其宜キヲ得スト雖モ其最モ甚シキハ食物ノ不足ト不良トニアリ故ニ衛生官吏ハ務テ其食品中成タケ滋養分多キモノヲ撰ヒ有害ノ物ヲ指示シテ之ヲ避ケシムヘシ

第四條 兵卒ノ軍陣ニ在ルキハ固ヨリ攝生ノ方ヲ講スルニ追ナカルヘシト雖モ若シ一人發病スルキハ直チニ全軍ニ波及スルノ虞アルヲ以テ成ルタケ無用ノ露臥過勞ヲ慎ミ且ツ飯料ノ良否ニ注意ヲ加フヘシ囚獄懲役場ノ如キハ流行ノ際殊ニ空氣ノ流通及其食物ニ注意ヲ加ヘ工役等モ過度ナラシメサルヲ要ス一旦病毒ノ蔓延スルニ至テハ高貴豪富ノ人ト雖モ猶其傳染ヲ免ル、能ハス各人其素因アルヲ證スルニ足ル故ニ此時、當テハ務テ身體ノ溫度ヲ適宜ニ保持シ飲食ヲ攝シテ過度ノ勞力ヲ爲スヘカラス且ツ夜氣、風雨等ノ感冒及ヒ身體ヲ衰弱セシムルノ諸件ヲ戒ムヘシ

第三項 隔離法

第五條 醫師發疹室扶私ト診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ
但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第六條 發疹室扶私ハ其毒揮發性ニシテ患者ノ皮膚、蒸發氣呼氣ヨリ發ス

ルモノナレハ直チニ患者ニ接觸セサルモ尙ホ之ヲ感受スルコトアル故ニ患者ノ身體ヲ以テ皆病毒ナリト看做スヘシ又患者數名ヲ狹隘ノ一室ニ入ル、ハ其ハ病毒稠厚トナリ感染ノ勢益烈ク此室内ニ入ルモノ忽チ其病害ヲ受ルノ恐アリ故ニ患者ハ速ニ之ヲ隔離シ且ツ相當ノ廣室ニ移サ、ル可ラス
第七條 病室ハ適宜ニ窓戸ヲ開キ換氣法ニ注意シ故ニ其内ノ空氣ヲ清鮮ナラシメ看護人ノ外必ス接近セシムヘカラス

第八條 家族中ニ於テハ看護人ヲ始メ止ムヲ得サル事故アルノ外他人ト交通ヲ絶チ又老幼等ハ成タケ速ニ他家ヘ避退セシムヘシ否ラサレハ啻ニ害其ヲ受ルノミナラス之カ媒介トナリ大ニ傳播スルノ恐アレハナリ
但家人ト雖モ要用アルノ外其室内ニ入ルヘカスラ若シ外人ノ要用アリテ來ルキハ戸外ニ於テ之ヲ辨スヘシ且ツ看護人ハ成タケ更換スヘカラス是レ其揮發毒ノ衣服等ニ附着シテ廣ク他人ニ傳染スレハナリ

第九條 病室内ニハ不用ノ器具ヲ置クヘカラス殊ニ毛巾ノ類ハ其病毒ヲ包含シ易キカ故ニ必要ノ外決シテ之ヲ置クヘカラス
第十條 此病ハ死体ヨリモ尙ホ其病毒ヲ發出シ以テ感染セシムルノ例少ナカラス故ニ死體ニハ速ニ消毒法ヲ行フヘシ死體ニ沐浴セシメ或ハ屍傍ニ接近スル等ノコトハ決シテ爲スヘカラス

第十一條 患者治癒死亡ノ後ハ病室ニ消毒法ヲ行ヒ數週間窓戸ヲ開放シ風

氣ヲ流通スヘシ蓋シ消毒ノ後ト雖モ即チ室内ニ起臥スルキハ傳染ノ恐ナキニアラサルカ故ナリ

第十二條 船舶中ニ此病ヲ發スル者アルキハ速ニ其室ヲ異ニシ看護人ノ外交通ヲ絶ツコト尙ホ人家ニ於ルカ如クスヘシ

但此病ハ動モスレハ衆人群集セル船室ニ發シ又船中飲食ノ不良不足等其素因トナルカ故ニ若シ患者アラハ速ニ之ヲ隔離シ室内ノ清潔法ニ注意スヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等其他衆人群集ノ處ニ於テ發病セシ者

アラハ成ダケ速ニ之ヲ避病院ニ送ルヲ良トス若シ避病院ナク他ニ相當ノ空屋アラハ直チニ此ニ送致スヘシ然レモ其發病セシ所ノ室廣潤ニシテ且ツ他人ト充分ニ隔離スルヲ得ハ必シモ他ニ送ルヲ要セサルヘシ

第十四條 避病院ノ位置ハ人家ニ接近セス且ツ恒風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ置クヘカラス

但其門前ニ高ク病名標旗ヲ掲クヘシ

第十五條 避病院ノ建築ハ簡易ヲ旨トシ善美ヲ要セス是レ流行終熄ノ後燒却スルヲ良トスレハナリ

第十六條 避病院ノ病室ハ最モ潤大ナルヲ要スル故ニ患者一人ニ二坪半ト見積リ其人數ノ豫計ハ虎列刺第三十四條ニ載セタル割合ニ從ヒ之ヲ設ク

ヘシ其他醫師詰所、事務所、看護人休息所並ニ簡易ノ蒸氣器等ヲ設クヘシ
(虎列刺第三十六條參照)

第十七條 避病院ノ門側ニ輕易ナル風呂ヲ置キ看護人、見舞人等退出ノ時必ス之ニ浴セシムルヲ良トス又病室ハ空氣ヲ流通セシメンカ爲メ窓戶ヲ開キ冬時ハ暖爐ヲ置キ其温度ヲ適宜ニシテ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但患者退院若クハ死亡スルノ後ハ毎回其病室内ニ消毒法ヲ行フヘシ

第十八條 避病院ニハ清淨ナル屍室ニ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チニ之ニ遷シ病室ニ留置クヘカラス

但其屍室ニハ親族ノ弔者ヲ入ルカ爲メ其餘地ヲ設クヘシ其弔者ハ成ダケ速ニ來ルヘキ手續ヲ爲スヲ要ス此病ハ死体モ亦タ發毒ヲ逞フスルモノナレハ必ス久ク留置クヘカラス

第十九條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ之ヲ假用シ或ハ苦苺等ノ屋舎ヲ假設スルモ可ナリ

第二十條 尋常ノ病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ二人ニ一人ヲ附シ輕症ノ者ニハ四人ニ一人ヲ附シ其快復ニ趣ク者ニハ六人ニ一人ヲ附スル割合

ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ
但看護人ニハ其表記アル衣服ヲ着セシメ且ツ成タケ其人ヲ更換セシム
ヘカラス

第二十二條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲サン
トテ望ムルハ之ヲ許スヘシ但其看護人ハ多人數ヲラサルヲ要シ且ツ屢々
更替スルヲ許スヘカラス

第二十三條 避病院ニ携ヘ來リシ衣服、手道具等ハ別室ニ置クヲ良トス
第二十四條 患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者來訪スルモ成タケ室内ニ入
ルヲ許ササルヲ良トス

第二十五條 此病ハ揮發性ニシテ一時ニ衆人ヲ侵シ若シ一人發病スルハ
其衣服等ニ附着セル病毒忽チ傳播シ大ニ流行ノ媒介トナルヲ以テ流行ノ
際ニハ成タケ衆人郡集スルノ事業ヲ差止メ且ツ社寺參拜等ノ爲メ多人數
旅行スルヲ差止ルコアルヘシ

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ患者及ヒ死者ノ身体ヨリ發シテ衣服、臥具、器具ハ勿
論居室ノ疊、蓆、屏障等ニ至ルマテ盡ク附着シテ其病毒久ク潛匿スルモノ
ナレハ病院及ヒ死体ニ近接セルモノハ都テ病毒ト同視シ消毒法ヲ行フヲ
要ス

第二十七條 消毒法ハ其物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治療ノ後始テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節等ハ
必ス沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒法ヲ施シメル衣
服ヲ着スヘシ看護人及ヒ患者死体運搬人並ニ避病院ノ醫師、死体取扱人
及ヒ船中ニテ患者ト同席セル者等他人ト交通スル時モ亦此法ニ從フヘシ
第二十九條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者
親戚朋友ノ一時見舞タル者ハ成タケ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗
拭スヘシ

第二 死体及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死体ハ充分ニ稀薄石炭水酸第二ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ
以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ歛ムヘシ
但死体ハ成タケ之ヲ火葬スルヲ良トス

第三十一條 西洋形船舶航海中ニ死者アルハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ
浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛ノ通常屍室或ハ船
中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘ
シ
但陸地ニ着スルハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ

第三十二條 此病ハ必シモ排泄物ヨリ傳染セスト雖モ空氣ヲ汚スノ恐アルヲ以テ成タケ速ニ之ヲ取除ケ病室内ニ留置クヘカラス

第三 衣服臥具等消毒法

第三十三條 患者ノ久ク着シタル衣服、臥具ノ汚垢ニ染ミタル者又ハ死体ニ直接シタル臥具、避病院ニテ用ヒタル臥具、蚊帳等ハ成タケ焼却スルヲ良トス其焼却ヲ憚ルヘキモノニシテ洗濯スヘキハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ濯キ浸シ置ク一二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗淨シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上煮沸スヘシ

第三十四條 同前ノ品種ニシテ洗濯スヘカラサルモノハ亞硫酸瓦斯(第九)石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ蒸蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十五條 患者及ヒ死体ヲ置キタル室ノ疊、蓆類ハ之ヲ柱若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸柵等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戸ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸シ然ル後窓戸ヲ開キ病室附着ノ恐アル柱、板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗淨シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室

及ヒ屍室モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器、書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第二)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第三十六條 患者アリタル西洋形船舶ハ其所置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルキハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第二)ヲ蒸スルノ後ニ非サレハ陸揚スルヲ許サス

第三十七條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗フヘシ

第三十八條 尋常家屋ヲ避病院ニ假用セシ者ハ其病室トナセシ部分ハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ洒キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

第三十九條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十條 避病院ハ流行ノ後成タケ焼却スルヲ良トス否ヲサレハ先ツ汚穢

シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗浄シ數日間開放シテ大氣ニ曝シ然ル後之ヲ取毀ツヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十一條 病室ニ用ヒタル什具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗浄スヘシ其洗フヘカラスアルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ堪フヘキモノハ之ヲ濕スチ瓦トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間蒸氣スヘシ

第四十二條 書籍新聞紙ノ類病室ニアリタルトキハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣

(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ 第四十三條 醫術器械及ヒ職人手道具其他木製、金屬製、陶製、漆製ノ諸器類ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フ可シ

痘瘡

痘瘡ノ病毒ハ揮發性及ヒ固性傳染毒ニシテ全ク患者ノ身体ヨリ發出シ又ハ死体及ヒ痘漿、痘痂ニ直接シテ感染スルノミナラス其患者ニ接觸セシ衣服、臥具其他一切ノ物品ヨリモ傳染シ又其病室内ノ空氣、塵埃モ之カ媒介トナリテ其病毒ヲ傳送スルモノトス

痘瘡ハ古來ヨリ全世界ニ發現シ殊ニ惡性流行スルキハ其勢猖獗ニシテ無數ノ人衆ヲ害シ良醫モ亦手ヲ束テ其術ヲ施ス可カラサルアリ但人生一回此病

ニ罹ルキハ感受性ヲ脱盡シ得ルヲ以テ英國ノ醫博士フエンチル氏牛痘接種ノ法ヲ發明セシ以テ遠其善感スル者ハ復々天然痘ニ感スルナシ故ニ此法行ハレテヨリ大ニ患者ノ數ヲ減シ偶々流行スルモ其病性劇惡ニ至ラス殆ント其性ヲ變スルニ至ルヲ證スルニ足ル是故ニ種痘ヲ普及スルハ全ク此病ヲ防盡スル所以ニシテ即チ豫防ノ第一トス

第一項 清潔法

第一條 此病ハ各人感受性ヲ具フル故ニ一般清潔法ヲ要スルモ他病ニ於テ緊要トスルカ如クナラス但患者ノ居室ヲ清潔ニシ痘漿等ニ汚染セル衣服ヲ屢更換シ周圍ノ塵埃ヲ掃除シ專ラ他人ニ傳染スルヲ防クヲ要スルニアルノミ

第二項 攝生法

第二條 前條ニ載スルカ如ク牛痘ヲ接種シテ其素因ヲ脱盡スルキハ復々天然痘ニ感スルヲナシ然レモ一回種ヲ以テ足レリトスヘキニ非ス再三接種シ其善感ノ確徵ヲ取ラサルヘカラス唯衣服、飲食等ノ攝生ヲ以テ此毒ノ侵襲ヲ豫防スヘキニアラス

第三項 隔離法

第三條 醫師痘瘡ト診斷シタルキハ直チニ其家ノ門戸ニ病名票ヲ貼附スヘシ

但患者治癒又ハ死亡若クハ避病院ニ送致シ其病室ニ消毒法ヲ行ヒタル後ハ即チ其病名票ヲ去ルヘシ

第四條 痘瘡ノ病ハ患者ノ身体又ハ其衣服、臥具等ヨリ傳染シ又患者ニ接近シタル者ノ衣服等ヨリモ傳染スルヲ以テ成ダケ患者ニ接近シ又ハ患者ノ用ヒタル衣服、器具等ニ觸ルヘカラス

第五條 自宅療養ノ患者ハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外ハ成ダケ接近スヘカラス巴ムヲ得サル事故アルノ外ハ他人ト交通ヲ絶チ殊ニ未痘者ヲ近クヘカラス

第六條 家族中ニ於テモ看護人ヲ定メ其他要用アル者ノ外成ダケ之ヲ室内ニ入シムヘカラス

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ

第七條 病室内不用ノ器具ハ勿論殊ニ不用ノ毛布等ヲ置クヘカラス

第八條 患者死亡ノ後其屍傍ニ接近シ并ニ死体ニ沐浴セシムル等ハ爲サルヲ良トス

第九條 縱令輕症ナル患者ト雖モ落痂後一週日ヲ經ルニアラサレハ學校其他衆人群集ノ場所ニ行カシムヘカラス

第十條 蚊蠅ハ好テ患者ノ皮膚ニ聚リ頗ル病毒傳播ノ媒介ヲナス者ナレハ病床ニハ常ニ蚊帳ヲ張り蚊蠅及ヒ其他ノ小蟲ヲモ防クヘシ

第十一條 病室ハ消毒ノ後ト雖モ數週間未痘者ヲ入ル可カラス

但同家内ニ於テ若シ復タ此病ニ罹ル者アルキハ此病室ヲ用フルモ妨ケナシ

第十二條 西洋形船舶航海中若シ發病者アルキハ其室ヲ異ニシ看護人ノ外他人ト交通ヲ絶ツテ猶ホ人家ニ於ケルカコトクスヘシ

第十三條 製造所、會社、學校、旅店等ニ在テ發病シ引取人ナキ者並ニ狹隘不潔ノ地ニ雜居スル者等ニシテ看護消毒法行届カス病毒ノ傳播ヲ防キ難キ者ハ之ヲ避病院ニ送ルヘシ若シ避病院アラサルキハ適當ノ空屋ニ移シテ之ヲ隔離スヘシ

第十四條 避病院ノ位置ヲ人家ニ接近セス且ツ恆風ノ上ニアラサル地ヲ撰ヒ必ス往來繁多ノ路傍等ニ設クヘカラス

第十五條 避病院ヲ新ニ構造スルトキハ空氣ノ流通ヲ主トシ善美ヲ要セス其床ヲ高クシ窓戸ヲ潤大ニシ且板壁ヲ用ヒテ洗淨ニ便ニシ其屋根ハ板葺菅葺等一時ノ便ニ任シテ可ナリ且其病室ハ潤大ナルヲ要スルヲ以テ凡患患者一人ニ二坪半ト見積リ之ヲ建設スヘシ

第十六條 避病院ノ病室ハ重症輕症ノ患者ヲ區別シテ之ヲ分隔シ二坪半ニ患者一人ヲ置クヲ常トシ縱令輻湊スルトモ一坪若クハ一坪半ニ一人ノ割

合ヨリ狹クスヘカラス

但此他醫師詰所、事務所、看護人休息所等便ニ之ヲ設ケ簡易ノ蒸蒸室ヲ設クヘシ

第十七條 避病院ノ門側ニハ輕易ナル風呂ヲ設ケ看護人、見舞人等外出ノ時入浴ノ用ニ供スヘシ

第十八條 避病院ハ窓戸ヲ濶大ニシ空氣ヲ流通セシメ冬時ハ暖爐ヲ置キ室内ノ溫度ヲ適宜ニシ空氣ノ代謝ヲ助クヘシ

但病室ハ患者治癒死亡ノ後毎回消毒法ヲ施スヘシ

第十九條 避病院ニハ別ニ清淨ナル屍室ヲ設ケ患者若シ死亡シタルトキハ直チニ此ニ移スヘシ

但屍室ハ親族ノ弔者ヲ人ル、カ爲メ其餘地ヲ設クヘシ且其ノ弔者ハ成タケ速ニ來ルノ手續ヲナスヲ要ス

第二十條 尋常病院ニハ決シテ此患者ヲ入ルヘカラス若シ院内ニ從來傳染病室ノ設アリテ充分ニ隔離法消毒法ヲ行ヒ得ヘキノ目的アルモノハ入院ヲ許スヘシト雖モ尋常ノ病院ヲ區隔シテ之ヲ用フヘカラス

第二十一條 人家稀疎ノ村落ニ於テハ必スシモ避病院ヲ設クルヲ要セス若シ相當ノ空屋アラハ假ニ之ヲ用フヘシ

第二十二條 避病院看護人ノ員數ハ重症ノ患者ニハ一人ニ三人ヲ附シ輕症ノ者ニハ三人ニ一人ヲ附スル割合ヲ以テ便宜斟酌シ且ツ晝夜交代セシムヘシ

但看護人ハ既痘者ニ限ルヘシ且ツ其表記アル衣服ヲ著セシメ成タケ其ノ人ヲ更換セシムヘカラス

第二十三條 避病院ニ在ル患者ノ親族又ハ別段ノ交誼アル者看護ヲ爲ンコトヲ望ムルハ既痘者ニ限り之ヲ許スヘシ但屢々更替スルヲ許スヘカラス

第二十四條 患者ノ親族等一時見舞ヲ爲サント請フキハ業ヲ許スト雖モ成タケ屢々スヘカラス其出ル時ニハ必ス充分ノ消毒法ヲ施スヘシ

第二十五條 流行ノ勢猛烈ナルキハ祭禮、劇場等衆人郡集ノ事業ヲ差止メ學校モ成タケ之ヲ閉ツルヲ良トス

第四項 消毒法

第二十六條 此病毒ハ膿漿、痂痘、呼氣、津唾及ヒ死体ヨリ傳染シ又患者ノ衣服、臥具、其他患者ニ接觸セシ器具及ヒ居室等ヨリモ傳染スルカ故ニ甚シク汚染セシモノハ成タケ燒却スヘシ

第二十七條 消毒法ハ浴物ニ從テ區別スルヲ左ノ如シ

第一 患者及ヒ看護人等消毒法

第二十八條 患者治癒落痂ノ後一週日ヲ經テ初テ他人ト交通シ又ハ避病院ヨリ退出ノ節ハ必シ沐浴シ石鹼水ヲ用テ全身ヲ洗ヒ他ノ衣服若クハ消毒

法ヲ施シタル衣服ヲ著スヘシ看護人及ヒ患者屍体運搬人並ニ避病院ノ醫師死体取扱人等ノ他人ニ交接スルコトモ亦此法ニ從フヘシ

第二十九條 自宅患者ヲ往診セル醫師及ヒ患者ノ家人ニシテ直接セサル者親戚朋友ノ一時見舞タル者等ハ石鹼水或ハ醋水ニテ顔面及ヒ手ヲ洗フヘシ

第二 死体及ヒ排泄物等消毒法

第三十條 死体ハ充分ニ稀薄石炭酸水第二ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ速ニ棺内ニ歛ムヘシ

第三十一條 死体ハ成ルタケ火葬セシムルヲ良トス埋葬シタルモノハ其病毒數十年ヲ經ルモ消滅セサルモノトス

第三十二條 西洋形船舶航海中ニ死者アルキハ速ニ濃厚石炭酸水(第一)ニ浸シタル單衣若クハ綿布ヲ以テ之ヲ包ミ假ニ棺内ニ歛メ通常屍室或ハ船中適宜ノ場所ヲ見計ヒ此ニ入レ置キ時々濃厚石炭酸水(第一)ヲ灌注スヘシ

但陸地ニ着スルキハ速ニ其地方ノ警察官吏衛生委員ニ届出處分スヘシ
第三十三條 落痂及ヒ病室ノ塵埃又ハ患者ニ觸レタル綿布紙等ノ斷片ニ至ル迄時々收拾シテ之ヲ焼却スヘシ

第二 衣服臥具等消毒法

第三十四條 患者ノ久ク用ヒタル衣服臥具及ヒ避病院ニ用ヒタル蚊帳ノ甚シク病毒ニ浸染シタル者并ニ避病院ノ臥具疊蓆等ハ之ヲ焼却スヘシ

第三十五條 患者ノ着シタル衣服臥具及ヒ手巾蚊帳等又ハ死体ニ着セシ衣服等ノ洗濯ニ堪フヘキモノハ之ヲ桶ニ入レ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌キ浸シ置クコト二十四時間ニシテ更ニ沸湯ヲ注キ四五分時ヲ經ルノ後水ヲ以テ洗浄シ日光ニ曝スヘシ石炭酸等若シ缺乏スルキハ熱湯中ニ入レ一時以上之ヲ煮沸スヘシ其洗濯ニ堪ヘサルモノハ品種ニヨリ亞硫酸瓦斯(第九)若クハ石炭酸蒸氣(第二)ヲ以テ薰蒸シ或ハ熱氣消毒法ヲ行ヒシ後日光及ヒ大氣ニ曝スヘシ

第三十六條 避病院ノ醫師、看護人及ヒ死体運搬人等ノ衣服ニ施スヘキ消毒法ハ前條ニ同シ

第四 家屋船舶等消毒法

第三十七條 患者及ヒ死体ヲ置キタ室ノ疊、蓆類ハ之ヲ挂若クハ壁ニ倚セ掛ケ戸棚等ヲ開放シ室内ニアリシ諸器具ハ之ヲ排列シ窓戶ヲ密閉シテ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰シ然ル後窓戶ヲ開キ病毒附着ノ恐アル柱板敷等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ撒布シ更ニ之ヲ拭淨シ其他ノ器具ハ石鹼水又ハ沸湯ヲ以テ洗浄シ充分大氣及ヒ日光ニ曝スヘシ避病院ノ病室及ヒ屍体モ亦之ニ倣フヘシ

但金銀器書畫其他彩色ヲ施セル物及ヒ絹帛等亞硫酸ノ爲メニ其色質ヲ變化スルノ恐アル者ハ初ニ之ヲ取除ケ別ニ石炭酸蒸氣(第三)或ハ熱氣消毒法等ヲ適宜撰用スヘシ

第二十八條 患者アリタル西洋形船舶ハ其處置尋常ノ家屋ニ大異ナシト雖モ下等客室ニ至テハ衆多ノ乘客皆積荷ノ間ニ枕藉シ幾ント彼我ノ別ナキカ故ニ若シ其中ニ發病者アルハ滿室ノ乘客、積荷、手荷物ハ皆病毒ニ浸染シタル者ト看做シ乘客、手荷物ハ上陸ノ時充分ニ消毒法ヲ行ヒ積荷ハ其儘其室ニ於テ六時乃至八時間亞硫酸瓦斯(第九)或ハ品種ニヨリ石炭酸蒸氣(第三)ヲ薰スルノ後ニ非レハ陸揚スルヲ許サス

第三十九條 日本形小船ハ前條ヲ斟酌シテ消毒法ヲ行ヒ海水ヲ以テ普ク船身ヲ洗淨スヘシ

第四十條 避病院或ハ便宜ニヨリ他ノ空屋ヲ假用セシモノハ其病室ニ供セシ部分ニ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰セシ後稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ注キ石鹼水ヲ以テ洗淨スヘシ

但消毒ノ後モ數週間其内ニ入ルヘカラス且ツ空氣ヲ流通セシムヘシ
第四十一條 病室ハ不斷換氣法ニ注意スヘシ是亦多少消毒ノ効アルモノトス

第四十二條 臨時假設ノ避病院ニシテ其保存スヘカラサルモノハ流行熄ム

ノ後之ヲ取毀ツヘシ尤モ其前汚穢シタル板敷、板壁及ヒ柱等ハ濃厚石炭酸水(第一)又ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ以テ充分ニ洗淨シ數日間開放シテ大氣ニ曝スヘシ

第五 什具運搬器等消毒法

第四十三條 避病院ニ携ヘ來リシ手道具、玩具等ハ治癒若クハ死亡ノ後亞硫酸瓦斯(第九)蓆蒸法ヲ行ハサレハ之ヲ出スヘカラス

第四十四條 患者及ヒ死体ヲ運搬セシ器具等ハ稀薄石炭酸水(第二)ヲ灌注シ更ニ石鹼水若クハ沸湯ヲ以テ洗淨スヘシ其解舟ノ如キハ海水ヲ以テ洗フモ可ナリ

第四十五條 病室ニ用ヒタル什具、玩具ハ總テ稀薄石炭酸水(第二)或ハ亞硫酸溶液(第十)ヲ灌キ然ル後石鹼水又ハ沸湯ニテ洗淨スヘシ其洗フヘカラサルモノハ病室ニ消毒法ヲ行フノ際其内ニ排列シ濕潤ニ滲フヘキモノハ之ヲ濕スヲ良トス 亞硫酸瓦斯(第九)或ハ石炭酸蒸氣(第三)ヲ以テ一時間之ヲ蒸蒸スヘシ

第四十六條 患者ノ玩弄シタル圖書、書籍、新聞紙ノ類ハ之ヲ緋展シ石炭酸蒸氣(第三)若クハ亞硫酸瓦斯(第九)ヲ薰蒸スヘシ或ハ熱氣消毒法ヲ行フモ可ナリ

第四十七條 醫術器械及ヒ木製、金屬製、陶製、漆製等ノ諸器ニシシ病毒ニ觸レタルモノハ總テ稀薄石炭酸水(第二)ヲ以テ洗フヘシ

○傳染病豫防規則第十三條船舶檢查手續明治十四年十月內

務省乙第四十九號

警視廳府縣

昨明治十三年太政官第二十四號公布傳染病豫防規則第十三條船舶檢查之儀
ハ左ノ手續書ニ據リ可取扱此旨相達候事

傳染病豫防規則第十三條船舶檢查手續

- 一 虎列刺有病地方ナリ來ル船舶ハ之ヲ檢查シ船中ニ該病者死者ナキモノハ
乗客積荷共直チニ上陸ヲ許スヘシ
- 一 虎列刺病者死者アル船舶ハ陸上ニ離レタル場所ニ停置キ先ツ其病者死者
ニ消毒法ヲ行ヒテ之ヲ處置シ次ニ乗客ニ消毒法ヲ行ヒテ上陸セシメ終リ
- 一 積荷船舶ノ消毒法ヲ行ハシムヘシ而シテ全ク其消毒ヲ終リタルハ何時
ニテモ他港ニ向ケ出帆シ又ハ他ノ船舶ニ交通スルヲ得ヘシ

○檢疫停船規則明治十三年七月

太政官第二十九號布達

明治十二年(七月)第二十八號布告海港虎列刺病傳染豫防規則別冊ノ通更正
シ檢疫停船規則ト改稱候條此旨布告候事

檢疫停船規則

第一條 日本政府ハ虎列刺病ノ蔓延ヲ防カンカタメ茲ニ左ニ掲クル規則ヲ

開港場ニ施行スルヲ布告ス而シテ更ニ其施行ノ停止ヲ令スル迄ハ之ヲ
實施スルモノトス

第二條 中央衛生會ニテ決スル處ノ開港場ニ官吏及ヒ至當ノ教育ヲ受ケ能
ク職任ニ堪ユヘキ日本又ハ外國醫士化學士及ヒ相當ノ助役ヲ以テ地方檢
疫局ヲ設置スヘシ而シテ其局員ノ數ハ其港入船ノ多寡ニ應シテ増減アル
ヘシト雖モ檢疫一切ノ事務ヲ速ニ整理スルニ差支ナキヲ以テ足レリトス
ヘシ(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條改正)

都テ此地方檢疫局ハ中央衛生會ノ管轄ニ屬スヘシ

第三條 政府ハ檢疫停船規則ヲ施行スル各開港場ニ於テ停船場ヲ定メ且虎
列刺患者ヲ容ルヘキ病院并ニ該病ノ疑アル患者ヲ容ルヘキ病院ヲ建設シ
遺骸ヲ處置スヘキ地消毒法ヲ施行スヘキ且場所并ニ停留セラレタル人ノ
タメ都テ必需ノ具ヲ備タル屋舎ヲ設置スヘシ

第四條 檢疫信號旗ヲ掲ケタル番船ヲ各港口ノ近傍ニ置キ各船入港ノ前檢
査ノタメ之ヲ停止シ地方檢疫局ノ人員少クモ二名派出シテ之ヲ檢査スヘ
シ但右局員ノ内一名ハ必ス醫士タルヘシ而シテ船長醫士或ハ船内ノ人ハ
誰ニテモ檢疫官吏ノ訊問ニ對シ都テ之ニ應答シ又所定ノ式紙ニ事項ヲ記
入シ其氏名ヲ記シタル明告書ニ調印シテ差出スヘシ(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條改正)
般長ハ檢疫官吏ノ來メニ應シ船内ノ各部ヲ開キ檢査ヲ受クヘシ但シ艙ハ

航海中船客又ハ乗組人ニテ占居シタルトキ又ハ他ノ事故ニ依テ病毒ニ感染シタル恐レアルトキハ其検査ヲ受クヘシ
檢疫官吏ハ航海日記ヲ査閲シ乗組人及ヒ船客ノ人名録ヲ船内現在ノ人員ト引合ハスヲ得ヘシ

第五條 虎列刺病流行セザル港又ハ其疑ナキ港ヨリ來航スル船ノ船長ハ明告書及其他ノ手續ヲ以テ該船有病ノ港又ハ其疑アル港ニ立寄ラス又有病ノ船舶若クハ其疑アルモノト直チニ交通セス且航海中眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲモ船内ニ發セシモノ無キ旨ヲ證明シテ檢疫官吏ヲ満足セシムルキハ該船ハ直チニ入港スルヲ得ヘシ軍艦ハ其艦長及醫官ニテ調印セル書面ヲ以テ前條ノ趣ヲ明告スル迄ニテ足レリトスヘシ而シテ該艦ハ検査ヲ經ス入港スルヲ得ヘシト雖モ若シ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ檢疫停船規則ニ從フヘシ(同上布達ヲ以テ本條ニ追加ス)

第六條 船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ニ罹リタル者無シト雖モ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ルカ又ハ其航海中直ニ有病ノ船若クハ其疑アルモノト交通シタル船舶及ヒ船内ノ人員ハ其港ヨリ出帆ノ日又ハ有病若クハ其疑アル船ト交通ノ日ヨリ起算シテ七日ノ期滿ツル迄ハ停留セシムヘシ但地方檢疫局ニ於テ右ノ時間ヲ短縮スルトモ差支ナキヲ認ムルキハ此限ニアラス

右七日ノ期該船來着ノ上又ハ其前既ニ過キ去ルキハ消毒法ヲ行ヒシ上速ニ船客ノ上陸ヲ許スヘシ

一般ノ積荷ハ消毒法ヲ施スニ及ハス自餘ノ物品ハ檢疫官吏ノ見込ヲ以テ消毒法ヲ行ヒ或ハ行ハサルヘシト雖モ爛布古衣夜具ハ勿論其他檢疫官吏ニ於テ特ニ危険ナリト見込ムモノハ消毒法ヲ行フヘシ

消毒法ヲ行ヒタル物品ハ速ニ陸揚スルヲ得ヘシト雖モ消毒法ヲ行ハサル物品ハ停船ノ定期滿ル迄陸揚スヘカラス若シ停船中眞性虎列刺及ヒ疑似症ヲ發スルキハ其船及ヒ人員物品ハ都テ第八條第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第七條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル軍艦ハ其艦長及ヒ醫官ヨリ書面ヲ以テ該艦來港前七日以内艦内ノ者有病ノ港或ハ其疑アル港ニ上陸セシト無ク又ハ病毒感染ノ恐ナク且航海中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發セシト無キ旨ヲ明告スルキハ直ニ入港スルヲ得ヘシ右ノ書面ヲ差出サ、ルキハ該艦ハ檢疫停船規則ニ從ハシムヘシ(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條ニ追加)

第八條 船舶來港ノ上其船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ檢疫官吏ニテ指示シタル停船場ニ移シテ要用ノ消毒法ヲ行ヒシ日ヨリ起算シテ七日ノ間停船セシムヘシ(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條改正)
船舶來港前病毒消滅シ而シテ檢疫官吏ノ満足スヘキ方法ヲ以テ消毒法ヲ

施行セル上ハ地方檢疫局ニ於テ可トスル程停船ノ時間ヲ短縮シ得ヘシ消毒法施行後停船中眞虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スル者アルキハ地方檢疫局ノ必要ト考斷スル程消毒法ヲ反復施行シ其施行ノ時ヨリ起算シテ尙三日間停船セシムヘシ但最初定メタル時限猶三日以上アルキハ最初定メタル時限ニ達スル迄停船セシムヘシ

患者及ヒ死者ノ遺骸ハ第九條ニ從ヒ處置スヘシ

第九條 前條ニ記スルカ如キ船舶ノ來着スルニ方リ其乗組ノ患者未ダ癒エサレハ其容体ニ依リ之ヲ避病院ニ移シ若シ已ニ死シテ遺骸ノ處置未ダ濟マサルキハ其爲メニ設ケタル場所ニ於テ火葬スルカ又ハ其關係アル者ノ望ミニ任セテ十分消毒法ヲ行ヒシ後埋葬スヘシ

患者及ヒ遺骸ヲ船中ヨリ他ニ移シタル後夜具衣類其他ノ物品及ヒ船内何レノ部分ニテモ病毒感染ノ恐アル者ハ地方檢疫局ニ於テ指示セル如ク十分ニ消毒法ヲ施スヘシ而シテ消毒法ヲ施ス爲メ要用ノ人ト船中ヲ取締ルヘキ人トノ外都テ船内ノ人員ハ其人ノ爲メ特ニ設ケル所ノ家屋ニ移シ消毒法ヲ行フヘシ船内ニ残りタル人員ハ船内ニテ消毒法ヲ受クルカ又ハ交代シテ陸上ニアル適當ノ家屋ニ於テ之ヲ受クヘシ

第十條 有病ノ港或ハ其疑アル港ヨリ出帆シ途中ノ港ヲ經ルト雖モ其港ニ於テ檢疫處置ヲ受ケサル船舶ハ直チニ有病ノ港又ハ其疑アル港ヨリ來ル

モノト認メ處置スヘシ

第十一條 定期郵便ヲ運搬スル諸船ハ着港ノ上速ニ其郵便物ヲ運送スルヲ得ヘシ而シテ政府ハ右ノ郵便物ヲ陸揚配達ノ爲メ至當ノ方法ヲ設クヘシ(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條改正)

第十二條 病院ニ入ル患者ハ治療及ヒ必要品ヲ受クルヲ得ヘシ

病院或ハ停泊ノ船内ニ在ル患者ヲ尋訪セント欲スル人ハ地方檢疫局ニ於テ定メタル方法ニ從フヘシ

避病院ニ關係ナキモ醫業ニ達シタル醫士ハ患者又ハ其代理人ノ請ニ由テ診察協議スルヲ得ヘシ

患者ハ醫士ヨリ退院ヲ許ス迄ハ病院ヲ退去スルヲ得ス

第十三條 船中ニ於テ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發スルコトナキ時ハ停留セラレタル人ヲ船中ニ停メ置テ得ヘシ又ハ地方檢疫局ニ於テ衛生上ノ見込ニ從ヒ特ニ陸地ニ設ケアル避病ノ場所ニ移サルノアルヘシ

第十四條 檢疫停船規則施行ノ港ニ來着スル船舶ニ於テ檢疫官吏之ヲ虎列刺ノ原因ナラント思考スル疑似ノ病徴ヲ發スル者アルキハ其患者ハ病院ノ別室ニ移シ船ハ醫士ニ於テ其病症ヲ審斷スルニ充分ノ時間ヲ終ル迄停留セシムヘシ但其時間ハ四十八時ニ過クヘカラス而シテ地方檢疫局ハ醫士ノ報告ニ依リテ該規則ノ内其場合ニ適スル條款ヲ實施スヘシ(明治十二年七月第

三十號布達ヲ以テ本條改正

第十五條 有病ノ港又ハ其疑アル港ヲ發シ船用品或ハ荷物積込ノ爲メニ途中檢疫所ノ設ケアル無病ノ一港ニ立寄タル船舶ハ豫メ檢疫官吏ノ検査ヲ經且ツ必要ト認メタル消毒法ヲ行ヒ船用品或ハ貨物ヲ積入ル、毎ニ地方檢疫局ヨリ指示スル方法ニ從フ可シ

又該船内ニ眞性虎列刺病若クハ疑似症ヲ發シタルハ該船又ハ其乗込人及ヒ物品ヲ處置スルハ第八條第九條ニ準スヘシ但シ該船内ヨリ上陸スル者アル時ハ他船ニテ到着シタル人ニ行フヘキ同一ノ處置ヲ爲スヘシ

第十六條 船舶ノ検査ハ其來着後成ルヘク速ニ施行スヘシ若シ來着後十二時間ヲ過キテ検査ヲナサ、ル時ハ入港スルヲ得ヘシ但シ其遲延天氣惡キカ爲メカ又ハ避ケ難キ事情アルカ爲メカ又ハ船長若クハ該船ニ關係アル人ノ所行或ハ詐偽ニ出ヅルカノ時ハ此限ニアラス其場合ニ於テハ其遲延シタルノ事故終リタル時検査ヲ爲スヘシ

第十七條 地方檢疫局ヨリ指圖シタル消毒法ハ檢疫官吏之ヲ施行シ其船ノ士官及ヒ船員之ヲ補助スヘシ但消毒法ハ之ヲ命シタル時ヨリ成ルヘク二十四時間ニ完了シ而シテ其入費ハ船主又ハ其責アル者ヨリ辨償ヘシ

第十八條 檢疫停船規則ヲ施行スル港内ニ淀泊中船内ニ眞性虎列刺病又ハ疑似症ヲ發シタル船舶ハ直ニ第八條第九條ノ規則ニ從フヘシ

然リト雖モ若シ其船既ニ本港ニ於テ停留ヲ經タル時ハ檢疫官ハ地方檢疫局ニテ必要ト考斷スル丈ケノミノ消毒及ヒ検査ノ方法ヲ反覆施行スヘシ
(明治十二年七月第三十號布達ヲ以テ本條改正)

第十九條 虎列刺病既ニ流行スル港内ニ來着スル船舶検査消毒患者及ヒ死者ノ處置ヲ爲スハ前記ノ規則ニ從ハシムヘシ右ヲ施行スル爲メノ豫備ハ政府ニ於テ爲スヘシト雖モ船及ヒ人員停留ノ規則ハ休止スヘシ

第二十條 第六條第八條及ヒ第九條ニ記スル船舶ノ景狀地方檢疫局ニ於テ特ニ公衆ノ健康ニ危険ナリト思慮シ非常ノ處置ヲ必要トスルハ此規則外ニ豫防ノ嚴制ヲ施スヲ得ヘシ其場合ニ方リテ地方檢疫局ハ直ニ中央衛生會ニ臨時ノ報告書ヲ差出スヘシ而シテ右報告書ノ寫ハ請求ニ依リテ地方檢疫局ヨリ之ヲ該船ノ船長船主又ハ其用達ニ付與スヘシ

第二十一條 検査中又ハ停留中ノ船舶又ハ停留人ノ寓所ニハ凡ソ何人ヲ問ハス地方檢疫局ノ許可ヲクシテ往クヲ許サス

第二十二條 前條ノ規則ヲ施行スルニ就テ其人ニ係ル所ノ食料醫藥其他欠クヘカラサル費用ハ其本人又ハ代理人ヨリ辨償スヘシ

第二十三條 此規則ニ背キ或ハ從フヲ拒ム者ハ犯ス毎トニ貳百圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ若シ其船長船主若クハ其船ノ用達又ハ其各人若クハ一人ノ命令又ハ利益ノ爲メ此規則ニ背キ或ハ從フヲ拒ムハ每犯罰金五百

圖ニ至ルマテ増加スルヲアルヘシ
 此規則ニ就テ拂フヘキ費用ヲ辨償セサルモノアルトキハ民事ノ訴訟ヲ以テ之ヲ要求スヘシ
 但シ罰金ハ科セサルヘシ
 此規則ヲ犯シ停留場ヲ脱去スル者ハ(船又ハ人)罰金ヲ科シ且即時停留場ニ返ラシムヘシ

○虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則 明治十五年六月

月第三拾 壹號布告

判決例(明治十六年十二月八日)
 船長ノ命ニ從ヒタルモノト雖モ檢査執行ヲ待タズ上陸シタルモノハ尙ホ本則ノ制裁ヲ免カレサルヤ否
 船舶検査規則ハ檢査官ニ於テ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ノ検査ヲ爲スノ規則ニシテ乗込人旅客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則左ノ通制定ス

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則

- 第一條 凡ソ虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶ハ檢査官ノ検査ヲ受ケ其記名セル許可ノ證書ヲ得タル後ニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚ヲ爲ス可カラズ
- 第二條 其船中該病患者又ハ該病死者ナキトキハ檢査官直チニ其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及乗組人船客ノ上陸並積荷ノ陸揚ヲ爲スノ許可ヲ與フ可シ
- 第三條 若シ其船中ニ該病患者又ハ該病死者アルトキハ檢査官其船舶ヲ陸

地及ヒ他船ニ傳染ノ虞ナシト認ムル距離ニ於テ其指定スル場所ニ碇泊セシム可シ

ニ付キ定メタル手續ハ總テ船長ノ責任ニ付スヘキモノタルハ船長ノ命ニ從ヒタル者ハ検査執行ヲ待タズ上陸スルト雖モ本則ノ制裁ヲ受クルコトナシ

該病患者ハ之ヲ避病院若クハ其住居若クハ其他檢査官ノ適當ト認ムル場所ニ送致ス可シ其死者ハ若シ縁故人ノ望アルトキハ其望ニ應ヒ地方官所定ノ場所ニ火葬シ若シクハ十分ノ消毒法ヲ施シタル後之ヲ埋葬スヘシ
 前項ノ手續ヲ終リ檢査官ハ其乗組人船客ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後上陸ノ許可ヲ與ヘ其船舶及傳染ノ虞アリト認ムル積荷ニハ十分ナル消毒法ヲ施シタル後其船舶ノ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及積荷ヲ陸揚スルノ許可ヲ與フ可シ

第四條 此規則ニ違背シタル者若クハ此規則ノ執行ヲ妨害シタル者ハ刑法ニ依テ之ヲ處分ス可シ

第五條 此規則施行始終ノ期日並ニ場所ハ其都度内務卿ヨリ之ヲ指定ス可シ
 右奉 勅旨布告候事

○同上船舶検査手續 明治十六年六月

警視廳沿海府縣(東京府ヲ除ク)

昨十五年太政官第三十一號布告虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則第

五條ニ據リ該規則施行之義當省ヨリ相達候節内外國船舶トモ検査之義ハ左
之手續書ニ據リ可取扱此旨相達候事

虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査手續

一船舶入港スルハ検査官少クモ二名速ニ其船舶ニ到リ(外國船ニ到ルハ
ハ英語通辨者一名ヲ伴ヒ且検査官タルノ證書甲號書式ニ據ルヘシ但検査官
各一葉ヲ帶有スヘキモノトスヲ船
長ニ示シタル後)虎列刺病流行地方ヨリ來レルヤ否ヲ問ヒ該地方ヨリ來
レルモノハ其航海中ニ虎列刺病患者若クハ同病ニ罹リシ死屍アラサルヤ
否ヲ尋問スヘシ若シ必要ト認ムルハ自ラ船内ヲ巡檢スヘシ

一船舶航海中ニ於テ船内ニ虎列刺病患者若クハ其死屍ナキヲ信認スルハ
ハ(外國形船舶ノ多人數旅客ヲ搭載スルモノハ船長ニ要求シテ其船中ノ
健康ヲ證明スル書面ヲ出サシメ)直チニ規則第二條ニ據リ許可ノ證書乙號書
式ニ據ルヘシヲ船長ニ與フヘシ其患者若クハ死屍アルハ規則第三條ニ據リ之ヲ
處置シ先ツ乗組人船客ノ上陸ヲ許可スルノ證書丙號書式前段
ニ據ルヘシヲ船長ニ與ヘシ
ニ船舶積荷ノ消毒法全ク終リタル上ハ本條末項ニ據リ進航交通等ヲ許可
スルノ證書丙號書式後段
ニ據ルヘシヲ船長ニ與フヘシ

但内海ノ諸港ヲ往復スル内國小蒸氣船及ヒ日本形小船等ノ如キハ別ニ
簡易ノ検査手續ヲ設ケ之レニ與フル證書ハ必シモ乙號丙號ノ書式ニ據
ラス簡略ノ證書式ヲ用フルモ苦シカラス

一内外國軍艦モ亦検査ノ手續ヲ爲スヘシト雖艦長及醫官ニ於テ其航海中ニ
虎列刺病患者若クハ其死屍ナキヲ證明スルハ其證明書ヲ要求スルニ
止メ其患者若クハ死屍アルハ艦長及醫官ト協議ヲ遂ケ規則ニ準據シテ
相當ノ處置ヲ爲スヘシ規則第二條及第三條許可ノ證ハ共ニ交付スルニ及
ハス

一十五年第三十一號布告ノ全文ヲ英文ニ譯シ謄寫若クハ印刷シ置キ検査官
外國船ニ到ルトキハ之ヲ携ヘ行キ其艦長ニ一部宛交付スヘシ

甲號證書式寸法長大約六寸餘幅
大約八寸餘用紙適宜
表面

(某)港ニ到着スル船舶ノ船長ニ示ス

(某)府知事(又ハ警視總監)タル余ハ内務卿ノ命ニヨリ明治十五年六月二
十三日附第三十一號布告虎列刺病流行地方ヨリ來ル船舶検査規則ヲ施
行センカ爲メ(何某)ニ命スルニ検査官タルノ任ヲ以テス該官ハ(某)港ニ
到着スル諸船舶ノ虎列刺病流行地方ヨリ來リタルヤ否其航海中ニ於テ
虎列刺病患者若クハ死屍アラサルヤ否ヲ船長ニ尋問シ且其船内諸人ノ
健康ヲ證明スル證書ヲ船長ニ要求シ必要ト認ムルトキハ船内ヲ巡檢ス
ルノ權ヲ有スルモノナリ

大日本帝國

年月日 (某)府知事 又ハ(警視總監)位勳氏名印

裏面

表面ノ全文ヲ英文ニ譯シ之ヲ記載スヘシ
乙號證書式寸法大約甲號ニ
同シ用紙適宜

表面

(某)港ニ到着セシ風帆船(某)號ノ船長ニ交付ス

風帆船(某)號ハ虎列刺病流行地方ヨリ來レルヲ以テ(某)港檢疫官タル余
等ハ明治十五年六月廿三日附第三拾壹號布告虎列刺病流行地方ヨリ來
ル船舶検査規則ニ據リ之ヲ検査セシニ其航海中ニ於テ虎列刺病患者及
其死屍ナキヲ信認スルヲ以テ該規則第二條ニ據リ直チニ該船舶ノ他
港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及乗組人船客ノ上陸並ニ積荷ノ陸揚
ヲ爲スコトヲ許可スルモノナリ

大日本帝國(某)府下

年月日

(某)港

檢疫官

氏

名印

同

氏

名印

裏面

外國船ニ與フルモノハ表面ノ全文ヲ英文ニ譯シ之ヲ記載スヘシ
丙號證書式寸法用紙トモ乙
號ニ同クスヘシ

表面

(某)港ニ到着セシ風帆船(某)號ノ船長ニ交付ス

風帆船(某)號ハ虎列刺病流行地方ヨリ來レルヲ以テ(某)港檢疫官タル余
等ハ明治十五年六月廿三日附第三拾壹號布告虎列刺病流行地方ヨリ來
ル船舶検査規則ニ據リ之ヲ検査セシニ其航海中ニ於テ虎列刺病患者幾
人(又ハ死屍幾個)アリタルヲ以テ該規則第三條第一項第二項ニ據リ之
ヲ處置シ乗組人船客ニ消毒法ヲ施行シ其上陸ヲ許可スルモノナリ(船
舶積荷ニ消毒法ヲ施シタル後與フヘキ證書ハ該規則以下ヲ「該規則第
三條ニ據リ悉ク之ヲ處置シ總テ消毒法ヲ施行シ了リ該船舶ノ他港ニ
進航シ陸地又ハ他船ト交通シ及積荷ヲ陸揚スルコトヲ許可スルモノナ
リ」ニ作ルヘシ)

大日本帝國(某)府下

年月日

(某)港

檢疫官

氏

名印

同

氏

名印

裏面

外國船ニ與フルモノハ表面ノ英文ニ譯シ之ヲ記載スヘシ

○夜間檢疫信號 明治二十一年九月
內務省告示第十一號

夜間檢疫信號左ノ通相定ム但晝間檢疫信號ハ萬國檢疫信號ニ依ル

夜間檢疫信號

一 檢疫船前 檣船首碇泊燈ノ位置ヨリ凡ソ五尺以上ノ高サニ於ルニ於テ赤
色球燈二箇各三尺ヲ距テ縱ニ連掲シ檢疫船ノ信號トス
一 船舶ノ進航ヲ止メントスルトキハ其入船ヲ見掛ケタル時大砲ヲ一發シ船
ヲ止ムルノ信號トス
一 檢疫船碇泊ノ時ハ船首船尾ニ各一箇ノ碇泊燈ヲ掲ク

○古着 襪褌輸送ノ禁

明治十八年九月
內務省甲第三十一號達
虎列刺病流行ノ際ニ於テハ其流行地方ヨリ古着及ヒ襪褌ヲ他ノ健康地ニ輸
送スルヲ禁止スヘシ此旨相達候事

○獸類傳染病豫防規則

明治十九年九月
農商務省令第十一號

獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス
但明治九年ニ內務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類
ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則

第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂

一 牛疫

二 炭疽熱

三 鼻疽及皮疽

四 傳染性胸膜肺炎

五 傳染性鵝口瘡

六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又
ハ管理者ハ其患畜ト健畜トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患畜及之ニ接近シ獸類ヲ
診察セシムヘシ

第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者
ト連署シ直ニ警察署及戶長役場ヘ届出ツヘシ

第四條 獸醫牛疫ト診斷シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ
管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ
所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ
評價金五十圓マテ

手當金評價十分ノ四
同 十分ノ三

評價金百圓マテ 同 十分ノ二
 評價金二百五十圓マテ 同 十分ノ一
 評價金五百圓マテ 同 十五分ノ一
 評價金千圓マテ 同 二十五分ノ一

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及ヒ
 戸長役場ニ届出ヘシ

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ニ於テハ其旨ヲ患者所在ノ近傍ヘ
 榜示スヘシ

第八條 傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタル
 トキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ警察署及ヒ戸長役場
 へ届出ツヘシ

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其
 排泄物及之ニ觸レタル飼料藪草等ハ警察署官吏ノ指定シタル場所ニ於テ
 燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ
 但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患者ノ
 在リレ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官吏ノ指

定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸類市場
 ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得
 但本條ノ場合ニ於テ停止又ハ解停ノ都度其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘ
 シ

第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ハ郡區役所ヲ經警
 察署ハ直ニ所轄廳(警視總監北海道廳)ニ届出ツヘシ

第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ
 届ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管内及近接ノ地方廳ニ報告スヘシ(明治二
 農商務省令第六
 號ヲ以テ改正)

但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ報告スヘシ

第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ
 毎土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タ
 ルキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報知ヲ得タルトキハ
 豫防線ヲ劃シ獸類ノ出入往來ヲ停止スルヲ得(全上)

第十七條 牛疫蔓延ノ際ニ限リ其患者ニ接近シタル牛ハ假令健康ノモノナ
 リトモ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ之ヲ撲殺セシムルヲ得(全上)

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ全額ヲ下付スヘシ
第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官
府縣知事ハ其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得(全上)

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二
十五圓以下ノ罰金ニ處ス

但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

○獸類傳染病豫防心得 明治十九年九月 農商務省告示第十八號

當省令第十一號獸類傳染病豫防規則ニ關スル心得ノ事項左ノ如シ

獸類傳染病豫防心得

- 第一項 獸類ノ状態、飼養ニ注意スルコト
- 第二項 獸類ノ身体、畜舎器具等ヲ清潔ニスルコト
- 第三項 畜舎内ニ新鮮ノ大氣ヲ流通セシムルコト
- 第四項 畜舎内ノ温度ヲ調和スルコト
- 第五項 飲水ノ清淨ヲ要スルコト
- 第六項 適度ノ運動ヲ爲サシムルコト
- 第七項 健畜ト傳染病畜トヲ隔離スルコト

第八項 傳染病流行ニ於テハ病性ニ從ヒテ獸類ヲ區別シ成ルヘク獸類ノ出
入往來ヲ爲サシメサルコト

第九項 傳染病畜所在ノ入口ニハ其病名ヲ標示スルコト

第十項 傳染病流行地近傍ノ牧場ニ放牧セサルコト

第十一項 牧場ニ於テ傳染病發生シタルトキハ直ニ其患畜ヲ適當ノ場所ニ
圍ヒ置キ健畜ヲシテ之ニ接近セシメス又ハ放牧セサルコト

第十二項 傳染病流行ノ地方ニ於テハ獸類ノ市場、屠場等ニ消毒法ヲ施ス
コト

第十三項 所有者又ハ管理者ヲ問ハス創場、潰瘍等アルモノハ患畜ニ觸接
セサルコト

第十四項 傳染病流行ニ際シテ獸類發病シタルトキハ其何病タルヲ問ハス
獸醫ヲシテ速ニ之ヲ診察セシムコト

第十五項 傳染病流行ノ際ハ一層排水法ヲ怠ラサルコト

第十六項 牛疫若クハ傳染性胸膜炎ニ罹リ斃死シ又ハ撲殺シタル死体、
糞草、糞尿及其他ノ廢棄物ヲ運搬スルニハ牛ヲ用フヘカラサルコト

第十七項 獸類炭疽熱ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死体糞草糞尿其他ノ
廢棄物等ヲ運搬スルニハ牛馬ヲ用フヘカラサルコト

第十八項 鼻疽及皮疽流行ノ際ハ馬匹ヲ交尾セシメント欲セハ必ズ獸醫ノ

診察ヲ受クヘキコト

第十九項 鼻疽及皮疽ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死体糞草糞尿及其他ノ廢棄物ヲ運搬スルニハ馬ヲ用フヘカラサルコト

第二十項 傳染病畜アル舍内及牧場ニ於テハ獸醫又ハ看護者ノ外ハ濫ニ患者ニ接近セシメサルコト

第二十一項 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死体排泄物ハ勿論之ニ使用シタル飼料糞草等ハ悉ク燒棄ツルコト

第二十二項 患者ヲ撲殺場又ハ埋瘞場ニ移スノ途中他畜ノ近接ヲ避ケ且血液其他ノ排泄物ヲ遺脱セサルコト

第二十三項 糞尿ハ勿論其他汚穢物ハ總テ傳染病ノ媒介トナルモノナレハ務メテ之ヲ除去スルコト

第二十四項 傳染病流行地方ノ犬、猫、鶏、鴿等ハ飼主ニ於テ放飼セサルコト

第二十五項 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死体、排泄物ハ勿論其他該畜ノ爲メニ使用シタル畜舎欄庭貨車糞窖塵溜器具等ニハ消毒法ヲ施スコト

第二十六項 傳染病畜ノ看護者ハ勿論其患者ニ觸レタルモノニハ消毒法ヲ施スコト

第二十七項 患者舍ハ熱湯或ハ灰汁ヲ以テ洗ヒ石灰水或ハ粗製石炭酸水ヲ灌キ窓戶ヲ密閉シテ亞硫酸瓦斯ノ蒸氣ヲ施シ次テ窓戶ヲ開放シ大氣ヲ通シ日光ニ曝スコト

第二十八項 患者ノ糞ハ燒棄テ或ハ消毒藥ヲ灌キテ深く地中ニ埋メ尿窖ニハ石灰ヲ撒布スコト

第二十九項 患者ニ觸レタル飼槽、芻架、被覆獸類ニ用井及其他ノ器具ハ燒棄ツルヲ良トス但鐵製ノ器具ハ火熱ヲ加ヘタル後用フルモ妨ナキコト

第三十項 患者若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ニシテ止ムコトヲ得ス他行スヘキ場合ニ於テハ其身ニ消毒法ヲ施シタル後ニアラサレハ他行セサルコト

第三十一項 患者若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ノ衣服ハ成ルヘク燒棄ツルヲ良トス否サレハ其衣服ヲ石鹼水ニテ洗ヒ亞硫酸瓦斯ノ消毒法ヲ施シ十二時乃至二十時間消毒シテ充分大氣ニ曝スコト

第三十二項 患者或ハ其排泄物等ニ觸レタル者ノ草鞋、木履等ハ燒棄テ靴ハ石灰水ニテ洗ヒ之ニ獸脂ヲ塗リテ大氣ニ曝スコト

第三十三項 消毒藥ハ其類多シト雖モ左ニ普通ノモノヲ擧ク
第一濃厚石炭酸水(二十五倍カ) 畜舎、器具、死體、排泄物、糞窖、塵溜等ニ施用ス

第二稀薄石炭酸水(六十倍乃)畜舎、欄庭、貨車、看護者ノ衣服又ハ洗手等ニ施用ス

第三石灰水 畜舎ノ壁床、飼槽芻架、其他木製ノ器具等ニ施用ス

第四石灰 畜舎、糞窖、死體等ニ施用ス

第五亞硫酸瓦斯(硫黄ヲ燒キ發)畜舎内器具等ヲ蒸蒸スルニ施用ス

第三十四項獸類ノ傳染病名及其症候ハ左ノ如シ

第一牛疫

學語	Pestis	英國語	Cattle	Plague
佛國語	Peste	獨國語	Rinder	Pest
		英國語	Bovina	
		獨國語	Bovine	

牛疫ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ體中各部ノ粘膜炎ヲ侵シ就中消化器粘膜炎ニ特異ノ炎症ヲ呈シ牛族ヨリ他ノ反芻獸ニ傳染スルモノナリ此病ハ害毒ノ慘劇ナル傳播ノ迅速ナル斃死ノ夥多ナル獸類傳染病中最モ危險ノ症ナリトス牛ノ此病ニ罹ルトキハ熱ヲ催スヲ以テ初起ノ症候トス即體温少ク増昇シ泌亂食慾共ニ減少シ倦怠シテ頭ヲ垂レ一二日ヲ經レハ加答兒ノ症候ヲ呈シ各部ノ粘膜炎ニ紅潮シ反芻休止シ眼鼻口ヨリ液ヲ漏泄シ濕咳ヲ發シ漸々呼吸ノ數ヲ増シ三日乃至四日ヲ經過スレハ赤痢様ノ下痢ヲ起ス口腔及陰腔ノ粘膜炎起シテ其面ニ粟粒大乃至豌豆大ノ黯白色ノ小點ヲ發シ乾酪様ノ滲出物ヲ覆フ此乾酪様ノ質ハ容易

ニ剥脱シテ爛斑ヲ現シ其他粘膜炎ニ赤色ノ線狀若クハ斑點ヲ見ルコトアリ以上ノ症候漸次元進スルニ從ヒ眼鼻口ノ分泌液愈増加シ呼吸益困難ヲ加ヘ下痢甚シク終虛脱シテ斃ル

第二炭疽熱

學語	Anthrax	英國語	Anthrax
佛國語	Charbon	獨國語	Milzbrand

炭疽熱ハ急性傳染病ニシテ瘴氣毒ヨリ起リ草食獸ニ發シ又他ノ畜類及人ニ傳染ス

此病ハ俄然發スルモノ多ク其急性ナルハ動物頓ニ卒到シテ掣搐シ五分乃至十分時間ニシテ斃ル又途中若クハ夜間ニ發病シ鼻、口、及肛門ヨリ血液ヲ漏シテ斃ル、モノアリ或ハ初起食慾、泌亂乳共ニ減少シ體温増昇シ外部ノ溫度定マラス戰慄ヲ發シ各部ノ粘膜炎シク紅潮シ若クハ帶黃色ヲ呈シ糞ニ血液及粘液ヲ混シ呼吸疾促、脈搏増進大ニ狂亂苦悶シ往々痲痛ヲ併發シ或ハ痲鈍トナリ或ハ感覺ヲ失フ斯ノ如キ場合ニ於テハ一般ニ熱勢元進シテ衰弱ヲ加ヘ鼻口及肛門ヨリ血液ヲ漏泄シテ終ニ斃ル稀ニハ快復スルモアリ或ハ熱度増進シ皮膚ニ一箇若クハ數箇腫瘍ヲ發ス其狀圓クシテ凸隆シ熱痛ヲ帶ルモ忽チ減退ス試ミニ之ヲ壓スレハ氣音ヲ發シ之ヲ裁開スレハ帶黃色ノ液ヲ漏ス或ハ舌咽喉若クハ肛

門ニモ亦之ヲ發スルコトアリ

第三 鼻疽及皮疽

學語

佛國語

英國語

獨國語

鼻疽及皮疽ハ馬族特異ノ傳染病ニシテ二者同性ノ症ナレトモ只其患部ヲ異ニシ互ニ誘發スルモノナリ即鼻疽ハ專ラ鼻粘膜、肺及水脈系ヲ侵シ皮疽皮ハ皮下結締織及水脈系ヲ襲フモノニシテ此病ハ人、羊、山羊、兔及其他ノ畜類ニ傳染ス

鼻疽ノ主徴ニ三アリ(其一)鼻ノ一孔若クハ兩孔ヨリ少量ノ粘稠液ヲ漏泄ス其液ハ一種特異ノ膿樣液ニシテ其狀宛モ菜種油ニ蛋白ヲ混シタルカ如シ(其二)顎下水脈腺腫脹ヲ發シ概テ下顎骨ノ内側ニ固着シテ膿膿セス(其三)鼻粘膜ニ忍性潰瘍ヲ生ス當初ニ在テハ帶黃色ノ小膿疹若クハ小結節ナルモ増大破爛シテ潰瘍ニ變ス其瘍底ハ凹陷シテ豕脂狀ヲ呈シ少量ノ惡性膿ヲ漏ス病勢亢進スルニ從ヒ畜ニ鼻粘膜ヲ侵スノミナラス咽喉、肺、氣管支、喉嚨及頭ノ諸骨ニ波及シテ各其症候ヲ呈ス末期ニ至レハ呼吸困難ヲ加ヘ咳嗽頻發皮膚粗剛、毛色光澤ヲ先ヒ全身漸ク羸弱ス

皮疽ハ皮膚ニ局發シテ多ク四肢、頭、胸、腹或ハ其他ノ部位ノ皮下ニ碗

豆大乃至胡桃大ノ結節ヲ發生シ初ハ硬固ニシテ且疼痛アリ然レハ漸次其結節ノ中心ヨリ破潰シ黃色ノ液ヲ漏泄シ皮上ニ凝着シテ痂ヲ結ヒ而シテ其瘍面ヨリ絶ヘス膿汁ヲ漏泄ス病勢亢進スレハ腫瘍累發シテ体ノ諸部ヲ侵シ終ニ潰爛シテ血液ヲ漏スコトアリ其他各潰瘍ニ連絡セル水脈管ハ腫起シテ索狀ヲ呈シ水脈線亦腫脹ス而シテ久キヲ經レハ大ニ羸弱シテ遂ニ斃ス

第四傳染性胸膜肺炎

學語

佛國語

英國語

獨國語

傳染性胸膜肺炎ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ概テ左肺ノ一葉ヲ侵シ其小葉間質ノ滲出狀ヲ發シ尋イテ胸膜炎ヲ續發ス此病ノ徵候ヲ大別シテ二期トス即第一期ハ短渴ノ咳嗽ヲ發シ漸々其數ヲ増シ濕聲ノ痛咳頻發シテ体温允進シ呼吸疾促、食慾、泌乳共ニ減少シ病勢増進ス第二期ニ至レハ熱勢大ニ允進シテ胸膜肺炎ノ諸徵尤明瞭トナリ鼻端乾燥シ耳角ノ冷熱定マラス食慾及嚙泌乳共ニ休止シ通便秘澁前肢ヲ開張シテ起立シ臥スコトヲ欲セス鼻孔開豁シ腺部ノ波動甚シク呼吸スルコトニ呻吟ス試ニ背腰及肋間部ヲ壓スレハ苦悶ヲ訴ヘ病久キヲ經レハ呼吸益困難ヲ加ヘ倦怠羸瘦甚シク下痢ヲ發シ呼吸臭ヲ帶ヒ漸

次虚脱シテ斃ル

第五傳染性鵝口瘡

學語

英國語

佛國語

獨國語

傳染性鵝口瘡ハ瘴氣性發疹傳染病ニシテ雙蹄獸ニ發シ熱ヲ帶ヒテ口内趾端或ハ乳房等ニ水泡ヲ局發ス

此病ニ罹ルトキハ初メ熱發シ食慾吹哨共ニ減少或ハ休止シ口内趾端乳房或ハ鼻端等ニ忽チ大小數多ノ水泡ヲ發ス該泡破潰スレハ初メ澄液ヲ漏シ後ニ至レハ稠濁シ膿様ノ液ニ變ス或ハ口内ニ水泡ヲ發スルトキ其粘膜剝脱シテ紅色ノ爛斑ヲ呈シ頻ニ唾液ヲ漏ス而シテ蹄間或ハ蹄冠部ヲ侵シ甚シキニ至テハ跛趁トナル此病ノ經過ハ概チ二週間内トス

第六羊痘

學語

英國語

佛國語

獨國語

羊痘ハ熱性發疹傳染病ニシテ皮膚ニ痘ヲ發生シ羊族ニ蔓延シテ大ニ猖獗ヲ極メ獸類痘瘡中最危險ナルモノナリ

此病ハ初メ發熱シテ不安ノ狀ヲ呈シ食慾反嗜共ニ減少シ体毛ノ稀疎ナル局部即顔面或ハ肢脚ノ内面ニ紅斑ヲ呈シ豆大ノ痘ヲ發生シ二三日ヲ

經レハ痘中ニ淋巴液ヲ醗成シ後膿化シ終ニ破爛シテ乾涸結痂シ二三週間許ニシテ脱落ス

○獸醫雇入手當給與方

明治十九年十月

農商務省訓令第十五號

廳府縣

今般省令第十一號獸類傳染病豫防規則發布ニ付臨時獸醫ヲ備入ルハトキハ壹人壹箇月金拾五圓以内ヲ目途トシ其勤務日數ニ應シ手當ヲ與フヘシ

○獸類傳染病每週調查表

明治二十年二月

農商務省令第三號

廳府縣

明治十九年九月省令第十一號獸類傳染病豫防規則第十五條ノ届出ニハ左ノ表式ニ據リ每週ノ調査表ヲ添フヘシ(表式畧之)

○種痘

○種痘規則

明治十八年十一月

第三拾号布告

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス
但明治九年内務省甲第拾六号布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルキハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラズ掛官吏ノ指定シタル期限内ニ種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ隣保ノ証印ヲ爲シタル証書ヲ副ヘ戸長役場ニ届出ヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘証ヲ受領シ戸長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其証ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未滿ノ者ノ尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ
第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘証ヲ付與スヘシ
但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルキハ本條ニ準シ其証ヲ付與スヘシ

第九條 第二條第二條第三條第四條第五條第六條及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度内務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

右奉 勅旨布告候事

○種痘施術心得書 明治十八年三月 内務省甲第九號達

明治十三年(九月)當省乙第三十六號達傳染病豫防心得書附録トシテ種痘施術心得書左ノ通追加條此旨相達候事

種痘施術心得書

種痘ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗採収及貯蓄ノ法善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セサルヘカラス其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

第一條 種痘ハ左ニ掲クル者ニハ施サ、ルチ可トス

一 生後七十日ヲ經サル者

二 種痘ノ爲メニ一時増進スヘキ病患アル者

三 丹毒流行ノ土地ニ住居スル者

四 蔓延性ノ皮膚病アル者

五 熱性病ニ罹リ居ル者

第二條 種痘ニ適スル時期ハ春三月四月五月(秋九月十月十一月)二季ヲ以テ最良トス然レモ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊三稜筋抵止ノ部位ニ於テ各々三針乃至五針(受痘者ノ年齢體質等ニ隨フ)トシ名針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘疱ノ最輪互ニ密接セサル様注意スヘシ

第四條 施術ニ先チ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルモ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 眞性ナル痘漿ヲ採リテ移種スルヲ確實ノ眞法トスレモ此法ヲ行フニ能ハサルモ貯蓄ノ痘苗ニシテ成ルヘク新鮮ナル者ヲ撰ヒ用フヘシ但痴皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採収及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲クル者ヨリ採収スヘカラス
一 痘疱ノ成形過度及過大ノ者 發暈非常ニ大ナル者 痘縁又ハ暈部ニ水泡ヲ生スル者 痘疱非常ニ隆起シテ澄明ノ漿液ヲ漏出スル者 一種

ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ呈セルカ如キ者
但此等ノ異常痘疱ノ近傍ニ在ル正痘モ亦同シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者 疱ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ハントスル者 痘疱ノ已ニ化膿ニ傾キシ者 爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘疱破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者 營養不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 經過不整ニシテ不善感ノ疑アル者

五 天然痘ヲ經タル者 再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルハ通常接種後第八日(二十四時ヲ以テ一日ト算ス下皆同シ)ヲ以テ佳トスト雖時侯ノ寒暖及ヒ各人ノ性質ニ隨ヒ第七日又ハ第九日ヲ以テ適度トスルヲアリ痘疱ハ善感眞性ノ者ニシテ其包含セル所ノ漿液ハ渾濁セス粘稠露滴ノ如クナルヘシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘疱ノ中心ヲ避テ表面ヨリ斜ニ淺刺シ深ク刺シテ出血セシムヘカラス

第九條 發痘一類ナル者ノ痘疱ハ其漿液ヲ採ルヘカラス又數顆アルモ其一顆ハ傷クヘカラス

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯フヘシ(痘苗ノ貯蓄基シキヲ得ルモハ五箇月間充分ノ効力アリ)

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要点ト爲ス

一 接種後第二日以内成形ヲ始メシヤ否

二 痘疱常形ニメ其大サ及皮下皮上共ニ同一ナルヤ否

三 紅暈ハ常形ナルヤ否

四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラサルヤ否

五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ徵候ヲ呈スルヤ否

六 痂皮ハ黯褐色又ハ黑色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否

第十二條 種痘善感ノ候徵ハ左ノ經過ニ就キテ知ルヘシ

接種後第一日第二日ノ間ノ他ノ刺傷ニ異ナルヲ無シ施術後針痕ノ周圍ニ

淡紅色ノ小暈ヲ發スレトモ暫時ニシテ消失ス(或ハ此暈ヲ見サルコトアリ)

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ稍

々隆起セルヲ覺ユ(經過緩慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ

生スルコト有リ)

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル丹形若クハ橢圓形ノ小結節ヲ生

ス

第五日ニハ結節細小ノ水泡ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル

第六日ニハ水泡稍々増大シ其邊緣隆起シテ泡ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ泡中

ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ諸病益々増進ス

第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サハ豆大ニシテ周圍ハ焔腫シ微シク疼痛ア

リ泡中ノ液ハ倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此期以前)

微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔面ハ蒼白色ヲ呈スルコトアリ又腋下ニ疼痛

ヲ覺ユ水脈腺腫起スルコト有リ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル

第十日ニハ泡液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ泡ノ中央稍々凸隆

ス然レモ其形必ス扁圓ナリ

第十二日ニ至ルアテハ痘疱其形狀ヲ變スルコト無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ泡

ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸

ク消退ス

爾後黯褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル痂皮ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ緊著シテ容易ニ

剝離セス結痂後八日乃至十日ニ至リ始メテ剝脫ノ後ニ遺セル癩痕ハ圓形

又ハ橢圓形ニシテ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス

但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其痘顆小ニシテ七八日

間ニ全ク經過スルコト常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徴ハ左ノ如シ

- 一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ達セスノ直ニ廣ク蔓延セル炎症ヲ發シ皮下ニ硬キヲ覺ヘスノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆疎ナル痂皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレハ其經過總テ不整形ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺ユ微熱ヲ發スルヲ無キニ非ス)
- 二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル
- 三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陥ル
- 四 第八日ニ至リ數疱相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス
- 五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル癩痕ハ深ク不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ

第五 種痘ノ注意

- 第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性質有セルニ因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善感ナル痘苗ヲ撰ヒテ再ヒ接種スヘシ
- 第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際ニハ接種後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レモ受病者已ニ暗ニ

天然痘ニ感染シ其潛伏期ニ於テ接種スルノ間々之アリ

第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ掲クル者ト雖モ熱性病ヲ除ク外ハ總テ接種スヘシ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシムヘシ平常慣習セル食物ハ總テ禁忌スルニ及ハス又別ニ醫藥ヲ要セス

○清潔法

○道路掃除方法 明治五年十月 第三百二十五號布告

近來道路掃除ノ儀多クハ等閑ニ相成甚以不相濟事ニ候條各地方官ニ於テ厚ク注意致シ退テ道路ノ制被相立候マテハ從前掃除請持有之道筋ハ勿論持場無之場所ハ最寄町村へ公平ニ割渡左ノ條目ノ通掃除可爲致事

第一條 總テ請持丁場ハ風雨等ノ障リ有無ニ不拘必ス三ヶ月中一度ツ、掃除可致事

第二條 風雨ノ後ハ必ス其持場ヲ掃除シ溜水ハ左右溝へ導キ水溜ノ場所相減候様可致事

第三條 並木根返リ風折雪折等ハ退テ其廳ヨリ所分之有ト雖モ不取敢通路妨ナキ様取片付置可申事

第四條 左右ニ溝渠無之道路ハ可成丈ケ路ノ兩縁ヲ低下ニシ雨水ノ捌方宜敷様可致事

第五條 掃除丁場標往杭々等閑ニ致シ置候向モ有之右ハ必ス其請持丁場境ニ從是東西或ハ南北何百何十何丁何郡何村掃除丁場ト誌シ標杭可相建事
第六條 路敷往々田畑ニ切添候ヨリ並木根サレテ失レ之カ爲メ根返ニ及ヒ易ク以ノ外ノ事ニ候以來決シテ右等ノ所業致ス間敷事
右之通堅可相守候若等閑ニ差置ニ於テハ掛リ官員巡廻之節屹度可申付事

○牛豚類養取締 明治六年五月 第百六十三號布告

方今牛豚類ノ牧畜盛ニ行ハレ候所温暑ノ時ニ方テハ其臭氣人身ノ健康ヲ害スルノミナラス近來獸類ノ傳染病流行往々人生ノ傷害ヲ釀シ候ニ付自今三府市街ノ區内ハ勿論各地一般人家稠密ノ場所ニテ養取ノ儀堅ク禁止候條右區内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノ日ヨリ三十五日以內ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退養取可致事

○養取制限斟酌方 明治七年一月 大藏省第三號達

但シ東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地ニ養取不相成候尤乳汁搾取ノメ養取候ハ被差許候得共不潔臭穢ノ儀モ有之候ヘハ詮議ノ上可令取拂事

昨明治六年第百六十二號ヲ以テ公布相成候趣者專人命保證ノメ市街等人家稠密之地ニテ養取候ヲ制限候筈ニ候條山村僻邑ハ實地適宜ニ斟酌可致事

○齧獸類 明治四年三月 太政官布告

從來齧レ牛馬有之節ハ穢多ヘ相渡來候處自今牛馬ハ勿論外獸類タリハ總テ持主ノ者勝手ニ所置可致事

○飲食物

○屠牛取締方 明治四年八月 大藏省達

一近來肉食相開候ニ付テハ屠牛渡世ノ者屠場ノ儀ハ人家懸隔ノ地ニ取設ケ病牛死牛トモ不賣鬻様嚴重取締可申就テハ左ノ二條相守各地方官ニ於テ雛形ノ鑑札製造致シ屠場取開ノ場所巨細取調ノ上相渡シ當省ヘ退テ可届出事

一牝牛ハ蕃息ノ基本ニ付總テ屠殺不致様取締可致事
但十二三歳以上孕牛ニ難相成分不苦候事

一諸開港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締致シ可致事

但見込ノ趣退テ可申出專 (鑑札離形略之)

○斃禽獸 明治六年三月 第七十六號布告

病死禽獸ヲ食料ノヲメ致賣買候ハ兼テ嚴禁ニ候處天然老死或ハ尋常ノ病ニ斃候モノハ皮剝取骨肉等田園ノ培養ニ相用候儀不苦候條於各地方右辨別厚ク可致注意候事 但流行病死ノモノハ燒棄勿論ニ候事

○製氷検査 明治十一年九月 丙務省甲第廿五號布達

近年製氷營業人不潔ノ氷ヲ製シ候者有之不都合ノ儀ニ付自今右營業ノ者ハ毎年製造ノ節并ニ翌年發賣ノ節共前以管轄廳東京府下八東 京警視本署へ伺出検査ヲ受候様可致此旨布達候事

○中毒通報方 明治十一年十二月 丙務省乙第八十八號達

各地方管内ニ於テ飲食物之中毒及ヒ藥物之誤用等ニヨリ死ヲ致ス者有之候節ハ其毒物之品名中毒ノ症狀並死者ノ住所姓名等詳細取調其都度當省衛生局へ通報可致且毒物ノ成分判然セザル分ハ現品相添可差出此旨相達候事

○アニリン其他鑛屬製ノ繪具染料取締方 明治十一年四月丙 務省乙第三十五號達

近年アニリン其他鑛屬製ノ繪具染料ヲ以テ飲食物ニ着色スルモノ不勘趣ニ候處右ハ自然人身之健康ヲ害スルハ勿論中ニハ甚シキ中毒ニ罹リ忽地ニ非常ノ横天ヲ致スモノモ有之危險ノ至リニ候條各地方廳ニ於テ注意取締可致此旨相達候事 追テ地方慣用ノ品ニヨリ毒性分ノ有無判然雖致モノハ其原物相添當省衛生局へ照會試驗受可申事

○賣藥

○賣藥規則 明治十年一月 第七號布告

賣藥規則別冊ノ通相定候條此旨布告候事

賣藥規則

第一章

第一條 此規則ニ稱スル處ノ賣藥トハ丸藥膏藥煉藥水藥浴劑散藥煎藥等ヲ

第一條 明治十六年六月十日山口縣伺

同年八月八日
 内務省指令
 外國ノ賣藥ヲ請買
 スルモノハ營業者
 トシテ更ニ検査
 ノ上營業鑑札ヲ下
 付スヘシ
 (明治十六年十月
 十日岐阜縣伺同
 務省指令)
 月十八日
 賣藥能書中六種傳
 染病ノ項記載アル
 其ノ項ヲ削除セ
 シメ販賣ヲナサシ
 ムヘシ
 (明治十五年五月
 十八日福島縣伺
 同務省指令)
 同日
 藥湯營業免許ヲ得
 タルモノヨリ其調
 劑品ヲ買請ケ温度
 及水産等部テ該營
 業ノ方法ニ依リモ
 湯營業ヲナスモ
 賣同ノキハ賣藥請
 買同ノ手續ヲ以テ
 シテ鑑札ヲ下付スヘ
 シ
 (明治十六年九月
 八日島根縣伺同
 内務省指令)
 兼京ヲ採酌運搬シ

- 調製シ功能書ヲ附シ販賣スルモノヲ云フ(明治十年第八十九號) 號布告ヲ以テ改正)
- 第二條 此賣藥營業者ハ藥味分量用法服用功能ヲ詳記シタル書ニ族籍氏名ヲ記シ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ
 但免許ヲ受ケタル者ニケ所以上ニ於テ之ヲ調製スル時ハ其箇所毎ニ免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十五年第五十二號) 號布告ヲ以テ但書追加)
- 第三條 管轄廳ニ於テハ願書ヲ検査シ其製藥配伍ノ藥品劇毒微毒ニ拘ハラズ取扱上失誤ヲ生シ易キモノ及ヒ毒藥劇藥取締ニ關係スルモノハ之ヲ許ササルヘシ(明治十一年第二十七號) 號布告ヲ以テ改正)
- 第四條 第八條ニ記シタル期限中藥味分量用法服用功能書ヲ改正セント欲スルモノハ其由ヲ届出舊鑑札ヲ返納シテ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ
- 第五條 賣藥ヲ請買セント欲シ其營業者ノ許諾ヲ得タル者ハ族籍氏名ヲ記シタル願書ニ營業者所持ノ免許鑑札寫及ヒ營業者ト取結タル約定書トヲ添へ其管轄廳ニ願出免許鑑札ヲ受クヘシ(明治十年第八十九號及同十一號) 號布告ヲ以テ改正)
- 第六條 賣藥營業者及請買者共ニ必ス免許ノ看板ヲ掲クヘシ
- 第七條 賣藥營業者及請買者ニ於テ自ラ行商シ又ハ賣子ヲ派出シテ行商ヲ爲サント欲スルトキハ其由ヲ管轄廳ニ届出行商鑑札ヲ願受ケ行商スル時ハ必ス之ヲ所持スヘシ
- 第八條 營業鑑札請買鑑札行商鑑札ハ其鑑札記載ノ月ヨリ滿五年ヲ以テ免

テ病者ヲ浴セシム
 ルモノハ勿論内服
 ノ爲メ鑛泉ヲ販賣
 スルモノト雖販賣
 規則外トシテ取
 扱フヘシ
 (明治十六年十一月
 治函縣照會明
 月)
 耕作物害蟲驅除ノ
 目的ニテ販賣スル
 藥品ハ營業規則外
 處分シテ縣限規
 定例(明治十七
 年九月十一日)
 外國人ノ製藥ト
 雖内國ニ於テ
 ハ販賣スル上
 テ販賣スル可カ
 ラザルヤ否
 ナスニ於テ
 内國以上ハ其製
 假令外國人ノ調劑
 資藥規則ヲ遵守シ
 テ免許ヲ受ケサル
 ヘカラス
 (明治十七年二月
 十五日岡山縣伺
 同務省指令)

- 許ノ期限トス此期限ヲ過キ尙免許ヲ得ント欲スルモノハ舊鑑札ヲ返納シ更ニ新鑑札ヲ願受クヘシ
- 第九條 第八條ニ記シタル期限中第四條ノ改正發賣ヲ願出之ヲ免許スル時ハ新鑑札記載ノ月ヲ以テ一期ノ初月トナスヘシ
- 第十條 免許期限内ト雖モ其製藥第三條ニ掲クル所ノ有害品ナルヲ更ニ發見スル時或ハ營業者製藥ヲ粗惡ニスル等ノアルニハ直時鑑札ヲ取上ケ發賣ヲ禁止スルヲアルヘシ(明治十一年第二十七號) 號布告ヲ以テ改正)
- 第十一條 營業者廢業スルカ又ハ禁止セラレ、時ハ其請買者及ヒ賣子共其販賣ヲ許サス
- 第十二條 諸鑑札ヲ遺失シ又ハ水火盜難ニ因テ毀失シタル時ハ其仔細ヲ詳記シテ管轄廳ニ届出再ヒ之ヲ願受クヘシ
- 第十三條 免許鑑札ヲ他人ニ讓渡サント欲スル者ハ雙方連印ノ願書ヲ管轄廳ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ
- 第十四條 賣藥營業者及ヒ請買者免許期限中其相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳ニ鑑札名前書換ヲ請フヘシ(明治十年第八十九號) 號布告ヲ以テ改正)
- 第十五條 賣藥營業者廢業シ若クハ禁止セラレタル時營業者ハ勿論其請買者ニ於テモ總テ諸鑑札ヲ返納スヘシ

第二章

綿質

一劑藥ハ分量用法ニ依リ危險ノ虞ナク不取締無之ト認ムルモノハ之ヲ許ス
ナリ其品類分量左ノ如シ

- ヒヨスエキス 五氏
 - ヨシウム鐵 三氏
 - ヒヨス葉 五氏
 - 硫酸加里 二丹
 - ブロームカリウム 八氏
 - ヨードカリウム 八氏
 - ラクチンカリウム 六氏
 - 吐根 一氏
 - ヤーラツパ下劑トシテ 六氏
 - 同脂 一氏已下
 - コロンシクム酒 半汚
 - 吐根酒 三十滴
 - サントニー子但シ連日服用ヲ禁ス 三氏
 - 次硝酸ビスミット 六氏
- 以上大人内服一日ノ極量

但シ十五歳以下ノモノハ之ヲ分テ三等トナス即チ十五歳以下八歳迄ハ半量七歳以下四歳迄ハ三分ノ一三歳以下ハ七分ノ一

- 硝酸銀 點眼劑 一氏 蒸溜水 一汚
 - 醋酸鉛 點眼劑 二氏 同 一汚
 - 硫酸亞鉛點眼劑 一氏 同 一汚
 - ヨシエムチンキ 藥湯 外附劑
 - クレチソート 齒痛 小量配伍スルモノ
 - 過マンガン酸加里 外用 番木鱉膏藥
 - 鉛丹 膏藥 烏頭膏藥
 - 密佗僧 膏藥
 - 石炭酸 膏藥
 - 綠青 膏藥
 - 硫酸銅 膏藥
 - 以上外用
- 一劑藥ノ外注意ヲ要スヘキ品類
- 天南星
唐土
但丸散劑ニ配合
但スルヲ禁ス

但毒藥ノ外内
用ヲ禁ス

鼠利子

日量

壹分

大戟

同

同

續隨子

同

同

榮實

同

同

牽牛子

同

同

白桃花

同

同

以上六味分量過多ナルキハ再調ヲ命シ之ヲ減少セシメタル後之ヲ許シ若シ一方中ニ六味ノ中ニ二味以上ヲ配合シタルモノハ之ヲ許サス

附子

四分

金硫黃

一分

龍腦

二分

麝香

二分

但麝香ヲ配合スル功毒中産前産後ノ病ニ用ユルニ限アルハ其毒ヲ削除セシム

鐵粉

一分

綠礬

五分

大黃

下劑トシテ

三分

薑會

八リン

旃那

三分

以上九味記載ノ分量ヲ超過セサルモノハ之ヲ禁セス

辰砂

二分

銀朱

二分

以上二味ハ一種ノ舍密抱合ニ成ルモノニシテ血中ニ吸收スルヲ鮮ク無害ニ屬スルヲ以テ分量用法功能書ニ照シテ不都合ナキモノ及ヒ丸藥衣被等ニ用ユルハ之ヲ禁セス

附總テ丸藥ニ金銀箔ヲ以テ衣被トナスハ妨ケナシト雖モ鉛丹錫粉眞

銻箔等ヲ用ユルモノハ之ヲ除カシム

一配伍ノ藥劑ハ劇藥ニ屬スルモノニ非ス或ハ劇藥ナルモ其分量許用ノ度ヲ經過セスト雖モ數品ヲ合ノ劇劑トナリ或ハ墮胎等不長ノ事ヲ目的トナスモノ(朔日丸或ハ坐藥ノ類)ハ内外ヲ論セス一切之ヲ禁ス

一水藥ハ民間服用ノ際滴量ヲ定ムルヲ尤モ難ク分量ヲ誤リ危害ヲ招クノ虞アルヲ以テ劇藥配伍ノモノハ其用量ヲ藥瓶並ニ能書ニ詳記セシメ一瓶三日ノ量ヲ過クヘカラス但劇藥ノ量ハ一瓶ヲ頓服スルモ大害ナカラントテ要スヘシ

一從來梅毒ヲ療スル多ク蒸藥ヲ用井多ク水銀製劑ヲ伍用ス假令水銀劑ニ非サルモ其用法危險ナルヲ以テ藥品ノ微ヲ論セス一切之ヲ禁ス
一專ラ滋養ニ供スル品類或ハ夏日飲料或ハ化粧水齒磨粉等ノ如キ間々ニ

功能ヲ附シタルモノアルモ素ヨリ治病ヲ主トスルモノニ非サルヲ以テ賣藥規則外トナスヘシ

一海水或ハ鑛泉ヲ採酌運搬シテ病者ヲ浴セシムルハ賣藥規則外タルヘシト雖ニ鑛泉中ノ固形物俗謂湯ノ花或ハ幾分ノ鑛泉ヲ混合シ或ハ藥物ヲ加ルモノハ既ニ全ク其原泉ト性質效用ヲ異ニシ人造ニ歸スルヲ以テ別ニ湯名ヲ附シ規則ニ從テ鑑札ヲ受ケシム

一鼠取蠅取藥等賣藥規則外ナリト雖ニ動物ヲ殺ス毒藥ナルヘキヲ以テ誤テ人命ヲ傷害スルノ虞アルニツキ取締緊要ナリトス故ニ誤用ノ害ナキヲ確認スルニ非サレハ販賣ヲ許スヘカラス

○礬石類調合ノ鼠取蠅取藥ノ販賣ヲ禁ス 明治九年五月第百四十二號布告

鼠取或ハ蠅取藥ト唱ヘ礬石ノ類ヲ調合致シ世間ニ賣買致來候處自今令禁止候事

○燐製鼠取藥ノ販賣ヲ禁ス 明治十年三月、內務省乙第二十六號達

從來燐製之鼠取藥ナ以テ賣藥トナシ候儀開屆鑑札下渡候向有之候處右ハ毒

府縣

藥ニテ到底民間誤用之虞ナキヲ免レス殊ニ本年太政官第二拾號毒劇藥取扱規則公布相成取締上ニモ關係係ニ付自今一切禁止候條右營業者有之府縣ハ其旨相達速ニ鑑札返納可取計此旨相達候事

但請賣藥ノモノモ同様賣藥規則ニ照シ禁止之處分可相達事

○藥品

○藥品營業并藥品取扱規則 明治二十二年三月 法律第十號

朕藥品營業並藥品取扱規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

藥品營業並藥品取扱規則

第一章 藥劑師

第一條 藥劑師トハ藥局ヲ開設シ醫師ノ處方箋ニ據リ藥劑ヲ調合スル者ヲ云フ

第二條 藥劑師ハ其學術試驗ヲ受ケ年齡二十年以上ニシテ內務大臣ヨリ藥劑師免狀ヲ得タル者ニ限ル

第三條 藥劑師免狀ヲ得ントスルモノハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ內務省ニ願出ヘシ

第四條 藥劑師免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第五條 藥劑師免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ內務省ノ藥劑師名籍ニ登錄シ

之ヲ公告スヘシ

第六條 藥劑師免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ヲ變換スル等免狀面ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シ免狀書換ヲ內務省ニ願出スヘシ

第七條 書換ノ免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第八條 藥劑師廢業又ハ死亡シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出スヘシ

第九條 藥劑師ニ非サレハ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス

第十條 藥劑師藥局ヲ開設シ又ハ閉鎖シタルトキハ十日以内ニ地方廳ニ届出ヘシ

第十一條 藥劑師一人ニシテ二箇所以上ノ藥局ヲ開設スルコトヲ得ス但支局ヲ設クルトキハ別ニ藥劑師ヲ置キ之ヲ管理セシムヘシ

第十二條 藥局ニハ日本藥局方第一表ノ藥品ヲ備フヘシ

第十三條 藥局ニ備付ノ秤量器ハ最モ精確ナルヲ要シ權衡ハ少クモ一「サ」ナチグラム「」ヲ定量シ得ルモノヲ備フヘシ

第十四條 藥劑師ハ患者ノ氏名、年齢、分量、用法、用量、處方ノ年月日及醫師ノ氏名ヲ自記シ又ハ調印シタル處方箋ニ據リ調印スルモノトス但處方箋中疑ハシキ廉アルトキハ其醫師ニ質シ證明書ヲ得ルニアラサレハ調劑スルコトヲ得ス

藥劑師ハ調劑錄ヲ備ヘ處方箋ヲ謄寫シ置クヘシ

第十五條 處方箋ヲ受タルトキハ晝夜ヲ問ハス何時ニテモ調劑スヘキモノトス正當ノ事故ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十六條 處方箋中ノ藥品ニ缺乏アルトキハ其醫師ニ通知シテ指揮ヲ乞フヘシ藥劑師隨意ニ之ヲ省略シ又ハ他藥ヲ代用スルコトヲ得ス

第十七條 毒藥ニ處方箋ハ藥劑師檢印シテ處方箋ノ日付ヨリ滿十ヶ年間之ヲ保存スヘシ

第十八條 毒藥セ藥ハ一回使用セシ處方箋ニ據リ再ヒ調劑スルコトヲ得ス但特ニ醫師ノ通知アルモノハ此限ニアラス

第十九條 患者ニ與フル藥劑ノ容器又ハ包紙ニハ處方箋ニ據リ外内用ノ別用法、用量年月日、患者ノ氏名、藥局ノ地名及藥劑師ノ氏各ヲ記スヘシ

第二章 藥種商

第二十條 藥種商トハ藥品ノ販賣ヲ爲ス者ヲ云フ

第二十一條 藥種商ハ地方廳ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二十二條 毒藥認藥ハ衛生試驗所又ハ藥劑師製藥者ニ於テ封緘シタル容器ヲ開キテ零賣スルコトヲ得ス

第三章 製藥者

第二十三條 製藥者トハ單ニ藥品ヲ製造シ自製ノ藥品ヲ販賣スル者ヲ云フ

第二十四條 製藥者ハ地方廳ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第二十五條 賣藥總藥ハ適當ノ容器ニ納メ之ヲ封緘スヘシ其容器ヲ開キテ
零賣スルコトヲ得ス

第四章 藥品取扱

第二十六條 日本藥局方ニ記載スル所ノ藥品ハ其性状、品質、藥局方ノ所定
ニ適合スルモノニ非サレハ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

第二十七條 日本藥局法ニ記載セサル藥品ハ其據ル所ノ外國藥局方名ヲ記
スヘシ其性状、品質、該局方ノ所定ニ適合シタルモノニ非サレハ販賣若ク
ハ授與スルコトヲ得ス

何レノ藥局方ニモ記載セサル新規ノ藥品ハ衛生試驗所ノ検査ヲ經其試驗
成績ヲ配スルモノニ非サレハ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス

第二十八條 藥局方中特ニ貯藏法ヲ示シタルモノハ其所定ニ從フヘシ

第二十九條 毒藥劇藥ハ他ノ藥品ト區別シ毒藥ハ銷鑰ヲ備ヘタル場所ニ貯
藏スヘシ

第三十條 毒藥劇藥ハ職業上必要ト認メタル者ヨリ其藥名、量數、使用ノ目
的、年月日及住所、氏名、職業ヲ記シ且捺印シタル證書ヲ差出スニ非サレハ
之ヲ販賣若クハ授與スルコトヲ得ス
前項ノ證書ハ其日付ヨリ滿十年間之ヲ保存スヘシ

第三十一條 毒藥劇藥ハ前條ニ記載シタル證書アルモ幼稚ノ者其他不安心
ト認ムル者ニハ交付スヘカラス

第三十二條 毒藥劇藥ハ藥品ノ容器又ハ包紙ニ其名稱及販賣授與者ノ住所
氏名ヲ記シ毒藥ハ毒字劇藥ハ劇字ヲ付記スヘシ

第三十三條 藥劑師ニ於テ醫師ノ處方箋ニ據リ患者ニ與フル藥劑ハ第二十
條及第三十二條ノ手續ヲ爲スヲ要セス

第三十四條 藥劑師藥種商製藥者ノ間ニ於テハ第三十條及第三十二條ニ記
載シタル手續ヲ要セス其藥劑師種商製藥者タルノ證明書ヲ以テ毒藥劇藥
ヲ賣買スルコトヲ得

第三十五條 毒藥劇藥ノ品目ハ內務省令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十六條 藥品ノ容器又ハ包紙ニハ假名又ハ漢字ヲ以テ其藥名ヲ記スヘ
シ但羅何語又ハ他ノ外國語ト併記スルハ妨ケナシ

第三十七條 藥品ノ容器又ハ包紙ニハ製造者ノ住所氏名ヲ記スヘシ其外國
製ニ係ルモノハ引取人ノ住所氏名ヲ記スヘシ但藥品製造會社ニ在テハ其
所在地名及會社名ヲ記スルモ妨ケナシ

第三十八條 內務大臣ハ監視員ヲシテ藥局及藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所
ヲ監視セシムルコトアルヘシ
監視員ハ巡視ノ際其證書ヲ携帯スヘシ

第五章 罰則

第三十九條 官許ヲ得スシテ藥劑師ノ業ヲ爲シタル者又ハ第十六條第十八條第二十二條第二十五條第二十六條第二十七條第三十條第一項ニ違背シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 第十一條第十四條第一項第十七條第十九條第二十九條第三十條第二項第三十一條第三十二條ニ違背シタル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 第六條第八條第十條第十二條第十三條第十四條第二項第十五條第二十一條第二十四條第二十八條第三十六條第三十七條ニ違背シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第四十二條 內務大臣ハ此規則實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布スヘシ但藥種商製藥者取締ニ係ル細則ハ北海道廳長官府縣知事之ヲ定ムヘシ

附則

第四十三條 醫師ハ自ラ診療スル患者ノ處方ニ則リ第二十六條第二十七條第二十九條ニ從ヒ自宅ニ於テ藥劑ヲ調合シ販賣授與スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三十八條ノ監視ヲ受クヘシ

醫師ハ第三十四條ニ從ヒ醫師タルノ證明書ヲ以テ藥劑師藥種商製藥者ヨ

リ毒藥劇藥ヲ買取ルコトヲ得

第四十四條 此規則施行以前ニ於テ內務省ヨリ箋舖開業免狀ヲ受ケタル者ハ藥劑師タルノ効チ有ス

第四十五條 阿片賣買ニ關スル事項ハ明治十一年八月第二十一號布告ニ據ル

第四十六條 醫科大學藥學科ノ卒業證書ヲ有シ年齡滿二十年以上ノ者ハ其證書ヲ以テ此規則第三條ニ據リ藥劑師免狀ノ下付ヲ願出ルコトヲ得此場合ニ於テハ內務大臣ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四十七條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

第四十八條 明治十三年一月第一號布告藥品取扱規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

○藥劑師試驗規則 明治二十二年三月 內務省令第三號

藥劑師試驗規則左ノ通之ヲ定ム

藥劑師試驗規則

第一條 藥劑師タラント欲スル者ハ此規則ニ據リ試験ヲ受クヘシ

第二條 藥劑師試験ハ內務大臣ニ於テ毎日二回試験主事者及ヒ試験委員ヲ選任シテ舉行スヘシ其舉行ノ地及ヒ試験期日ハ六箇月前之ヲ告示スヘシ

第三條 試験科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

學說

- 第一 物理學
- 第二 化學
- 第三 植物學
- 第四 生理學
- 第五 製藥化學

實地

- 第一 分析術
- 第二 藥品鑑定
- 第三 藥物製煉
- 第四 調劑術

第四條 試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ヲ試験期日三箇月前ニ内務省宛ニテ地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ試験期日一箇月前ニ之ヲ取纏メ内務省ニ進達スヘシ

第五條 試験ニ及第シタル者ニハ試験主事者ヨリ試験委員ト連署シタル及第證書ヲ與フヘシ

第六條 受験者ハ試験開場ノ前日迄ニ手数料金五圓ヲ試験主事者ニ納ムヘシ

第七條 受験上不都合ノ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場ヲ命スルコトアルヘシ

第八條 受験中疾病其他ノ事故アリテ試験ヲ完了セサル者及ヒ落第シタル者又ハ退場ヲ命シタル者ニハ手数料ヲ返付セス

第九條 此規則ハ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

○藥品巡視規則 明治二十二年三月
内務省令第四號

藥品巡視規則左ノ通之ヲ定メ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

藥品巡視規則

第一條 衛生官吏警察官吏及ヒ藥劑師ヲ以テ監視員ト爲シ藥局及ヒ藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視セシム可シ

第二條 監視員藥局ヲ巡視スルトキハ左ノ各項ヲ検査スヘシ

- 一 藥品
- 二 藥品營業並藥品取扱規則第十二條第十三條第二十八條第二十九條第三十六條第三十七條ノ事項
- 三 調劑錄

第三條 監視員藥品ヲ販賣又ハ製造スル場所ヲ巡視スルトキハ左ノ各項ヲ検査スヘシ

- 一 藥品
- 二 藥品營業並藥品販賣取扱規則第二十二條第二十八條第二十九條第三十六條第三十七條ノ事項

第四條 監視員ハ公私立病院及ヒ醫師ノ調劑所ニ臨ミ藥品ヲ検査スルコト

アルヘン

第五條 第二條第三條ノ外ニ於テ藥品ヲ貯藏スル場所アレハ其場所ニ就キ
檢査スルコトアルヘン

第六條 巡視ノ期日ハ豫メ告示セス其時間ハ午前八時ヨリ午後五時迄ノ間
トス

第七條 監視員ハ必要量ノ藥品ヲ携歸シテ檢査スルコトアルヘン

第八條 監視員ノ檢査ニ消費シタル藥品ハ其代價ヲ請求スルコトヲ得ス

○毒藥劇藥ノ品目 明治二十二年三月
内務省令第五號

明治二十二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第三十五條ニ據リ毒藥
劇藥ノ品目左ノ通之ヲ定メ明治二十三年三月一日ヨリ施行ス

毒藥

磷

青酸、稀青酸、青酸加里

亞砒酸(白砒石、砒石)、亞砒酸加留漢液(法列兒氏液)

沃度化砒素、沃度化砒汞液(度納般氏液) 硫化砒素(鷄冠、雄)

黃色酸化汞(黃降) 赤色酸化汞(赤降) 昇汞(猛汞、ソッピ、ル、生々乳) 白降汞、硝酸汞、赤
色沃度化汞

猛毒アルカロイド及其鹽類

アコニチチ、亞剎莫兒比涅、亞篤魯必涅、アルチチ、コニチチ、エメチ

チ、比蘇斯知爾密涅(エトリ) 非沃斯矢亞密涅、莫兒比涅、ナルコチ

チ、ニコチチ、必魯加兒必涅、斯篤里幾尼涅、加拉篤里涅等

實斐答利涅

クラール(矢毒)

加刺拔兒豆越幾斯篤拉屈篤

揮發苦扁桃油

巴豆油

劇藥

硫酸、粗製硫酸、發烟硫酸

硝酸、粗製硝酸、發烟硝酸

鹽酸、粗製鹽酸

硝鹽酸(王水)

石炭酸、粗製石炭酸

格羅謨酸及其鹽類

苛性加里及其滷液

苛性曹達及其滷液

強安母尼亞水

沃度、沃度丁幾丟兒、沃度仿謨、沃度化加留謨、含糖沃度化鐵、沃度化鐵丸
貌羅謨(寒素)、貌羅謨化樟腦

格魯兒化拔留謨、硝酸拔留謨

樟酸攝留謨、硝酸攝留謨

吐酒石及其製劑、酸化安知母紐謨、硫化安母知紐謨(金硫)

醋酸亞鉛、炭酸亞鉛、格魯兒化亞鉛、酸化亞鉛(亞) 硫酸亞鉛(亞) 纈草酸

亞鉛醋酸鉛(或糖)次醋酸鉛液(酸) 炭酸鉛、酸化鉛

醋酸銅、銅礬(石) 硝酸銅、硫酸銅安母紐謨(銅礬) 硫酸銅(丹)

甘汞、輕粉、黃色沃度化汞、硫酸汞、汞灰散、藍丸

硝酸銀、硝酸銀加硝石

亞硝酸亞密爾

噶囉伍及其製劑附コロゲイン

抱水格魯刺爾

知母爾

結羅阿曹篤

古埤乙涅

咖啡涅

古加乙涅

古加乙涅

珊瑚寧及其製劑

剝度比爾林

苦扁桃水、杏仁水、老利兒結兒斯水、バクチ水

羯答利斯、班猫、芫菁及其製劑

麥角及其製劑

印度大麻葉其製劑

質斐答利斯葉及其製劑

別刺敦那葉、根及其製劑

蕒荖葉、根及其製劑

非沃斯矢亞謨斯葉、子及其製劑

蔓陀羅華葉、子及其製劑

耶僕蘭日葉

耶僕蘭日葉

魯別利亞葉及其製劑

サビナ葉及其製劑

古魯聖篤實及其製劑

コニユーム草及其製劑

刺苦莖葛留謨及其製劑

- 偏答百兒加液
- サピナ油
- 揮發芥子油
- 阿片及其製劑
- アコニット根(罌粟、烏頭及ヒ附子ノ類)及其製劑
- 藜蘆根
- 吐根及其製劑附ニヒ見氏散
- 葯刺巴根
- 葯刺巴脂及其製劑
- 古爾水屈護子、根及其製劑
- サハワルラ子
- 番木鱧中及其製劑
- 巴豆
- 加刺拔兒豆
- 藤黃
- 日本産大茴香

○消毒藥ニ調製シタル石炭酸其他劇藥販賣方明治十三年

年五月第二十三號布告

石炭酸其他劇藥ハ本年(一月)第壹號布告藥品取扱規則第四條ニ照シ可取扱ノ處傳染病流行ノ際ハ内務省布達ニ從ヒ消毒藥ニ調製候分ニ限リ藥舖ニ於テ販賣差許候條販賣望ノ者ハ其管轄廳ニ可願出此旨布告候事

○消毒藥販賣方明治十八年一月

傳染病豫防消毒法之儀ハ退々相達置候處明治十三年當省乙第三拾六號ヲ以テ更ニ豫防心得書相達候ニ付テハ從前之豫防法ハ總テ消滅ニ屬シ候條右達ニ據リ調製シタル消毒藥ハ同年第貳拾三號布告ニ准據シ販賣セシムヘキ儀ト可心得此旨相達候事

○藥品其他檢査手数料ヲ定ム明治十七年十月

當省衛生局(東京大坂橫濱)試驗所ニ於テ舉行スル藥品其他ノモノ檢査手数料左ノ通相定メ來ル十一月一日ヨリ徵收候條此旨告示候事

檢査手数料

一藥品 一容器(一瓶一罐ノ類)ニ付金一錢乃至五錢
但大容器ノ藥品ヲ檢査シタル上小容器ニ分チテ印紙ヲ貼付スルモノハ

(明治十七年十月廿八日) 內務省指令
同日內務省指令
藥品檢査手数料ハ

官民ノ別ナク之ヲ
徴收ス
令達ニ依リ試験ヲ
乞ハサルヲ得サル
モノ例ヘハ製薬ノ
試験ヲ願出ルモノ
、如キハ手数料ヲ
徴收セス

其小容器ヲ以テ一容器トス尤單ニ告示箋ヲ與フルモノハ其個數ノ多少
ニ拘ハラズ金壹圓ヲ徴ス

左ノ各項手数料ハ壹個毎ニ徴收スルモノトス

- 一 飲氷及氷雪 飲料適否鑑定 金拾錢乃至五拾錢
- 一 乳汁 單筒ナル理學的検査并 金貳拾錢乃至壹圓
- 一 酒類 定性分析 金五拾錢乃至貳圓
- 一 飲食物 全 金貳拾錢乃至壹圓
- 一 大氣及有害性瓦斯類 定性定量ニ拘ラス 全 金壹圓乃至五圓
- 一 食器中有害性金屬 定性分析 金貳拾錢乃至壹圓
- 一 衣服料 定性分析 金五拾錢乃至壹圓
- 一 礦泉 定性分析 金壹圓乃至拾圓
- 一 顏料 定性分析 金貳拾錢乃至貳圓
- 一 玩具其他着色中有等性色質 全 金貳拾錢乃至壹圓
- 一 化學製品 定性分析 金貳拾錢乃至壹圓
- 一 礦物及金屬 定性分析 金五拾錢乃至五圓
- 一 警察及裁判關係諸品 検査ノ難易及之ニ要ス 全 金壹圓乃至貳拾圓
- 一 前各項ノ諸品ハ其検査ノ難易之ニ要スル時日ノ長短ニ依リ相當ノ手数料ヲ徴收スヘシ

一 右諸品時日ヲ限リ検査ヲ乞フモノハ試験所ノ都合ニヨリ之ヲ許可スルヲ
アルヘシ然ルハ普通検査手数料ノ五倍以内ヲ増徴スヘシ

○藥品検査印紙貼用方 明治二十年六月 內務省告示第二號

衛生試験所ニ於テ醫藥用ニ適スヘキモノト認メタル藥品ニハ左ノ検査印紙
ヲ貼用ス
但當分ノ内元衛生局試験所検査印紙ヲ取交貼用ス
小形印紙離形(畧之)
右印紙大中小最小ノ四種トス

○阿片煙草輸入ノ禁 明治元年閏四月 太政官布告

阿片煙草ハ人ノ精氣ヲ耗シ命數ヲ縮メ候品ニ付兼テ御條約面ニ有之候通り
外國人持渡候事嚴禁之處近頃竊ニ舶載之聞ヘ有之萬一世上ニ流告致候テハ
生民之大害ニ候間賣買之儀ハ勿論一已ニ吞用ヒ候儀決而不成候若御制禁
相犯シ他ヨリ顯ハル、於テハ可被處嚴科候間心得違無之様末々ニ至ルマテ
堅ク可相守者也
右御達書府藩縣一同高札ニ揭示可致様被仰出候事

○藥用阿片賣買并ニ製造規則 明治十一年八月
第二十一號布告

明治三年八月布告生阿片取扱規則ヲ廢シ藥用阿片賣買並製造規則左ノ通相
定候條此旨布告候事

但施行ノ時日ハ退テ内務省ヨリ可相達事

藥用阿片賣買並製造規則

第一條 阿片ノ藥用及ヒ製造ハ藥用品ニ限リ此規則ニ依テ之ヲ許可ス

第二條 藥用阿片ハ内國產若クハ外國產ヲ論セス總テ内務省ニ於テ其品位
ヲ定メテ之ヲ買上ケ地方廳チシテ阿片卸シ賣特許藥舖ニ之ヲ拂下ケシム

第三條 地方廳ヨリ拂下ケル阿片ハ量目一匁ヲ以テ一罈トシ每罈衛生局試
驗所ノ印紙ヲ貼附スルモノトス(全上)

第四條 地方廳ハ土地ノ廣狹位置チ度リ一管内相當ノ人員ヲ限リ藥舖ノ身
元人物ヲ選ミテ内務省ニ稟議シ鑑札ヲ受ケテ之ヲ本人ニ交付スヘシ

但廢業ノ者アル節ハ鑑札ヲ内務省ニ返納スヘシ

第五條 特許鑑札ヲ受ケタル藥舖ノ住所姓名ハ該管轄廳ヨリ管内ノ公私病
院醫師藥舖一般ニ報告スヘシ

但廢業ノ者アル節モ本文ニ準シ速ニ報告スヘシ

第六條 特許鑑札ヲ受ケタル藥舖ハ其店頭ニ特許藥用阿片賣捌所ト大書レ
タル看板ヲ掲ケ置クヘシ

第七條 特許ヲ受ケタル藥舖ハ半年分賣捌ノ高ヲ豫算シ每兩年度地方廳ニ
申立テ其拂下ケヲ請フヘシ但欲乏ノ節ハ臨時拂下ケヲ請フコトヲ得全上

第八條 凡ソ醫師病院及ヒ一般病院等ニ於テ藥用阿片ヲ要スルハ其量目
並ニ其住所姓名及算日(病院ハ其名稱及院長若クハ副長ノ姓名)ヲ記シ

調印シタル證書ヲ以テ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求スヘシ特許藥舖ニ於テハ
之ヲ賣渡スニ其量目一度ニ四十匁ヲ超ヘカラス

但病院及醫師ニ於テ便宜ニ依リ一般藥舖ニ就キ之ヲ購求スルト一般藥舖
相互ニ賣買スルトハ妨ケスト雖モ必ス本條ノ證書ヲ以テスヘシ且其量目
一度ニ八匁ヲ超ニヘカラス

第九條 凡テ内外國人共醫師ノ處方箋ヲ持參シムル者ノ外ハ特許藥舖并ニ
一般藥舖ニ於テ一切之ヲ賣渡スヘカラス

第十條 特許藥舖ハ每半年分阿片拂受並ニ壹匁以上賣捌ノ高及ヒ買入ノ住
所姓名並ニ壹匁以下賣捌ノ總高等明細表正副二通ヲ造リ其管轄廳ニ差出

スヘシ尤モ壹匁以上ノ分ハ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供ス
ヘシ

但管轄廳ハ其一通ヲ内務省ニ進達スヘシ

第十一條 醫師病院一般藥舖ニ於テハ每半必シモ前條明細表ヲ差出スヲ要

セスト雖モ平常其明細ヲ簿記シ置キ臨時取調ノ用ニ供スヘシ

第十二條 藥用阿片ヲ製造セント欲スル者ハ罌粟ノ種類及培養採収製造ノ方法ヲ記シ管轄廳ヲ經由シテ內務省ノ免許鑑札ヲ受クヘシ

第十三條 阿片製造人ハ其製造シタル阿片ノ量目ヲ記シ署名調印シタル願書ヲ以テ地方廳ヲ經由シ內務省ノ買上ケヲ願フヘシ右買上ケヲ受クルノ外決シテ外國人民ニ販賣スルヲ許サス

但內務省ニ於テ其品位藥用ニ適セサル者トスルキハ地方廳ヨリ此旨ヲ製造人ニ通知シ其阿片ハ其廳ニ預リ置クヘシ

第十四條 阿片買上ケ及ヒ拂下ケノ代價ハ歲々豐凶及ヒ外國一般ノ相場等ニ因テ高低アルヘシト雖モ其品位ニ應シテ價格ヲ定ムルハ該藥主用ノ性分則チ「モルヒチ」ノ多少ニ因ルヘシ

第十五條 內務省ニ於テ買上ケ及ヒ拂下ケル所ノ阿片ノ「モルヒチ」含量ハ買上ケ品ハ百分中ニ九分以上拂下ケ品ハ百分中ニ十分以上ヲ含有スルモノトス

第十六條 此規則ニ違反スル者ハ其犯情ニ從ヒ阿片買買若クハ製造ヲ禁シ

其所有ノ阿片ヲ沒收シ百五十圓ヨリ五百圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ
○明治十一年十一月內務省甲第二十七號達

本年八月太政官第廿號布告阿片買買並ニ製造規則之儀ハ來ル明治十二年五月一日ヨリ施行候條此旨布達候事

○藥用阿片受拂手續 明治二十二年三月 內務省訓令第六號

北海道廳 府縣

地方廳ヨリ阿片卸シ賣特許藥舖ニ拂下ル藥用阿片受拂手續左ノ通相定ム

藥用阿片受拂手續

一地方廳ヨリ阿片ヲ拂下クルハ明治十一年八月第二十一號布告第四條ニ據リ特許ヲ得タル藥舖ニ限ルモノトス但外國人藥舖ニハ開港開市場アル地方廳ニ於テ之ヲ拂下ク可シ

一地方廳ハ每半年分阿片拂下ノ高ヲ豫算シ一箇年兩度ニ內務省衛生局ヘ請求ス可シ但缺乏ノ節ハ臨時之ヲ請求スルモ妨ナシ

一地方廳ニ於テ阿片ヲ拂下クルトキハ其都度藥舖ノ住所氏名外國人ナレハ其國名トモ記スルヲ要ス瓶數代價月日等詳細簿記シ置キ每一箇年會計年度ニ由ル分離形ノ報告書ヲ製シ之ニ特許藥舖ヨリ差出シタル明細表並外國人藥舖ヨリ差出シタル書面ヲ添ヘ會計年度經過後二箇月以內ニ進達ス可シ但阿片受拂報告ハ明治二十一年度ヨリ差出ス可キモノトス

一地方廳ニ於テ内外國人藥舖ニ阿片ヲ拂下クルトキハ代價引換ニ現品ヲ拂

渡り該收入金ハ二箇月毎ニ取纏メ内務省會計局へ送納ス可シ
 一特許藥舖ニ於テ阿片ヲ販賣スルハ内務省告示ノ價格ニ相當ノ手数料ヲ加
 へ販賣スルモノトス (報告書離形零之)

○阿片買上拂下價格 明治二十年一月
 内務省告示第五號

阿片製造人ヨリ買上クヘキ内國產濕潤阿片並地方廳ヨリ阿片卸賣特許藥
 舖ニ拂下タル粉末阿片價格來ル明治二十一年一月一日ヨリ左ノ通相定ム

買上價格

濕潤阿片 百分中九以上十分未満モ 百目ニ付金四圓五十錢

但「モルヒチ」含量十分以上ノモノハ本項ノ割合ニ依リ其價額ヲ増ス。

拂下價格

粉末阿片「モルヒチ」ノ量十 壹匁入壹瓶ニ付金十錢

○薄荷精ヲ製造販賣セントセン者ハ薄荷腦ノ名
 稱ヲ用ヒシム 明治十九年十月
 内務省告示第廿五號

薄荷草ヨリ製出スル結晶性ノ藥品ハ從來薄荷精ノ名ヲ以テ製造免許鑑札下
 付セル處右ハ日本藥局方ノ薄荷精ト稱スルニ付薄荷腦ト改稱ス就テハ自
 今從來ノ薄荷精ヲ製造販賣セントスル者ハ薄荷腦ノ名稱ヲ用フヘシ

○醫業

○醫師免許規則 明治十六年十月
 第三十五號布告

醫師免許規則別冊ノ通制定シ明治十七年一月一日ヨリ施行ス
 但明治十五年二月第四號布達同年八月第三拾九號布告ハ此規則施行ノ日ヨリ
 廢止ス
 右 奉勅旨布告候事

(別冊)

醫師免許規則

第一條 醫師ハ醫術開業試驗ヲ受ケ内務卿ヨリ開業免狀ヲ得タルモノトス
 但此規則施行以前ニ於テ受ケタル醫術開業ノ証ハ仍ホ其効アリトス
 第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ
 内務省ニ願出ツヘシ
 第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業証ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ
 得ントヲ願出ツルルキハ内務卿ハ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアル
 ヘシ

第四條 外國ノ大學醫學部若クハ醫學校ニ於テ卒業シタル者或ハ外國ニ於
 テ醫術開業免狀ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得

第一條 明治十六年十月
 二 同 十九日三番縣
 三 同 十九日三番縣
 四 同 十九日三番縣
 五 同 十九日三番縣
 六 同 十九日三番縣
 七 同 十九日三番縣
 八 同 十九日三番縣
 九 同 十九日三番縣
 十 同 十九日三番縣
 十一 同 十九日三番縣
 十二 同 十九日三番縣
 十三 同 十九日三番縣
 十四 同 十九日三番縣
 十五 同 十九日三番縣
 十六 同 十九日三番縣
 十七 同 十九日三番縣
 十八 同 十九日三番縣
 十九 同 十九日三番縣
 二十 同 十九日三番縣

（明治十六年五月十一日）
 同十七年（五月十一日）
 同十八年（五月十一日）
 同十九年（五月十一日）
 同二十年（五月十一日）
 同二十一年（五月十一日）
 同二十二年（五月十一日）
 同二十三年（五月十一日）
 同二十四年（五月十一日）
 同二十五年（五月十一日）
 同二十六年（五月十一日）
 同二十七年（五月十一日）
 同二十八年（五月十一日）
 同二十九年（五月十一日）
 同三十年（五月十一日）
 同三十一年（五月十一日）
 同三十二年（五月十一日）
 同三十三年（五月十一日）
 同三十四年（五月十一日）
 同三十五年（五月十一日）
 同三十六年（五月十一日）
 同三十七年（五月十一日）
 同三十八年（五月十一日）
 同三十九年（五月十一日）
 同四十年（五月十一日）
 同四十一年（五月十一日）
 同四十二年（五月十一日）
 同四十三年（五月十一日）
 同四十四年（五月十一日）
 同四十五年（五月十一日）
 同四十六年（五月十一日）
 同四十七年（五月十一日）
 同四十八年（五月十一日）
 同四十九年（五月十一日）
 同五十年（五月十一日）
 同五十一年（五月十一日）
 同五十二年（五月十一日）
 同五十三年（五月十一日）
 同五十四年（五月十一日）
 同五十五年（五月十一日）
 同五十六年（五月十一日）
 同五十七年（五月十一日）
 同五十八年（五月十一日）
 同五十九年（五月十一日）
 同六十年（五月十一日）
 同六十一年（五月十一日）
 同六十二年（五月十一日）
 同六十三年（五月十一日）
 同六十四年（五月十一日）
 同六十五年（五月十一日）
 同六十六年（五月十一日）
 同六十七年（五月十一日）
 同六十八年（五月十一日）
 同六十九年（五月十一日）
 同七十年（五月十一日）
 同七十一年（五月十一日）
 同七十二年（五月十一日）
 同七十三年（五月十一日）
 同七十四年（五月十一日）
 同七十五年（五月十一日）
 同七十六年（五月十一日）
 同七十七年（五月十一日）
 同七十八年（五月十一日）
 同七十九年（五月十一日）
 同八十年（五月十一日）
 同八十一年（五月十一日）
 同八十二年（五月十一日）
 同八十三年（五月十一日）
 同八十四年（五月十一日）
 同八十五年（五月十一日）
 同八十六年（五月十一日）
 同八十七年（五月十一日）
 同八十八年（五月十一日）
 同八十九年（五月十一日）
 同九十年（五月十一日）
 同九十一年（五月十一日）
 同九十二年（五月十一日）
 同九十三年（五月十一日）
 同九十四年（五月十一日）
 同九十五年（五月十一日）
 同九十六年（五月十一日）
 同九十七年（五月十一日）
 同九十八年（五月十一日）
 同九十九年（五月十一日）
 同第一百年（五月十一日）

ンコチ願出ツルキハ内務卿ハ其証書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授
 與スルコトアルヘシ

第五條 醫師ニ乏キ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ内務卿ハ醫術開業
 試験ヲ經サル雖モ其履歴ニヨリ仮開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金三圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ内務省ノ醫籍ニ登錄シ時々之ヲ
 公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニ由リ免狀ノ書換ヲ願
 フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ内務省ニ願出ツヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第十條 醫師廢業又ハ死亡シタルキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ内務
 省ニ返納スヘシ

第十一條 醫師其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行為アルキハ中央衛生會ノ審
 議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ
 但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖トモ本條ニ準シ處分スルコトア
 ルヘシ

第十二條 前條ニ據リ醫師禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於
 テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ内務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係
 ルモノハ幾年月日停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本
 人ニ下付スヘシ

第十三條 内務卿ハ醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査
 シ中央衛生會ノ審議ヲ經特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

○醫師開業試験規則 明治十六年十月
 第三十四號號達

今般第三十五號ヲ以テ醫師免許規則布告相成候ニ付醫術開業試験規則別冊
 之通相定メ明治十七年一月一日ヨリ施行ス
 但明治十二年二月内務省甲第二號布達ハ同日ヨリ廢止ス
 右布達候事

（明治十六年十一月十五日）
 同十七年（十一月十五日）
 同十八年（十一月十五日）
 同十九年（十一月十五日）
 同二十年（十一月十五日）
 同二十一年（十一月十五日）
 同二十二年（十一月十五日）
 同二十三年（十一月十五日）
 同二十四年（十一月十五日）
 同二十五年（十一月十五日）
 同二十六年（十一月十五日）
 同二十七年（十一月十五日）
 同二十八年（十一月十五日）
 同二十九年（十一月十五日）
 同三十年（十一月十五日）
 同三十一年（十一月十五日）
 同三十二年（十一月十五日）
 同三十三年（十一月十五日）
 同三十四年（十一月十五日）
 同三十五年（十一月十五日）
 同三十六年（十一月十五日）
 同三十七年（十一月十五日）
 同三十八年（十一月十五日）
 同三十九年（十一月十五日）
 同四十年（十一月十五日）
 同四十一年（十一月十五日）
 同四十二年（十一月十五日）
 同四十三年（十一月十五日）
 同四十四年（十一月十五日）
 同四十五年（十一月十五日）
 同四十六年（十一月十五日）
 同四十七年（十一月十五日）
 同四十八年（十一月十五日）
 同四十九年（十一月十五日）
 同五十年（十一月十五日）
 同五十一年（十一月十五日）
 同五十二年（十一月十五日）
 同五十三年（十一月十五日）
 同五十四年（十一月十五日）
 同五十五年（十一月十五日）
 同五十六年（十一月十五日）
 同五十七年（十一月十五日）
 同五十八年（十一月十五日）
 同五十九年（十一月十五日）
 同六十年（十一月十五日）
 同六十一年（十一月十五日）
 同六十二年（十一月十五日）
 同六十三年（十一月十五日）
 同六十四年（十一月十五日）
 同六十五年（十一月十五日）
 同六十六年（十一月十五日）
 同六十七年（十一月十五日）
 同六十八年（十一月十五日）
 同六十九年（十一月十五日）
 同七十年（十一月十五日）
 同七十一年（十一月十五日）
 同七十二年（十一月十五日）
 同七十三年（十一月十五日）
 同七十四年（十一月十五日）
 同七十五年（十一月十五日）
 同七十六年（十一月十五日）
 同七十七年（十一月十五日）
 同七十八年（十一月十五日）
 同七十九年（十一月十五日）
 同八十年（十一月十五日）
 同八十一年（十一月十五日）
 同八十二年（十一月十五日）
 同八十三年（十一月十五日）
 同八十四年（十一月十五日）
 同八十五年（十一月十五日）
 同八十六年（十一月十五日）
 同八十七年（十一月十五日）
 同八十八年（十一月十五日）
 同八十九年（十一月十五日）
 同九十年（十一月十五日）
 同九十一年（十一月十五日）
 同九十二年（十一月十五日）
 同九十三年（十一月十五日）
 同九十四年（十一月十五日）
 同九十五年（十一月十五日）
 同九十六年（十一月十五日）
 同九十七年（十一月十五日）
 同九十八年（十一月十五日）
 同九十九年（十一月十五日）
 同第一百年（十一月十五日）

第一條 醫術開業試験規則
 第二條 内務卿ハ毎年二回醫術開業試験ヲ舉行スヘシ但試験ヲ舉行スヘキ
 地方及試験期日ハ六ヶ月前之ヲ内務卿ヨリ告示スヘシ

第三條 （明治二十二年内務省
 令第七號ヲ以テ削除）

第四條 （同上）

第五條 醫術開業試験ハ之ヲ二期ニ分チ前期試験後期試験トス前後二期ノ
 試験ヲ同時ニ受クルコトヲ得ス

但齒科醫術開業試驗ハ全科一時ニ受クルモノトス

第六條 試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

前期試驗科目

第一 物理學 第二 化學 第三 解剖學 第四 生理學

後期試驗科目

第一 外科學 第二 內科學 第三 藥物學 第四 眼科學 第五 產科

學 第六 臨床實驗

第七條 齒科試驗科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一齒科解剖及生理 第二齒科病理及治術

第三齒科用藥品 第四齒科用器械

第五實地試驗

第八條 前期試驗ハ一ケ年以上後期試験ハ更ニ一ケ年半年以上修學セシ者ニ

非レハ之ヲ受クルコトヲ得ス

但齒科醫術開業試験ハ一ケ年以上修學セシ者ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス

第九條 前期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ添ヘ後期試験ヲ受ケントスル者ハ其願書ニ履歷書及前期及第ノ証書ヲ副ヘ毎年六月

十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月五日迄ニ其書類ヲ取纏メ内務

第八條 (内務省實職明
治十六年十一月
規期第八條ニ前期
試験ハ一ケ年半年
以上修學セシ者ニ
非レハ之ヲ受クル
コトヲ得ス)

省ニ進達スルモノトス

但履歷書ニハ其師若クハ他ノ開業醫師二名以上ノ保証アルヲ要ス

第十條 地方廳ニ於テ試験出願者中醫事ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アリ

ト認ムル者アルハ之ヲ内務省ニ具狀スヘシ内務省ニ於テハ中央衛生會

ノ會議ヲ經其情狀ニ因リ期限ヲ定メ試験ヲ許サハルコトアルヘシ

第十一條 試験問題ハ試験委員長試驗委員協議ノ上之ヲ選定シ試験場ニ臨

ミ受験人ヲシテ筆答セシムヘシ (明治二十二年内務省令第七號ヲ以テ本

但時宜ニヨリ口答セシムルコトアルヘシ)

第十二條 (明治二十二年内務省令第七號ヲ以テ削除)

第十三條 試験ニ落第シタル者ハ半年ヲ終ルニ非レハ再試験ヲ請フコトヲ得

ス

第十四條 醫術開業試験ヲ受クル者ハ試験開場ノ前日迄ニ左ノ手数料ヲ納

ムヘシ

前期試験手数料金三圓

後期試験手数料金五圓

齒科試験手数料金五圓

第十五條 受驗中疾病及其他ノ事故アリテ試験ヲ中止シ又ハ落第シタル者

ト雖モ前條ノ手数料ヲ返附セス

前修學ノ一ケ年半年
以上修學スルコトヲ
シテ三ケ年ヲ經テ
以上ハ試験ヲ許
スト云フノ意ナリ

第九條 (明治十七年六月
二十七日秋田縣
照會同年七月
内務省衛生局
答)

前期試験及第ノ証
書ヲ長ク保存セン
コトヲ欲スルモノハ
後期試験ヲ受ケン
トスルニキ本証書
ノ寫ヲ添ヘ差出ス
モ苦カラズ

○醫術開業受驗人心得

明治十六年十二月
內務省甲第二十六號告示

今般太政官第三十四號ヲ以テ醫術開業試驗規則布達相成候ニ付右受驗人心
得左ノ通相定候條此旨告示候事

受驗人心得

- 第一條 醫術開業試驗ハ當省ヨリ告示シタル試驗舉行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受クルヲ得ヘシ
- 第二條 醫術開業試驗ヲ受ケント欲スル者ハ本年第三十四號布達醫術開業試驗規則第九條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ニ差出スヘシ
- 第三條 前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期限迄ニ試驗舉行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳ニ申出ヘシ
- 第四條 試驗手数料ハ試驗舉行ノ前日迄ニ醫術開業試驗場ニ相納ムヘシ
- 第五條 試驗場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ
- 第六條 試驗中一科以上欠席ノ者ハ其期ノ試驗ヲ終フルコト得ス(明治十七年十二月內務省甲第三十五號告示ヲ以テ改正)

醫術開業試驗願

住所(寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ)

族籍

氏

名

年月生

私儀何年何月何地ニ於テ醫術開業前期(後期)齒科ナレハ醫術ノ上ニ齒術ノ字ヲ加ヘ前期後期ノ四字ヲ除ク(試驗相受度別紙書類相添此段奉願候也)(明治十八年內務省甲第二十七號達ニ依リ衛生委員ノ項ハ消滅ス)

年月日

右 氏 名 印
戸長 氏 名 印

內務卿宛

○醫術開業試驗委員組織權限

明治二十二年五月
勅令第六十二號

朕醫術開業試驗委員組織權限ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

醫術開業試驗委員組織權限

第一條 醫術開業試驗委員ハ內務大臣ノ管轄ニ屬シ醫術開業試驗ヲ行フモノトス

第二條 醫術開業試驗委員ハ左ノ職員ヲ以テ組織ス

試驗委員長

試驗委員

宮内省侍醫

陸海軍軍醫

陸海軍藥劑官

帝國大學及高等中學校教官

其他醫師齒科醫及理化學家

書記 内務屬ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 試驗委員長及試驗委員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第四條 試驗委員長ハ醫術開業試驗一切ノ事務ヲ處理スヘシ
委員長事故アルトキハ内務大臣ヨリ委員中ニ就キ代理ヲ命スルコトアル可シ

第五條 試驗委員長ハ試験了ルノ後試験委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタルモノニハ直ニ及第證書ヲ與フ可シ但及第證書ニハ試験委員長試験委員連署ス可シ

第六條 試驗委員長ハ試験了ルノ後其成績ヲ内務大臣ニ報告ス可シ
第七條 書記ハ醫術開業試験ノ事務ニ關シ試験委員長ノ指揮ヲ受ケ文書計

第二從事ス

○獸醫免許規則 明治十八年八月二十八號布告

獸醫免許規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス
右奉 勅旨布告候事
(別冊)

獸醫免許規則

第一條 獸醫ハ學術ノ試験ヲ受ケ農商務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

第二條 開業免狀ヲ得ントスル者ハ試験及其證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ届出ツヘシ

第三條 官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントス
届出ツルルハ農商務卿ハ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條 外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ獸醫ノ開業免狀ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ントス
願出ツルルハ農商務卿ハ其證書ヲ審査シ試験ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ農商務卿ハ獸醫

學術ノ試験ヲ經サル者ト雖モ其履歴ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條 開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手数料金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條 開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登録シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條 開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ其事由ヲ記シ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

第九條 開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手数料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第十條 獸醫廢業又ハ死亡シタルモハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第十一條 獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ所爲アルトキハ農商務卿其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

第十二條 前條ニ據リ獸醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ

其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ

治ハ免狀申請ニアルトキハ衛生ニテ得ス

第六條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第七條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第八條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第九條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十一條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十二條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十三條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十四條 明治十九年十二月二十二日農商務省令
第十五條 明治十九年十二月二十二日農商務省令

應印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ
第十三條 農商務卿ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ
第十四條 官許ヲ得スシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ズ

○假開業獸醫免許手續

明治十九年十二月 農商務省訓令第二十一號 北海道廳 府縣

明治十八年八月布告第二十八號獸醫免許規則第五條ニ據リ假開業免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ左ノ假開業獸醫免許手續ニ據リ取扱フヘシ

第一條 獸醫ニ乏シキ地トハ開業獸醫ノ居住所ヨリ一日中ニ往復シ能ハサル土地ニ限ルヘシ

第二條 假開業免許狀ヲ得ント欲スルモノアルトキハ甲號書式ノ願書ニ履歷書ヲ添ヘ郡區役所ヲ經テ地方廳ヘ差出サシムヘシ

第三條 假開業免狀ノ下付ヲ願出ル者アルトキハ北海道廳長官府縣知事ハ獸醫欲乏ノ土地ニ限リ區域ヲ定メ其地勢廣狹牛馬頭數等乙號書式ニ據リ詳細取調本人ノ願書及履歷書ヲ添具狀ス可シ

現行日本法令類編第一卷終

明治廿二年九月十日印刷
明治廿二年九月十二日出版

實價壹圓廿五錢

著作者

千葉縣士族
緩鹿實彰
東京麹町區有樂町
三丁目一番地寓

發行者

東京府平民
齋藤孝治
全神田區裏神保町
四番地

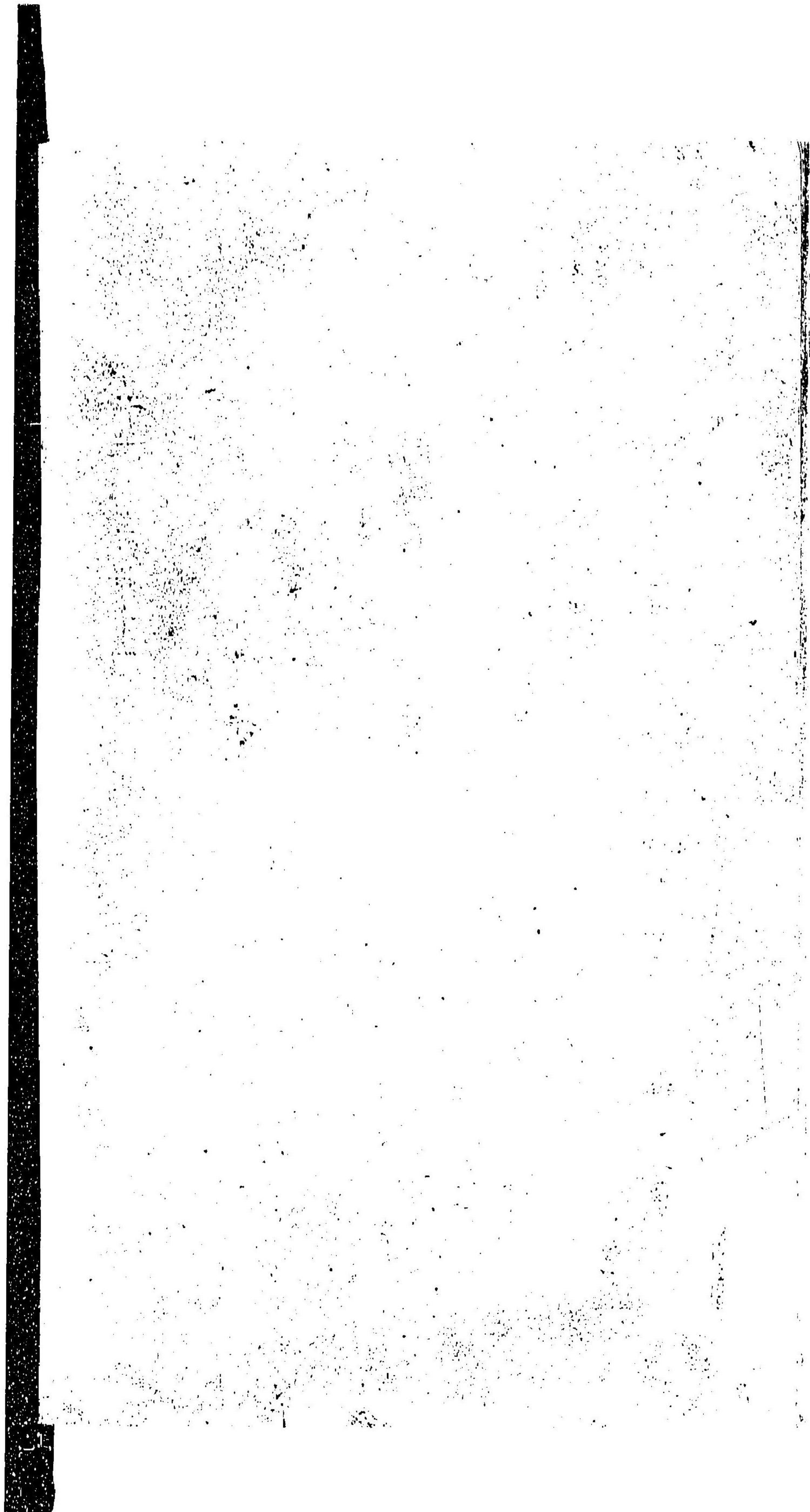
印刷者

田中正造
全神田區柳原河岸
十四號錦卷堂

發行所

東京神田區裏神保町
七番地

明法堂



禁電子式複写

030931-001-9

CZ-5-0209

現行日本法令類編

第1, 2, 4, 5卷

緩鹿 実彰/編

M22-25

BBC-0266

